特265
650

0040905000

0040905-000

特２６５－６５０

成瀬先生講演集

成瀬仁蔵・〔述〕

桜楓会出版部

第１

昭和１５

AHA

特265
650

櫻楓文庫

5

成瀨先生講演集

第一

櫻楓會出版部

特265
650

成瀨先生講演集

第

櫻楓會出版部

緒言

成瀨先生永逝廿年を記念してこの講演集を刊行す

現下の我が國の狀勢を直視すると、長期につゞく非常時と、それは又恰かも世界轉換期にあるといふ深刻なる試錬に直面して居ることを痛感するのであります。

この時、私達櫻楓會員は、私達の、母校日本女子大學創立の精神と、わが母國の擔ふ大使命、興亞の大業に召換さるゝわが日本女性の大使命を思はざるを得ないのであります。私達の恩師成瀨先生は「斯かる時、斯くあるべし」と六十年の生涯を挺してわが女性の使命を獅子吼し、永遠の遺訓を與へられたのであります。私達は今こそ其の聲を私達の信念に生かしてその使命に殉ずるの時と思ひます。

茲に、成瀨先生の講演集刊行を實現に移して、私達母校の娘が一人殘らず、この時代の要求に答へて、迷ふことなく、ためらふことなく、各自の體驗を通して、その天職に勵みたいと念ずるのであります。

この講演集の資料は日本女子大學校創立時代を中心として蒐集し、最初はこれを研究會の講本

用に年代順に分冊編輯（櫻楓文庫の形式に依つて菊半載版約二百頁標準に）刊行し、最後にこの分冊刊行完了の上既刊「成瀬先生諸研究資料」と共に整理大成して全集刊行の豫定であります。

尙分冊刊行、冊數は十冊乃至十二冊に蒐集整理の豫定でありますが、これは研究會の進行狀態に依つて或は縮少或は增大し、又發行順序も從つて多少の變更を免かれぬ場合のあることを豫め御諒承願つて置きます。

昭和十四年三月四日

成瀬先生講演集（第一）

目次

明治三十年

女子高等教育の必要を論じ併せて其の反對說に答ふ……一
女子教育振起策……一七
日本女子大學校設立の必要……四二
女子教育問題に就いて……六五

明治三十四年—三十六年三月

開校第一、二年の實踐倫理講話より
倫理學とは如何なるものか……七五
吾人の理想……七五
理想、目的、希望……七八
開校二ケ月を迎へて……八二

教授法及び試驗の方法……八六
原動力とは如何なるものか及び之を得る方法は如何にすべきか……八八
選擇と改心……九二
吾人今日の責任……九八
注意力の集注……一〇七
品格養成……一一一
修德の方法……一一五
判斷に就きて……一二〇
杖を捨てよ、自ら歩め……一二五
天職、本務……一二九
時に就きて……一三四
大器晩成……一四五
何故に諸子の直ちに着手すべき事の遲延するか……一五四
其の時の機會を其の時に得よ……一六四
予は諸子に對して二つの希望を有せり……一六六
附錄
成瀨先生講演集（第一―第十）總目次……一七二

成瀨先生講演集（第一）

自明治三十年至同三十六年

成瀨先生研究會編

女子高等教育の必要を論じ併せて其の反對說に答ふ

明治三十年三月東京帝國ホテルに於ける女子教育演說會に於て

貴顯紳士諸君、本日不肖の私が諸君の御面前に立つて卑見を開陳し、且私の熱望する所を訴ふることを得まするは實に光榮の至りに存じます。

今や、多事多望の日本帝國の代表者たる諸君の前途には、政治問題や、社會問題や、其の他種種の時事問題や、國家百年の計畫など實に澤山の問題が山の如くに横はつて居ります。

諸君は凡て之等の問題や、經營に就いて、討議研究を凝らされ、之日も足らずと云ふ有樣で御座いますが、之等の問題の中には、確かに教育問題が入つて居やうと存じます。此の教育問題は、貨幣問題のごとく、築港問題のごとく、國防問題のごとく、外交問題のごとく、殖産商業に關する問題のごとくに焦眉の急務と云ふべき問題でなく、ずつと後廻しにしてもよい問題でありませうか。私は斷じてさうではないと考へます。如何となれば、公平無私の心を以て全般の問題を考究するに當りまして、段々煎じ詰めますと結局は必ず教育問題に歸着せざるを得ないのであります。善きも惡しきも其の源を尋ねますと、何事も多くは教育の善惡に因ります。支那に勝つた、支那が負けたと申しても、其の功果は必ず教育に歸します。社會が腐敗する、風俗が紊亂すると云つても其の本は心にあります。家庭にあります。遺傳にあります。其の心、其の遺傳、其の家庭の善惡は、多くは教育より來るもので決して自然のみではありません。我が兵の體力が弱い、體軀が小さい、丈が低い、之は如何にすべきか。教育に依るより外仕方は御座いませぬ。國が貧乏だ、如何にして之を救ふべきか、大いに殖産工業を起し、大いに商業を營むべきでありますが、之を起し之を營むには知識が必要であります。然るに知識を與ふるものも亦矢張り教育です。勿論之は私が喋々するまでもありませぬ。この重要なる教育問題は、早晩必ず社會に起るべきであります。否、既に起りつゝあるのであります。既に其の徵候が見えて居ります。之れを要するに

教育は實に國家の盛衰、消長の因であります。一體國家の滅亡する所以のものに二つの原因があります。一つは外部より來るもので、他の一つは內部より發するもので御座います。外部より來るものは、兵力でありますから、又兵力を以て之を防ぐ事が出來ますが、內部より發するものは其の發するや隱微の間に徐々として發します。恰も深夜熟睡中洪水に襲はるゝ樣なものでありまして最も油斷のならぬ大敵であります、强敵であります。而して此の强大な敵を防ぐものは教育の力で御座います。教育はたゞ之を既發の後に防ぐのみではありません。まだ敵の起らぬ前より之を防ぐべきであります。啻に之を豫防するのみでもありません。國家をして益々健全鞏固の成長を遂げさするものであります。故に古今東西の區別なく教育の振ふ國は榮え、教育の衰ふる國は衰微して居ります。ペルシヤが往古西亞の天地に雄飛したのは乘馬に巧みに、弓術に長け、虛言を吐かぬ、といふ教育主義が雄飛させたのであります。ギリシヤがマラソンの役で彼のペルシヤの大敵を歐洲の天地から打ち拂ふたのは、希臘の尙武主義教育が打ち拂はせたのであります。殊に女子教育が有力でありました。母親が其の子の出陣の砌りに楯を與へて「敵を殺すか然らざれば自ら之に乘りて歸れ」と命ぜしが如きは其の一例であります。卽ち此の尙武的精神を先づ第一に婦人に吹き込んだ。羅馬に於ても、尙武教育の旺盛を極めた時代は、ローマ帝國膨脹の時代でありました。我が國でもさうであります。德川幕府の隆盛を極めたのも代々の將軍が、教育

を尊重奬勵したからであります。斯樣に國家の興るのは教育の振ふによりますが、其の亡ぶるのも亦教育によります。德川幕府の亡びたるも、ギリシヤ、ローマの亡びたるも、教育の道を過つたからであります。故に今日に於きましても、競つて教育を盛んにするといふのは歐洲諸國の實況であります。佛國の敗軍、獨逸の勝利は、教育の勝敗だといふ程になつてをりまして、其の後佛國は大いに教育、殊に女子教育にも着眼する樣に立ち至りました。

然るに我が國の教育の現狀は如何でありませうか。振つてをりますか。完備してをりますか。普及して居りますか。今日の有樣で安心して居つて宜しいでせうか。一體國民を教育してをりますものは、天然と、社會と、家庭と、學校でありますが、天然は國民を教育するに有力なる感化力でありますが、是は人爲を以て自由に變更する事が出來ませんから論外と致しまして、先づ學校教育の現狀より考へますと如何で御座いますか。人口凡そ四千五百萬の我が國と、人口凡そ六千萬の北米合衆國との狀態を比較して見ますと、日本には大學が二校と高等學校が六校で、而も此の二つの大學と六つの高等學校は無論女子に入學を許してをりません。——本邦で女子に高等の教育を授けて居るのは女子高等師範學校のみであります。——其の內專門教育を施すものは唯一校のみです。而して米國に於きましては、大學と稱するものは三百五十七校で、其の中女子に入學を許すものは實に二百三十七校で、又東部には純粹の女子大學が九校もあります。又大學女生の

總數は四萬二千六百六十三人で、男生六十に女生四十の割であります。我が國では、大學に女學生といふものは勿論ありませんが、專門學校に於きましては、男生九十九人に女生一人であります。中學校では、我が國では男生九十人に女生十人でありますが、米國では公私平均で、男生四十五人に女生五十五人であります。本邦の師範學校では、男生九十一人に女生九人でありますが、米國では、男子十七人に女生八十三人であります。普及すべき普通教育に至つても、學齡兒童と就學兒童との比例は六十と四十であります。故に百につき六十は、いろはのいの字も知らぬ國民を造つてをる有樣です。而して小學正教員の不足は現今二萬人といふ多數であります。之はほんの大略でありますが、之でも本邦教育の上進と普及の情況は大抵解らうと思ひます。加之、學校教育の精神といふものが遲れてをります。學校といふものは知識は與へるが人物は却つて惡しくするものだと思ふ樣になつてをります。目下流行の學校騷動といふものも、詮ずる所教育の精神が鈍れてをるから來るもので御座います。

併し學校教育の不首尾といふものを、悉く學校教育の過失の樣にいふ事が流行つてをりますが、其の過半は家庭も其の責めに當らねばなりません。遺傳といふものは個人の發達を妨げ、又は促すものでありますが、其の由つて來る所は主として家庭にあります。故に遺傳から云つても家庭の善惡は大切なものであります。又小兒教育より申しますれば、家庭は其の全權を掌握して

居ります。或西洋の教育家が「小兒の教育は生前二十五年換言すれば父母の教育より始めざるべからず」と云つたのは遺傳の大切な事を云つたものであります。又本邦で「三つ兒の精神百まで」といふのは、家庭教育の必要を云つたものであります。又小兒が學校教育を受くる樣になりましても、なほ家庭教育は教育の大半部を負擔してをります。然るに小供の教育を學校に一任して顧みず、若し小兒の品行が治まらぬ時は罪を學校教育者に歸する事を知つて、家庭が大いに之を妨害して居ることを顧みないのは誤りの甚だしきものであります。近衞公爵も御述べになりましたが、教育に從事して居る者が一番困つて居ることは、家庭教育の不完全と云ふ事である。幾ら學校で氣を揉んでも家庭が悪ければどうしても教育する事は出來ない。それで私は、今日の教育界にある弊害と云ふものは大部分は家庭に其の罪を歸せねばならぬ。そゝて今日の現狀はどうしても家庭教育が完備し、振うて居ると云ふ事はできぬと思ひます。

次ぎに教育は學校と家庭のみでは出來ぬ、是非とも社會教育の加勢を得ねばなりませぬ。——社會が善くなければ本當の教育は出來ない。天然教育と、家庭教育と、學校教育と、社會教育との四つが揃はねば人を作る事は出來ない。然るに目下の社會は教育を妨げてをるではありませんか。青年を腐敗に導く所の機關は全備して居る。青年を鈍らす所の勢力は振うて居るが、社會の青年を教育し國民を教育する點に至つては、亂れて居るばかりでなく實に眠つて居ります。そ

れは私が此所で申す必要はないと思ひます。街を歩いて直ぐに青年の耳に入り、青年の心に入るものは何かと云ひますと、如何はしき音樂であります。其の他演劇、文學、奢侈、遊惰の悪習、輕薄、懦弱、射利、奔名の弊風は打揃うて蠟の如き柔かき腦髓に不道德の印を押して居りはせぬか。然るに之に反抗すべき社會教育の機關は備はらず、その弊風を矯正するの勢力は微々たるものであります。之を亞米利加の社會教育に比較すれば、我が國は大いに之を怠つて居ると思ふ。是は一一此所で申す事は出來ませんが、亞米利加で男女とも高等の教育を受けた者は、社會教育に目を着けない者はない。色々な所に住居を定めて教育の無い者と交際を求めて社會の勢力の及ぶことを望んで居る。即ち大學殖民であります。又通俗講談に非常に金を掛ける。然るに我が國では大學通俗講演會のみで、而も之も未だ社會的教育力とは成つてゐない。又米國にては音樂といひ、美術といひ、大いに教育的勢力を振うてをります。其の他倶樂部とか一々其の例を擧げたいのでありますが、時間もありませんから申す事が出來ませんが、是皆國民教育をしようと思ふならば、社會に大いに注意を要する譯であらうと思ひます。然るに我が國にては、社會的教育は殆どその緒についてもをりませぬ。其の勢力となるべきものは皆敵となつてをる有樣であります。此の樣に先づ外形から見て私共は我が國の教育は振うて居る、是で宜しい、是ならば我が日本國民を養成するに足るとはどうしても思はれません。

此の樣に振はぬと云ふ事、色々足らぬ所があると云ふのは此所に一の原因があるのです。是は教育の精神が鈍つて居る、即ち精神がない。教育が機械的に流れ、形式的に陷つて居りますのも詮ずる所教育の精神が鈍つて居るからで御座います。是は社會にも家庭にも學校にも、教育と云ふ精神が鈍つて居るからであらうと考へます。私はケンブリッヂに暫く居りまして、ヘネスと云ふハーヴアード大學の教育學教授と交際致しましたが、ケンブリッヂは亞米利加で一番教育の盛んな所であります。然るに自分の娘が十六、七になつて居るのに學校に遣らない。なぜ遣らぬかと云ふと學校教育を不完全と思つて居る。それで夫婦かゝつて家でやらせて居る。時の無いのに自分で教育して居るのはそれだけ教育と云ふ事を重んじて居るからでございます。我が國では如何でありませうか。兩親が子女を學校へ遣ればそれで教育は出來るものと思つて居るが、教育は學校にのみ任せて決して出來るものではありません。學校は唯家庭教育を補ふものである。然るに家庭教育を面倒に思つて、構はずして、唯學校に任せて置けば出來るものと思ふのは大變な間違ひである。其の他亞米利加の小學校でも大學校でも廻つて視ると必ず一つの新說を聞きます。新發明を見ることが出來ます。其れはどの大學に行つても教育學の講座を設けて深く教育學を研究し、常に新發明を爲しつゝある。之は何れの大學にもある。然るに我が帝國大學に於ては文科に於て唯一つ教育學の講座がありましたが、故日高文學士が死なれて其の後を繼ぐ者がない。廣い

日本に一つの教育學の椅子を保つて行く事が出來ぬ、又必要がないとは如何に教育思想に冷淡であるかと云ふ事が之で分る。色々の事業の中で、一番目に見えぬのは教育である。教育はどうでもよい。教育家に任して置けば我が輩の知る所でないと云ふ樣に教育の精神が鈍れて居る。故に教育が振うて來ぬのである。精神のない身體は死んだ身體である。精神のない教育は骸骨同樣と云はねばならぬ。

それで私が日頃感じて居りますのは、どうしても我が帝國を偉大にし、國民を育つる上に於ては、教育の精神を社會全般に吹き込まぬ以上は發達致しませぬ。一般社會に吹き込まうとすれば、是非之を女子に吹き込まねばならぬ。然るに女子教育は如何に待遇されて居るかといふと、一番振はぬのが女子教育である。一番人から嫌がられるのも女子教育である。一番人が冷淡にするのも女子教育である。女子教育と云ふ聲を聞くさへ人心を寒からしむるといふ有樣であります。斯ういふ不遇の有樣に陷つて居る。さうして斯ういふ有樣を招いたのは、一は社會の罪である。又男子の罪である。又一は失敗の罪である。又弊害の罪である。

併し弊害があればある程益々之に從事せねばならぬのではありませんか。不完全であればある程愈々之に熱中せねばならぬのではありませんか。然るに失敗に辟易し、弊害を恐れて、女子教育を擯斥し、又は之を冷遇するのは目下一般の傾向ではありませんか。是實に遺憾千萬なるのみ

でなく、實に國家の一大不幸であります。之が私共が日本女子大學校を創設せんとする所以であります。之に依つて教育の精神を社會一般に吹き込み、之に依つて女子教育の弊害を矯正し、之に依つて女子教育の普及改善を計り、之に依つて女子教育の模範を造り、之に依つて家庭の刷新を促し、之に依つて社會の風習を改め、之に依つて教育一班の發達を助けんと思ひます。之日本女子大學校を創設する所以であります。目的であります。茲に其の方針と方法を充分に述べたいと思ひますが、到底僅少の時間では述べ盡す事は出來ませんから、今日は只日本女子大學校といふ新しい名を公に致しますに就き、直ちに諸君の心頭に浮び來る疑問に答へるだけに致したいと存じます。

（第一の疑問）は、女子に大學が必要なりや、といふ事でありませう。今女子大學の盛んなる英國に於きましても高等教育を授けんとするや、反對論者は「女子高等教育を主張するは神に對しては罪惡、政府に對しては叛逆だ」と申しました。米國にても今より二十有餘年前女子大學を設けんとする際に世人は嘲弄して「女子の爲に大學を設くるは恰も猫に學校を設けてやるのと同一だ」と申しましたが、今日は最早かういふ説を吐くものはなからうと思ひます。

（第二の疑問）は教育の順序を誤つては居らぬかといふ論でございますが、女子大學校と云つても帝國大學に比する樣なものではございませぬ。又米國の樣にせねばならぬと云ふのでは素よ

りありませぬ。今日は女子教育が尙不完全であるからもう少し向上せしめ之を完備に至らせたいと云ふのであります。徒らに學料のみを高めようといふのでもありません。併し學理を構はぬと云ふのでもありません。學理も大切なものと思ひます。看病にしても、料理にしても、家庭の事にしても、精神上の事にしても、十分改善しようと思へば學理も高める必要があります。けれども順序を誤つて教育を施す積りではありませぬ。本邦現時の女子の體力智力に應じて順次に向上するの策を取る積りであります。（女子教育振起策（一七頁）を參考すべし）

（第三の疑問）は女子大學は初等教育の妨げにならぬかと云ふ説が起るのでございますが、私は之とはまるで反對に考へるものであります。大學校を起すのは、女子教育が普及せぬ故之を起して普及を計らうと云ふのでございます。我が國でも最初に初等教育が出來ぬからと言つて大學校を起さなかつたならば、今日の如く初等教育は普及せぬ。亞米利加でも大學校が多く起つて初等教育が發達したのであります、其の理由は多くございますけれども、是も略して置くことに致します。（是に關する理由は女子教育振起策に詳論せり）

（第四の疑問）は女子大學校はまだ早い其の時機が來ないと云ふ事でございます、是も他の國の歷史に就いて考へて見ますと同じ事である。さう思ふのは當然で、今から二十年前マサチユーセツツに於て、スミス女子大學校を起す時にも反對が有りました。今でも此の大學の總理シーリ

ーと云ふ人が二十年前、即ち該大學を起す時に二十年間に四十人丈けの大學生を得るに至れば滿足だと思つて居つた。此のシーリー氏は二十年前に之を必要と認めて着手したが、二十年後の今日現在生八百人以上居る。卒業した者は何千人であるか實に多數であります。然ればその時にそれ丈けの必要があつたのであります。是が必要になつてから着手しても間に合はぬ。大學校は段々に成長せしめねばならぬから今日より二十年 三十年 五十年 先きの事を考へて着手せねばならぬ。急に其の必要があるからと云つてやつても役に立たぬのであります。且現在高等女學校を卒業し、それより進むの道なきに苦しむものも隨分見當ります。故に早過る事はないと思ひます。

（第五の反對）は學校が是迄の程度ですら女が生意氣になる。然るにいま是より程度が高くなつて尙生意氣になればどうするかと云ふ事でありませう。學問が女を生意氣にすると云ふものは無實の罪を教育に嫁するものである。成程今日の女性は生意氣な人が多いが是は教育の罪にあらずして教育法の罪である。又教育者の罪である。此の頃、或學者先生に面會致しましたが、其の時先生は女子教育は反對である、小學校でよい、それから上に行くと生意氣になるといはれましたが、私は先生の樣な高慢な人に教育を受くれば男でも生意氣になると言ひたかつたのであります。さう云ふ人に教育を授くれば生意氣になりませうが、教育は人を謙遜にするものである。亞

米利加は婦人の權利の盛んな所で女の活潑な所、惡くいへば女の粗暴な所であるけれども、此の粗暴を直すのは教育である。亞米利加を彼方此方へ行くと女は粗暴である。けれども大學校に這入つて學んだ婦人の家庭に行けば女らしくて、惡いものを退けて仕舞ふた良い女がゐる。教育が高慢心を造るにあらず、教育法と教育者が惡いのでありませう。男でも生半尺の教育をすれば生意氣になる。本當に學問が出來た人は謙遜である。生意氣は半ば學問の熟せぬ書生にある。人間は知識が高まるか、地位が進めば謙遜で柔和になる。心が淸くなる。小役人より大臣になれば謙遜である。亞米利加でも總理とか校長とか云ふ樣な人は柔かく小供らしい。地位が進む程謙遜なものであります。私は高等教育をして本當に女を造つたならば、本當に女に高い知識を與へればさういふ弊を矯める事は出來ると思ふ。今日女學校の弊は、教育を與へずして直すことは出來ぬが、教育を與へて直すことは出來ると思ふ。

（第六の疑問）は、德育法はさうであらうが主義はどうか。純粹の日本主義か、歐米主義かと云ふ說があらうと思ふ。私は內を主にして外を客にし、武士風家庭の精神を標的として之を補ふに外國の長所を以てするのであります。即ち忠孝節義の如き日本固有の美德は益々之を發達進化せしめ、同時に諸種の缺點は之を矯正し、萬國の最も秀でたるものを取つて、我が國のものにしたいと云ふ考であります。

（第七の疑問）は學校教育は人情に疎くなる、世に處する事を知らぬやうになる、交際が下手になると云ふ評でありますが、是も本當であります。是も寄宿舍で養うて居るのであります。寄宿舍は大いに改良せねばなりません。今日あるものは兵營的で、監獄的であります。故に寄宿舍を家庭の樣にせねばならぬ。人は溫かい內に育てねば溫かい心を持つた者にならぬ。今回は寄宿舍にては一軒を家族制に改めまして、數多の別戸寄宿舍を設けて各戸を一家族と見做し、全舍を一族親類と見做し、家具裝飾等本邦家庭の善良なるものを模範と致し、日々家庭の生活を營む樣にしたいと思ひます。されば掃除もせねばならず、お客の相手もせねばならず、面倒も見ねばならず、萬事家庭の境遇に遠ざからぬやうにせねばなりませぬ。ですから中の仕組みも家庭の樣にして、母の樣な舍監を置いて、其の中に家庭の樣な精神を吹き込みたいと思ひます。

（第八の疑問）は、それはよいがさう云ふ舍監が在るかといふことでありますが、是が素より我が國で一番困ることであります。けれども私は此所でさういふ人を造らねばならぬと思ふ。どうも善い母がない、善い妻がない、善い教師がない、故に此の學校の必要が起るのであります。併しながらさう善い教師は皆無かといふとさうでもないから、今稀にある人物を集めて追々此の目的を達するの法はあると思ひますが、是も時が足らぬから、今日は略さうと思ひます。是迄に八つの疑問に答へましたが、之は精神上に關する疑問でしたが、尙身體上に關する疑問が必ず出

ると思ひます。

それは、女に教育を授ければ女を弱くすると云ふ說があります。私は之に反對の考を持つてをります。日本人は弱くつて、小さい。是は丈夫にならねばならぬから高等教育をせねばならぬ。成程女學校の生徒は弱いとか背が屈んで居るといふ統計を見る。男子の大學校もさうである。大學校に這入ると段々弱くなる。體重が減つて來て弱くなると云ふ。昔から學問で死んだ者が隨分ある。亞米利加でもさうであつた。クラークといふ人の書物にも多くの女子教育の弊が擧げてあるけれども、今日は米國にてはまるで違つて居る。今日は大變丈夫になつて、學校に入つてから卒業して出る迄には、肺活量が增えて居る。身體が重くなつて居る。又學校外の婦人よりも學校內にある婦人が健康である。男子もさうで大學生徒は身體が重くなつて居る。それは體育の奬勵と體育學があつて、大學生徒も兵隊や力士が身體を鍛ふやうにやつて居る。每日統計をとつてやつて居る。女子の方もさうである。最う一つは體育學と云ふものが起つた。是は昔から國の榮えた所はギリシヤでも、羅馬、獨逸でも、英國でも體育を重んじて居る。又體育學が盛んに行はれて居る。是は醫學と生理と解剖から成つて居るもので、醫學の知識を女子に與へねばならぬ。又國民に與へねばならぬ。是が日本女子大學校に體育部を置いた所以であります。體育の教師を拵へて之を諸方の女學校へやつて、此の體育の精神を起したいと云ふ考でございます。英國の諺に、人

は三十に成れば醫者か馬鹿かと言つて居る。米國にては年二十に成つて身體自衛の道を知らない婦人は馬鹿だと申しますが、自衛の習慣と知識とは女子の身體を健全にし、道德を健全にし、かつ小兒を健全にするに是非缺くことが出來ません。故に日本女子に醫學の知識を與へねばなりません。其の他日本の女子に是非教へねばならぬ事が澤山ある。又之を實行させねばなりませぬ。故に女學生には時間の許す限り自炊又は洒掃の勞を取らせて、勞働を習はしめ、勞働は神聖なるものである。決して嫌惡すべきものでない、輕蔑すべきものでない、といふ事を知らせ、かつ身體と心靈をも鍛はせねばなりませぬ。それで高等教育を主唱するのは身體を惡くするにあらずして之をどうか取戻さうと云ふ企であります。

是迄種々申上げましたが、時がありませぬので、是で終りますが、諸君の中に私の說に御同意であつても、或は反對の點が有るにしましても、女子の教育と云ふものは、國民の爲一日も忽せにすべからざるものであるといふ事、今日の儘で拋つて置くべからざるものであると云ふ事は、御同感であらうと思ひます。どうか諸君は、此の女子教育の爲に御助力下さる樣に切望致します。尙先輩諸君の御高諭を仰ぎたいと希望致します。（女子教育演說）

女子教育振起策

神戸市帝國教育會に於ける演說

今日は、教育に熱心なる諸君の前で、不肖の私が聊か卑見を述べる機會を得ましたのは、誠に光榮と存ずる所でございます。所が私の題は「女子教育振起策の一端」と云ふ題でございまして勿論學理學說を講ずる積りでなく、唯私の所懷の一端を諸君にお訴へ申すのでございますから、住々卑近に亘るかも知れませぬが、其の邊は前以て御了承をお願ひ致して置きます。

私は數年前に亞米利加に遊びましたが、ボストンへ着するや間もなく某紳士の饗應に與つたことがあります。其の席上で、話の序に私は一の問を出したのであります。即ち「貴國では青年と云へば、何れ位の年恰好の者を云ひますか」と尋ねた。然るに其の答は「二十五才から四十五才まで」と云ふことでありました。次ぎに私が饗宴に招かれた時に、其の席上での慷慨談の中に、「私がもう少し年齡が若かつたら云々」と云ふ言葉を使つた所が、一座から大に笑はれました。其の譯は二十五才から四十五才までを青年と云ふ亞米利加人の眼には、私位の年輩の者は「ボイ」と思つて居る。米人は斯う云ふ氣風でありますから、日本とは種々と違つた現象を度々見ま

す。私はボストンから極く近い所のアンドバアーと云ふ町に往きまして、或家に泊つて居りました。所が間も無く其の隣家に婚禮があつたのですが、其の花嫁さんは六十二才で初めて婚禮をするのでありました。又聟さんも七十才以上の人でありました。夫れから私は此の家の人と心安くなつて、度々馳走などになりましたが、六十以上で始めて婚禮すると云ふことは甚だ不思議に思はれた。それから又もう一つの例は、男子の方は四十才位でお嫁さんは三十五才で結婚しました。それから三年ばかり經ちまして、私はずつと中央シカゴの方に旅行をして其の近隣の町に往つた時に、前に申しました友人の親の所に一寸よつた。是は此の友人の父親とさうして其の妻の母親とが自分等の子供より後に婚禮をしたので、その年齢は双方六十才以上であつたのであります。學生間にも隨分日本では老人中に數へられ隱居でもしさうな年輩の者が往々居ります。私が或大學に這入つて見ますと、其所には四十五才の學生が居りました。此の學生は二十年間新聞記者であつた人で妻子を携へて來て居りました。さうして其の娘は既に十八才で、父と同じ學校に勉強して居りました。又或女子大學に參觀に行きました所が、其の時恰も五十五才の老媼が入學したと云つて居りました。勿論斯う云ふ例は澤山だとは申しませんが、三十才以上の學生は隨分澤山居ります。日本では斯う云ふ例は先づ皆無と云つても宜しからうと思ひます。私は日本人も米人の樣に七十才前後になつても婚姻すべしとか、又は妻子を携へても、老婆になつても、勉強

せよとは強ち申しませぬが、兎に角日本人も米人の樣に若い氣を何時迄も持つて行きたいものだと思つて居ります。

扨て、私共が皆能く知つて居つて別に耳新しいこともありませぬが、吾が國少壯男子の好んで口吟する所の名句に「男子立志出鄕關學若不成死不還」と云ふ句が御座います。又「自喜豪氣猶未摧、每經一難一倍來」といふ句は年を取つても困難に出逢うても、豪氣は益々强くなるといふのであります。是等の句は、よく偉大な人物の氣象を描出して居るものと思ひます。此の精神、此の活氣、此の元氣を缺きました時には、齡が幾ら若くとも、幾ら身體が丈夫な人間でありましても、それはもう役に立たない。老朽なる、もう望みを屬するに足らない所の人であらうと思ふのであります。偉大な人物の資格に種々ありませうが、兎にも角にも如何なる境遇に立ちましても、如何なる境遇に際會致しましても、又如何なる困難に出逢ひましても、どう云ふ强敵に攻擊されましても、此の精神、此の氣象、此の元氣を持ち續けて、何時々々迄も、進み進んで常に偉大にならう、偉大にならなければならぬと云ふ氣象を持つて居る者が、取りも直さず偉大な人物であらうと思ひます。それで古今俊傑と呼ばれ、或は君子と云はれた人の事蹟を考へて見ますと其の頭髮は眞白になり、頰骨は高く秀でて身體が自由に利かないといふ年になりましても、其の精神は活氣に滿ち滿ちて、奮勵勇進して往く、何時迄も向ふに往くと云ふ氣象のあるものでござ

います。斯う云ふ者は仙人とも云ふべきもので、常に綠髮童顏の有樣でございます。併し是に反して齡は假令靑葉の如く若くても、その精神に活氣なき者は恰もあの枯葉の萎縮して、生命もなく光澤もないと同樣でございます。それで斯くの如く年齡は若くとも、其の精神は既に業に萎縮して仕舞つた、活氣のない年若い老人靑年は其の生涯に於て、決して見るべき程の功績が擧がらぬと云ふことは分り切つた話だらうと思ひます。是は一個人に就いて眞理であるのみでなく、又國民の上に照らしても同じく眞理であらうと考へられます。

然らば、我が日本國民は小壯有爲の日本國民でありませうか。將た老成を氣取つて居る年若い老人國民でありませうか。之は今日我々國民たる者の考へねばならぬ所の問題であらうと思ひます。之を歷史に徵し、事蹟に照らしますと、我が大和民族が呱々の聲を敷島の大和島根に揚げまして從り、爾來實に二千五百有餘年の長い歲月が過ぎ去つて居ります。決して若い國民とは言はれない。併しながら、我が日本國民と云ふ者が、世界列國の間に立つて獨立自治の體面を以て待遇さるゝ樣になつたのは、つい明治二十七、八年役後でありまして、其の發達上に於きましてはまだ〳〵若い國民であらうと思ひます。此の二千五百年と云ふ長い月日は、此の日本國民が一大國民とならんとする豫備に過ぎないであらうと思ふのでございます。それで、今や我が日本國民は少壯期に達したばかりの國民であるから、遠大の志望を抱き、元氣に滿ち、活氣に富んで、是

から進まなければならぬ。是から志を立てゝ往かなければならぬと云ふ氣象を大いに抱いて居らなければならぬと思ひますが、併し之は一の疑問であらうと思ひます。卽ち我が日本國民は果して然るや是が疑問であります。若し不幸にして萬が一にも、彼の國民的識見もなく、國民の統一の必要なることも感じない無教育極まる支那人に勝つた位の些々たる事で嬉しがり、歐米の制度文物を輸入消化した位な幼稚な事柄を以て、やれ文明だとか、開化の國民だとか云つて鼻を蠡して、進み進んで止まないと云ふ氣象を鈍らす樣なことがあつては、此の日本國民も岌々乎として又危いかなではありませぬか。

諸君、我が日本國民は遠大の志望を抱き、活氣に滿ち滿ちて此の後幾萬年を經るとも、希望を加へ、何時までも進步發達して偉大なる國民になりたいと云ふ精神を持たせたいと云ふことを、お互に願ふのは、當然であらうと思ひます。如何すれば我が國民は偉大に發達するかと云ふに、前に述べました所の精神が無い以上は決して大きくなる事は出來ないのであります。此の元氣、此の精神が、何時も國民の心中に滿ち滿ちて居らなければ決して國民は偉大になれません。

私が此所に偉大なる國民と云ふ字句を使つて、さうした富强の國民と云ふ言葉を使ひませんのは、此は少し思ふところがあるのでございます。富强の國民と申します時には物質的方面に傾いて居るところの國民の發達を表す言葉でございます。偉大の國民と申しますれば、此の物質的發

達に加ふるに、精神的發達を以てして居りますからして、一方に偏しない、完全に發達する國民を表します言葉であると思ひますから、私は故意と偉大の國民と云ふ言葉を使ひました。固より私は兵が強くなり、國が富むやうになるのを欲しないのではない、其の必要を認めぬのではないのでございます。今日軍艦を殖やし、兵力を進めなければ、決して我が國の體面を維持して行かれないと云ふことは誰にも分つて居る話で、兵力を進めようとするには、益々富の力を借りなければ出來ないと云ふことは分り切つた話である。併し乍ら此の富强と云ひ、又物質的の發達といふものは、精神的發達に基礎を置いて兩々相伴うて進歩しなければ決して健全强固の發達を見ることは出來まいと思ふのであります。

然らば即ち日本國民を少壯にし、國の精神を若くすることが國民を偉大にすることになるかと云ふに、是は固より申すまでもないことで、此の日本國民は老成を氣取つて小成に安んぜず、何時も少壯の若い氣になつて、大志を抱いて活潑に活動して進歩發達してゆくならば、偉大になるまいと欲してもならざるを得ないのであります。固より前に申した如く、此の國民を若くすると云ふことは、年齡を若くすると云ふ譯ではない。年齡は幾ら多くなつても構はない。唯國民が理想を有ち、抱負を抱き、大志を立てゝ進み進んで目的に向つて行くならば、それが即ち少壯になると云ふ譯であらうと思ふのであります。而して此の國民の國家的觀念から出た高尙なる思想、及

び遠大の思想を湧き出さしむる原動力を作り出して來るところの源泉は何であるかと申しますならば、是は申すまでもなく、教育であります。教育と云ふものは、一方には國民に理想を抱かしめ大志を樹立せしめ、又一方には其の大志を成就せしむるものであります。

然るに教育と申しますと、直ぐ樣誰でも男子教育のことより考へないと云ふのは、世の通弊であらうと思ひます。併し女子教育と云ふものは此の教育の根源である、基礎であります。勿論教育と云ふものは、家庭教育の本尊たる女子教育から着手しなければ決して本當の發達はしないものである。根本基礎を持たないところの教育は架空の教育である。それで女子教育を缺いて居る所の教育は片輪の教育どころではない、根本、基礎を缺いて居るところの教育であると思ふ。

是れは教育家諸君の明らかに御承知のことであらうと思ひます。常に感ぜらるゝところであらうと思ひます。そこで女子教育を缺いて居る國は亡國にあらざれば弱國でありませう。然らざれば野蠻國でありませう。是れはもう誰も否定することの出來ない古今、東西の歷史に顯れて居る所の明らかなる事實だらうと思ふのでございます。それで私共は此の國家の基礎を築いて、眞に此の國民を偉大にしようと思ふならば、どうしても女子教育を盛んにせねばならぬ、女子教育から始めなければならないと云ふことは實際であらうと考へます。然るに國民を偉大にするに缺くべからざる女子教育と云ふものは如何であるか。日本の臣民は此の教育に對して、如何なる觀念

を持つて居るか。若し今日戰後の經營としまして、國防や殖産工業にのみ力を入れて、百年の大計を定めんとしたならば、――而して、教育事業を後廻しにするやうなことがございましたならば、我が國は一時勝利を得るも、其の榮譽を永久に維持して往くことが出來ませうか。將來一旦緩急がありましたときに、我が國威を損しないと云ふことが出來ませうか。世界に頭を出した日本が世界列國文明社會に立つて、彼等と肩を竝べて文明社會を乘りきつて往くことが出來ませうか。固より日本の教育は日進月歩の有樣であります。決して進まないとは申しませぬ。併しながら、日清戰爭以後の他の事業の勃興に比較致しますと、誠に嘆息すべき節々が澤山あると云ふことを自ら感じて居るのでございます。

今是を實際に照らして少し考へて見たいと思ひます。……米國に於ては千八百八十八年の調査に依りますと、大學女生徒、但し男女混合大學或は女子大學の區別なく、總數は四萬二千六百六十三人であります。實に全合衆國男女大學生の百分の三十以上に位して居ります。然るに其の後七ケ年間に於ける女子高等教育の進歩は實に著しいものでありまして、女生徒の數も段々增加致し、新たに出來た大學も少くありませぬから、從つて女子生徒の數も增して居ることは疑ひはありませぬ。今二、三の例を擧げますれば、當時スミス女子大學の生徒の數は四百名でありましたが、一昨々年私の參りました時には七百五十名以上に達して居りまして、校舍を增築しなければ

新入生を入るゝ餘地がない有樣でございました。ブリンモーア女子大學は當時創立の際でありまして、女學生百名に滿ちませんでしたが、今日では四百名以上に達して居ると云ふことであります。ハーバード大學の如きも一昨年に至りまして、其の附屬女子大學を今の本校に合併致しまして、女子にも男子同樣の特權を授け、且同一の學位を與ふることゝ致しました。其の他之に類する進歩は數々ありますが餘り管々しいから申しませぬ。殊に中等普通教育に至りましては前に申し上ぐる通り、女學生の方が遙かに男學生の數を超過して居ります樣な有樣です。斯くの如く獨り亞米利加のみならず、歐米の女子教育と云ふものはずつと進んで居る。然るに本邦では二つの大學で事が濟んで居る。四千萬以上の人口を有する我が國に僅かに高等學校が六つしかない。又其の生徒の數も彼の國の生徒の數と比較してみても餘程少ない。歐米では教育の爲に、年々歲々巨萬の金を費して居るのに、日本では僅かの金で濟んでゆく。僅かの學校より要らないと云ふのは如何云ふ譯であるか。金が少いからであるか、富の程度が低いから教育を受くる者が少いのか、それも原因でありませうが、金が少いから學校が立たないのではありませぬ。未だ教育の普及發達が其の所までに達しないからであります。

合衆國では其の圖書館が教育の主動者となつて働いて居る。ボストン、ニューヨーク、フイラデルフイヤ、シカゴの如き大都會は素より皆各々大きな圖書館があるのみならず、山村僻地に於

きましても、津々浦々に迄苟も人間が少しでも集つて住んで居る所には必ず一の公立の書籍館があつて、書物が一杯藏に滿ちて居ります。毎日其の書物は大働きをなして居ります。實に書籍は巡廻訓導となつて人民を教育して居るのであります。此所にもう一つ珍しい事實があります。それは此の書籍館に行つて餘計書物を借覽する人間は婦人であります。洗濯婆や、下女や、色んな下層社會の婦人が書籍館から書物を借りて來て讀んで居る。然るに我が國では東京に一つの圖書館があるのみで、讀み手が何れ丈けあるか能く覺えませんが、なにしろ我が國に圖書館の一つでもあるのは賀すべきことでありますが、彼の大都會なる京都、大阪には一つの圖書館もございませぬ。村々に行きますれば何にも無い、之を以て見ても、未だ日本の教育の充分に普及して居らないと云ふことが分らうと思ひます。

一體我が國に於きましては、一番發達しなければならぬ事業が一番遲れて居ります。それは何であるかと云ふと、私は山林事業であると思ひます。我が國の樣に山の多い國はない。其の山に繁つて居る所の樹の利益と云ふものは、莫大なるものであります。又其の山林の川河に及ぼす影響と云ふものは、是亦實に非常なものであります。即ち其の山林の採伐の仕方に由りまして、或は干魃にもなり、或は洪水にもなるものでありまして、實に恐るべきものであります。然るに此の山林事業が一番後廻しにされて居る有樣であります。一番研究の屆かないものは山林事業であ

らうと思ひます。而して教育事業と云ふものは山林事業よりも其の結果は目前に現れない仕事でありまして、殆ど人民の眼には形は現れて來ない。それであるからして人々は此の問題を等閑に附す傾きがある。殊に女子教育は男子教育より結果が能く現れない。それ故に尙更人が打遣つて置きますけれども此の女子教育と云ふものは最も大切なものであつて、是は實に國家の隆替、盛衰に關係する事業でありませう。然るに唯目前の事ばかりに眼を着けて仕事をして居りましたならば、百年後の日本は如何でございませうか。諸君の御承知の通り五十億フランの償金を取られ、剩へアルサス・ロウレンの二州を割かれたる佛蘭西は其の屈辱を雪ぎ、其の鬱憤を舞し、其の國威を宣揚するために大なる事業に着手した。其の事業は何であるかといふと、教育事業である。殊に女子教育事業であります。固より佛蘭西と日本とは、其の事情を異にして居る。佛蘭西は負けて日本は勝つて居る。併しながら勝つて兜の緒を緊めよと云ふことは、今日我等の服膺すべきものと存じます。私は此の日清戰爭の勝利と云ふものは、教育家の勝利であるやうに云ひますが、併し教育家たるものは、今日の現狀に安んじて得意になつて深く考へ遠く慮らなくても、それで教育家たる者の責任が竭されて居ると考へて宜しいでせうか。是が即ち私が自分の不肖を顧みず、女子教育の振起策を講じて見たいと思ふ所以であります。

現今我が國女子教育を振ひ起すに、種々樣々の方法がありませうが、私の卑見によりますれば

詰り是は二つの方法に歸すると思ふのであります。其の一は下から上に及ぼして行くのと、上から下へ及ぼして行くのとの二つであると思ひます。即ち初等教育から段々高等教育に及ぼし、高等教育から初等教育に及ぼして行くと云ふ此の二つである。即ち上下兩端より同時に着手して、相呼應して、相協同してやつて行くと云ふことであります。之を近い例を擧げて見ますと、今日我が國に帝國大學と云ふものがありますからして、そこで我が國の中學校や小學校が今日の如き有樣を呈して居るのであります。是丈け進歩して居るのであります。又今日小學校や中學校があるからして、現に大學校があるのであります。女子教育も其の通りであります。初等教育から段々高等教育を施して、普及發達せしめると云ふこと、高等教育から初等教育に及ぼして行くと云ふこと、即ち下から段々高い所に及ぼして行くと云ふのと、高い所から下へ及ぼして行くと云ふ、斯う云ふ二つの方法に歸しやうと思ふのであります。是は私の考でありますが、其の振起策として三つの項を擧げたいと思ふのであります。

第一は教育家自身が警醒すること。

第二は女子教育の方針を確定すること。

第三は女子に高等教育を施すこと。

今日我が國で、女子教育は男子教育に較べますと振はない、睡つて居る。此のやうに女子教育

が振はないと云ふことは、私の考へる所では其の罪は誰に在るか、色々の人があるが、最も先に責めなければならぬのは教育家それ自身である。何故教育家の罪であるか。教育は今日眠つて居る。元氣がない。何故元氣がないやうになつて、何故鈍れて來たかと云ふと、女子教育を行つて今日迄に色々な失敗を重ねて來まして、其の失敗を懼れて居ると云ふのが一つの譯であります。もう一つは一般の人々が女子教育の事には冷淡になつて居るからして、自然と教育界が活氣を失つて來たと云ふ二つの譯だらうと思ひます。初め女子教育の爲に手を燒いて大失敗を來して居るから大いに懼れて再び手を出して見る勇氣がない。其の失敗から段々弊害が生じて來て居る。是は本當であります。弊害は確かにある、私は確かに認めて居ります。そこで斯う云ふ弊害が起つたから、女子教育に手を出すならば、再び弊害を來すであらうと云ふことを恐れて引込み主義になつて、まあ〳〵觸らずに置いた方がよいと云ふことではないかと思ふ。而して自らが唯引込み主義を執つて居るならまだしもの事、自らが教育の必要を說いて聽かせて、世の先導者とならなければならぬ所の身分でありながら、却つて女子教育の弊害のみを說いて矯正策は講じない、弊害は困つたものだと言つて教へて居る。斯う云ふ工合に世間一般が冷淡であるからして、教育界も矢張り冷淡になつて睡氣がさして居る。併しさう云ふことでは何うも私共は濟まないと思ふ。何うでもよいことなれば、眞に國家を思はぬならばそれでもよいが、眞に百年の日本でない萬年

の我が國を思ふならば、私共はさう云ふ有樣で居てはならないと思ふのであります。

凡て物事には一利一害と云ふことは免れぬものであります。少しも弊害を生ぜず。利益ばかりを取らうと云ふことは如何しても出來ないのであります。失敗をせずに成功しようと云ふことはどうも出來ないものであります。詰り此の失敗と云ふ教師に教育されて夫れから後に成功するのであります。私共は失敗と闘はなければならぬ。弊害と闘はなければならぬ。軍をしなければならぬ。軍をせずして勝利を得ると云ふことは決して出來ない。此の教育事業も戰爭同樣であります。如何しても負けることもあれば勝つこともある。勝つてばかり居ると云ふことは如何しても出來ない。日清戰爭は負けたことはないといふ人もありませうが、是は相手が弱かつたからの話です。若し相手が佛蘭西、露西亞の樣な凡そ同等の力の有る國とやれば、さう旨くは行かぬ。負けたり勝つたりして、遂に終局の勝利に畢るより仕方がないのである。彼の華盛頓或は彼得帝の如き、實に英雄豪傑で大勝利を得た大將でありますけれども、彼等も亦初めから勝つたのではなくして、彼等の軍は殆ど連戰連敗幾ら負けても決して屈しない。負けて益々勇を鼓し、敗れて益益計を運らし、決して一朝の敗北に恐れて憶病神に取付かれて引込み主義を取らず、益々勇往敢進すると云ふ氣象に富んで居つたから、彼等は勝つたのであります。彼得帝は何と云ひましたか、「我に戰勝を教へたものは我が敗北である。我が敗北が我に戰勝を教へた」と言うて居ります。

す。是が勇將の勇將たる所であります。女子教育も其の通りで、何れ手を出したならば失敗することもありませう。又弊害の生ずることもありませう。從つて攻擊する敵が起つて來る。さう失敗を怖がり唯放任主義を執つて打棄てゝ措いて、夫れで我が國の女子教育が完全になりますか。何時改むることが出來ますか。振つて來ますか。女子教育を改良せずに置いて、全般の教育と云ふものが振つて參りませうか。若し日本の全般の教育が發達しないならば、如何にして日本を偉大なる國家とすることが出來ませうか。そこで私共は此所に思ひ切つて失敗と闘ひ、弊害と闘はなければ、我々の目指すところの勝利は得られまいと思ふ。

今此所に他の國の例を擧げて見まするに、今日一番女子教育の盛んなる國は亞米利加であります。

亞米利加が始めからあゝいふ樣に女子教育が盛んになつたと思ふのは大變な間違ひである。スミス女子大學を起したスミス夫人の鄕里に白髮の爺さんがあります。此の人は能く其の當時の有樣を記憶して居りまして、私に嘗て申しますのに、ハットフイールド郡の住民にして、大いに勢力ある何某と云ふ者がありました。此の人は男兒とては一人も無く、女兒のみ多く持つて居りましたが、此の女兒をば公立學校へ入學させようと思つて之を衆議に訴へた。其の理由とする所は私は教育費を出して居る。學費を出して居るけれども私は男兒を持たないから、どうか女兒を入

學させて呉れと云うた。其の時に全郡學つて其の人の說を攻擊したと云ふことであります。亞米利加で女を教育しない、學校に入れなかつたのは、つい此の間迄のことであつたのであります。米國に於きましても、最初は女子教育は非常に女の身體に害を與へるものである。女の身體を臺無しにして仕舞ふだらうと云ふ說があり、又實際弊害もあり、攻擊もあり、失敗もあつたけれども、亞米利加の人間は決して失敗を怖がり、攻擊を懼れなかつたのみならず、益々改良を加へて惡い所は改めたのでございます。今日亞米利加の大學の女學生の身體は立派である。英國に於きましても、亦同一でありますが、不列顚醫學雜誌に「吾人は今日に至る迄次代の國民に關して往往悲しむべきの豫言を聞きしも、今や豫言の時代は將さに迅速に其の終りに達せんとす。烏兎匆々二十六年の星霜は經過し去つて、吾人は見て以て果して悲しむべきの國民なるや否やを斷定すべきの新國民は登場せり。然るに學位の稱號を有せる母親の子供は學位を有せざる普通の母親の子供と同じく健且美なるを見る。而して子供の健且美ならざるものあるは、正しく兩親の罪惡と不攝生より來るものにして、決して兩親が教育を受け、身自らを制し、又は心を使ふより生ずるものにあらざるや明白なり」と申しました樣に、英國に於きましても女子がケムブリッヂや、オックスフォード大學で、男子と同一の學科を研究することの出來る樣になつてから既に二十有餘年でありますが、更に身體を害した證跡は見えませぬ。此の大學教育と女子の健康との關係に就きま

しては、數年前英國のシヂウキック夫人が調査致しました結果に依つて見れば十分明瞭であります。

此の間日本の高等女學校及び帝國大學の統計表を見ましたが、其の統計表に依つて見ますと、高等女學校及び大學の生徒の體重や肺活量等が減つて居る、是は何うも教育のやり方の十分でないと云ふ所から、さう云ふ結果を表したのであります。夫れで何うしても何所の國でも、色々の失敗、弊害が起るものでありますから、其の弊害と鬪ひ、其の失敗と鬪はなければ、本當に發達することは出來まいと思ひます。私は今日滿堂の諸君に對して、又我が國の教育界に對して、熱望するところは、今日は私共が女子教育のために傍觀して、如何なつても構はないと云つて打やつて置く時ではないと思ふ。今日、女子教育の必要をお互に力を合せて唱道致しましたならば、私共が熱心に女子教育のために盡したならば、必ず我が國の教育の有樣は一變して來るであらうと考へるのであります。

所が此所に一の難問題がある。或は諸君の中にさう云ふ御感じがあるかも知れませぬが、夫れは私共は固より女子教育の必要を知つて居る、此の教育の大切なりと云ふことは分り切つた話でありますが、女子教育を主張するに、未だ女子教育の方針が十分に立たない。如何してよいか分らないと云ふことであります。私は此の頃女子大學を興したい考がありまして、有名な教育家、

學者、其の他有力の人々に面會致しましたが、其の時最も能く私の聽く所の說は、「如何も女子教育については困る」と云ふのが、一番能く聽く聲である。夫れから「如何して宜しいか私共には未だ考案がない」「私は女子教育に就いて調査研究する暇がなかつたから、此の事に就いてはよいとも悪いとも云ふことは出來ない」斯う云ふ樣な說が多いのであります。隨分有名な人の中にも、さう云ふやうに感じて居られる方があるのであります。是は私はどうも教育家自身が既に其の方針に迷うて居るからして、畢竟女子教育が振はない原因をなすのであらうと思ふ。實に日本の女子教育の有樣は、方針が定まらない未定の有樣である。さうして唯其の儘に打棄てゝ置いては、何時迄經つても方針が定まらない。此の第二維新ともいふべき大切なる時代に於て、女子即ち國民の半數を占めて居る所の女子を教育する方針が立たないと云うて、私共は此の教育をさう構はないで置いて宜しいか。世間一般の人は或は夫れでもよいか知れませぬが少くとも教育家——教育に從事する所の者は、是非職務上深く研究調査して、女子教育の方針を確定すべきではないかと思ふのであります。此の方針を定めることは六づかしいやうでありますが、力を出してやりさへすれば出來ることであらうと思ひます。如何したら宜しいか、方針が何うも立たないからと云つて、手を束ねて居る譯には行かない。机の上で愚圖々々と考へて居り、書物を讀んでばかり居つたと云うても、本當の方針と云ふものは立つて來るものではあるまいと思ふ。先づ方針

を確かと定めて、さうしてやつて見る、試驗して見る、經驗して見る、即ち實驗に訴へて行つて見ると云ふことも一つはしなければならぬ。もう一つは學理に照らして研究調査して見ると云ふこともなくてはならないであらうと思ふのであります。併しながら、是迄のやうに唯猥りに輕卒に方針を定めて、獨斷的に朝きめたものが、夕べに動くやうなことでは濟まないのであります。此所に女子教育の方針を定むるに必要なる條件は二つあると思ひます。其の第一は、女子の天性能力と云ふものを研究調査して、女子の能く働き得べき一般の範圍を定めること。第二は國情上、時勢上より即ち社會的觀察を下して、此の一般の女子の働き得べき範圍に變更增減を加へて、將來日本婦人の將さに働くべき範圍を定めて來ると云ふ、此の二つであります。それでこの二つのことが定つて來ますと、此の女子教育の方針と云ふものが自然定つて來やうと思ひます。私が聊か研究しました結果の項目丈けを申しますれば、

第一、女子を人間として教育すること。

第二、女子を日本婦人として教育すること。

第三、女子を日本國民として教育すること。

であります。此の區別順序を過つたならば片輪の教育になりませう。此の區別順序に就いて私は色々申上げたいけれども、もう時間がないから項目丈け擧げて置かうと思ふのであります。

夫れから私は女子教育の方針の一として、又振起策の一端として、女子高等教育と云ふものを主張致します。所が此の女子高等教育と云ふものは隨分攻擊のあるものであります。第一の問題は、若し高等教育を施すと云ふと日本の普通教育――初等教育を妨げはしないか。もう一つは未だ日本の初等教育と云ふものは普及して居らぬのに、此所に高等教育に着手するのは、順序を誤つて居りはしないか。斯う云ふ議論があります。併し私は今高等教育を施すと云ふことは、初等教育の普及を妨げるのではなくして却つて早めて行くと云ふ結果を生ずると信じて居るのであります。夫れで私は辯じて置きたいと思ひますが、高等教育を施すに女子大學を興すと云ふことを申しますと、或は帝國大學の如きものを、女子のために興すかと云ふやうな疑問が起るかも知れませんが、一體此の高低、上下、大小とか云ふやうなことは、比較的の語でありませう。即ち高等教育を施すと云ふのは、現在あるところの程度より高い所の程度に高めると云ふこと、大きいものをやると云ふことが高等教育と云ふ意味であります。即ち私が高等教育或は女子の大學を設立しようと云ふのは、女子を現在のよりも進歩したる發達したる程度に高め、而して社會の進運を計ると云ふ希望であります。換言すれば高等教育をすると云ふことは、今日の女子の智力、體力、德力を今日のものよりも高めると云ふのであります。今日女子教育の弊害が多い。依つて兎に角此の弊害を取除いて、完全なる女子教育を進めたいと云ふ意味であります。即ち今日は半

出來の婦人が多いから、もう一層進めて全くなるまで、女子教育を行つて見たいと云ふ希望である。夫れで決して、帝國大學で讀んで居るやうな書物を讀ませると云ふやうな考では無いのであります。もう一つ是に就いて辯じて置きたいのであります。此の教育と云ふもの――教育の精神は、さう云ふ間違ひはないと思ひますが、教育と云ふものは、書物を教へることであるから、完全なる教科書と善き教師とさへあれば出來るやうに思ふ人もあるかも知れませんが、是は大なる間違ひであります。固より完全なる教科書と善い教師は教育の要素であるが、其の他、之に勝つて決して劣らぬ要素が二つある。其の一つは遺傳であります。もう一つは抱圍であります。此の遺傳と云ふものは大切のものであると云ふことは、誰も不同意はない。然るに此の遺傳と云ふものを善化利導すると云ふことは、實に百年の計で、一朝一夕には出來ないことであります。此の遺傳に就きまして、一番重大な問題は、私は結婚であると思ひます。結婚上の悪弊や過失は悪い遺傳を作るところの重要なる原因であると思ふ。然るに、今日我が國に行はれて居る馬鹿らしい婚禮と云ふものは、實に私共は常に認めて慨歎して居る所でありますが、是も女子教育を高めて、智育德育を進めて行つたら自ら止んで仕舞ふだらうと思ひます。さういふ風に結婚の弊風を改めたならば、此の遺傳と云ふものは大いに改進して來るにきまつて居る。もう一つは將來に關係がある。一番大切な關係を持つて居る婦人の智德を進めたならば、其の社會の有樣が變つて來

ると云ふことは事實であらうと思ふのであります。女子教育と云ふものは、目前の結果が見えないけれども、是は大切なる事業であつて、一日も忽せに出來ないものであらうと思ひます。それで今日女子教育に弊害の多いと云ふことは女子教育其のものゝ罪でなくして、教育家及び教育法の罪である。且亦今日の女子教育の弊害又は男子教育の缺點と云ふものは決して獨り教育當局者ばかりの罪ではないのであります。社會の罪が大いに與つて居ります。家庭の風儀が亂れて居る事やら母親の詰らない事などが大いに加勢して居ります。然るに高等教育を受けた女子が殖えて來ますと其の影響と致しまして、必ず社會の惡風と云ふものが改まり、家庭の風儀がよくなりますから、自然の結果として家庭教育と社會教育とが善化致しまして、學校教育に協同助力し、從つて完全なる教育を施すことが出來、本當の人間を作ることが出來ると思ひます。

もう一つ申して置きたいと思ひますが、前に高等教育と教育の普及發達との關係を述べましたが、私は高等教育と云ふものが、女子教育振起策の一と云ふ所以は三四個條ありますが、其の一は、若し此所に高等教育を施しますと、一般の婦人が其所まで進みたいと云ふ希望が生じて來る。其所まで進みたいと云ふ希望を持つて居る女子が殖へて來ると、今度は中等まで進みたいと云ふ女子が殖へて來る。中等まで進みたいと云ふ女子が殖へて來ると、今度は初等教育と云ふものが盛んになつて來ると云ふのは、是はもう明白なる事實だらうと思ひます。次ぎに高等教育を施

すと云ふことは完全なる女教師を殖やす事である。女子教育の一番缺けて居ることは、教員の良い者がないと云ふことであります。又本當の高等教育を女子に授けますと、賢母良妻が出來るに相違ありませぬ。お轉婆でなくて、謙遜な淑女が出來るに相違ありませぬ。さうして、段々高等教育を受けた女子が女德を備へ、淑女となり、賢母となり、良妻となりまして、社會に現るゝに至ります時には、一般の女流社會の知識德行を刺戟致しまして、從つて社會を改善し、教育を普及發達せしむるに相違ないのです。若し正當な高等教育で、女學生の高慢とか、我が儘とか、粗暴とか云ふものを除き去つて、淑女を養成する樣になつた時は、世人が女子教育の効能を覺り、女子教育の必要を感じ、女子教育を是認するに至り、大いに女子教育の盛大を來すに相違ないのです。でありますから實地に高等女子教育をやつて、眞正の女子教育の價値を世人に認識させるのが最も急務であります。米國に於ても、大學教育が女子に及んで一般の教育と云ふものが進んで來た、普及して來たのでございます。一例を擧ぐれば、一郡に一人の娘が女子大學を卒業すると、その一郡の女子教育が發達普及致しました。

今日、日本國民は、外國人が我が國に入込んで我が國の女子を辱しめると云うて大いに憤慨して居る。けれども是は實に我が國の女子が愚であるからであります。無學であるからであります。若しもう少し知識が進んだならば、さう云ふ馬鹿なことをしない。私は此の日本の今の遺傳を改

める爲に、國民を强くする爲に高等教育を施して、高等の知識を女子に與へることは――醫學生理の知識を吹き込むことが必要であると云ふことを深く感じて居ります。それで我が國の女子教育はもう少し醫學上の知識を與へぬと大間違ひであらうと思ふ。此の醫學に暗い所からして種々の弊害を來すものが隨分多くあらうと思ひます。各女學校に少し醫學の分つたところの教師を置いて、體操教育をするの必要を感じて居る。夫れで女子に醫學と云ふ高等の知識を授けて、段々此の醫學上の知識を以て――夫れに外の知識ももつと進んで參りましたならば、大いに我が國に今日ある所の不道德や不養生は無くならうと思ふ。夫れで英國や或は米國の、是まで高等教育を授けてから以來二十年間の成績を以て調べて見ますと、高等教育を授けた爲に一般女子の健康と道德を進めました。故に英米に於きましては、二十年前から見ると、今日は女に醫學の知識が進んで居る。從つて女學生の身體が大變に進歩して居る。學校に入つた時より卒業して出る時は進樣になつてから國民が小さく弱くなつたなどと云ふことは云はれない。私は是まで亞米利加の例を多く引きましたから、諸君の中に或は私は亞米利加の女子に心醉して居ると云ふ疑ひがあるかも知れませぬが、決して私は心醉して居らない。私も亞米利加の女子の弊害を認めて居る。隨分其の弊害を感じて居るけれども、是は教育其のものゝ罪ではない、彼の國風俗の罪である。私が

亞米利加の教育制度を餘計引いたと云ふのは、亞米利加では二、三十年間の實驗に照らして行つて居る。其の結果も此所に顯れて來て居る。故に其の國民の聲には大いに注意を傾ける價値があると考へ引用した譯でございます。

終りに臨んで、私の希望を結んで申せば、どうか我が日本國民を少壯なる國民にしたい、若い國民にしたい、偉大なる國民にしたいと云ふ希望でございます。此の偉大なる國民にする、少壯なる國民にするには、如何しても女子教育を振起しなければならぬ。然るに今日の日本女子教育の現狀でありますが、前に申した通り、微々として振はざる有樣でありますから、之を振ひ起さなければならぬ。即ち一は上より下に及ぼして此の教育を振起することゝ夫れからもう一つは下より上に及ぼして振ひ起すことにしなければならぬ。而して之を成すには、第一に此の教育家たる者が目を醒まさねばならぬ。唯世間の攻擊や、些々たる弊害に怖れて居つたならば、何時此の教育――女子教育と云ふ者は振つて參りませうか。第二に其の教育の方針が分らぬと云ふならば益々教育家たる者は之を研究して方針を確定してやらなければならぬ。第三には初等教育に手を着けると同時に高等教育に手を着けて、上下兩端から行つて相助けるやうにして、一方には女子を益々進歩させ、一方には一般女子教育の上に刺戟を與へたいと云ふことを希望する譯でございます。（女子教育談）

日本女子大學校設立の必要

明治三十年五月廿六日大阪中ノ島ホテルに於て

貴顯紳士諸君、今日は斯くも賑々しく御光來の榮を忝う致しまして、實に感謝の至りに存じます。私は先づ第一に日本女子大學校の趣旨を述ぶべきでございますが、これは既に趣意書でも陳述を致し、又拙著「女子教育」及び此の頃出ました「女子教育談」の中にも略〻表れて居る次第でございますから、これは重ねて申し述ぶる必要はあるまいと思ひます。故にこれは省くことに致します。

私が幼年の頃でございましたが、私の鄕里の縣會に一大爭論が起りました。其の時の模樣は明らかに記憶して居りますが、之は學校と病院との先後輕重の爭ひでありました。甲論者は曰く、健康は百般の基礎である。先づ病院を起さなければならない。乙論者は曰く、教育は國家成長の根本である。個人發達の基礎であるからして、宜しく先づ學校に力を致すべし、病院は後廻しにする方が宜しいと云ふことであつた。ところが今日でもこれに類する爭ひが、往々この社會に現れることがございます。商業家は曰く、商業が第一である。軍人は曰く、軍備が第一である。

又教育家が申しますには、教育が第一であると。斯くの如くに互に相爭ふと云ふことは昔も今も往々起ることでございますが、これは國家と云ふものは彼我相須つて隆盛に赴くものであると云ふことに氣附かざる僻說であります。國家を自分と同一に感じない誤謬の意見であると云ふことは、誰も分ることでございます。固より商業にあれ、軍事にあれ、教育にあれ、その從事するところの職業に熱中すると云ふことは、實に賀すべきことでございますが、併しこの社會と云ふものは錯綜せる機關を有つて居る有機體であつて、彼我相俟ち、相關係し、相助け合うて成立つて居るものである。この成長發達するものであると云ふことを忘れず、社會大局の上より打算し來つた方針を立てないと大いなる禍害を招くことがございます。

此の我が日本帝國は四千萬の國民を以て成立つて居る一つの身體でございます。この身體の中には種々の機關がある。即ち手足と云ふべきものがある。又は五臟と云ふべきものもある。或は腦髓神經と云ふやうなものがございまして、この總ての機關が相俟つて初めて生存を保ち發達を遂げて行くことが出來る。そこで此の國家の手足となり、腕力となるものは兵力であり、この身體の中を循環して而して身體を養うて居るところの血液は商業であり、その血液の循環を司り、又この四肢の運動を支配するところの腦髓神經となつて居るものは、教育であらうと考へられます。それゆゑにこの身體が一も缺ける所なく完備して居りましても、若し此の中の腦髓が病氣に

麻痺り或は神經が衰弱致しましたならば、この身體は或は白痴になるか、又は麻痺して役に立たない樣になつて參ります。又此の腦髓はいくら健全でございましても、この身體の中の血液が腐れてくるか、或は循環が悪くなりましたならば、腦髓はその働きを全ふすることができないやうになつて來る。それでこの社會と云ふものは、凡ての機關が相俟つて一致協同し、互に相顧みて各部が活潑に活動をいたしまして、初めて進運隆盛になることが出來る譯であらうと考へます。

國家に於きましてもまたその通りでございます。その腦髓たり神經たる教育が正當に活潑に活動して居ないときには國家は麻痺し、國民は無智となるのであります。國家の諸機關は互に彼我の痛痒を感ぜず、從つて公共心並びに愛國心と云ふものを失ひ、私を去つて公につき、協心同力國家の大事を爲すこと能はず、四分五裂私利を是貪るの慘狀に陷ります。併しながら商業が衰へ、工業が振はない時には、國何を以て富み、民何を以て裕かなるを得ませうか。國潤せ民貧しきときには、教育何を以て行はれ、人情何を以て淳厚なるを得ませうか。軍備何を以て完備し國威何を以て發揚するを得ませうか。若し又兵備の完備を缺くときには何を以て外國の侮辱を免かれ、亡國の禍を脫することを得ませうか。そこで國家の進運隆盛と云ふものは、その萬般の諸機關が打ち揃うて圓滿平均に發達するにあらざれば得て望むべからざる次第であります。

然るに我が國の現況は如何でありますか。諸機關發達の程度は如何でありますか。又その發達

は能く平均調和してをりますか。これは大切なる問題であらうと思ひます。今此の我が帝國の身體の中に働いてをる諸機關の發達を、これを歐米各國の有樣と比較して見ましたならば如何でありませうか。此の富の力なり、兵の力なり、教育の力なり、遺憾ながら我が帝國は未だ諸强國に及ばぬところがある。私が今茲に之を申しますのは吾が國民たるもの大いに警醒覺悟し「勝つて兜の緒を緊めよ」との戒めを服膺すべきを深く感ずるからであります。我が國民の眞に成長發達して偉大たらんことを熱望するより之を云ひたいのです。先づ海國たる我が日本の海軍の力は如何であるか。統計上よりいへば、世界の中で第八番目に位して居るさうであります。又我が國と最も事情を同じうして居る所の英國に於て軍備の爲に個人が負擔するところの金額は十圓十八錢である。然るに我が帝國に於ては僅に九十六錢でありましてまだ十分の一にも及ぶことができないさうであります。それから我が富の力は如何であるか。我が日本の金滿家と云ふものは幾千萬圓を以て數へられてをるけれども、歐米の金滿家と云ふものは幾億萬圓を以て算へられてをります。その他凡て生活の度から富の度を精密に比較して見ましたならば、これは申すまでもない分つてをるところの事實であらうと思ひます。

又この國家を成長發達せしむるに最も大切な機關であるところの教育は如何であるか。これは私がこの數年間調査を致しました我が國の教育の有樣と歐米の教育の有樣とを比較したところの

統計を世に公にしたことがありますが、我が國の教育の有樣は歐米の文明諸國と比較して及ばぬこと遙かに遠くあります。例へば四千五百萬の人口を有して居るところの我が帝國と、凡そ同數の、六千萬ばかりの人口を有して居るところの亞米利加の大學校の數を比べてみますと、我が國に於ては大學が二、高等學校が六であります。然るに亞米利加に於ては大學校と名づけるものは三百七十六、殆ど四百近くもありまして、大きな學校には二千三千、少しく下りたる程度の學校には四千も一校に持つてをるところのものがあります。その生徒の數から申しましても、學校の數から申しましても、遺憾ながら我が帝國の教育發達の度はまだ遲れてをる。又普及の程度から行きましても我が國の小學校に於ける女兒の就學數と云ふものは百分の四十で、殘りの六十人——百人に對する六十人と云ふものは、無學文盲の民を育てゝ居ると云ふ有樣になつて居る。これは我が帝國の身體の中を動かし、身體を作り、この身體を養うて居るところの、色々な機關の比較でありますが、もう一つ考へて見なければならないことがある。假令日本帝國と云ふ一つの身體は少々小さくあつても、その諸機關の成長が善く平均調和して居れば將來日本の發達することが實に速かであります。然るに我が海軍の力は、世界各國の中で、第十二番の地位に居りましたが、日清役後一躍して第八番目まで進歩したさうであります。又我が商工業の機關は如何であるか、これまで諸會社の資本金と云ふものは數十萬圓を以て數へられて居りましたが、今日は數

百萬圓と云ふとこまでに進歩して居ります。又我が航路は歐米にまで延長されて居ると云ふ有樣である。併しながら教育と云ふ機關は、他の機關が發達したやうに、膨脹したやうに、同一の割合をもつて進歩して居ない許りでなく、誠に萎縮して振はない。どうも教育機關は停滯をして先きへ行くことが出來ない。そこで教育は是非進めなければならない。國民を育てなければならないと云ふ必要は迫つて居るけれども、その機關を運轉させる力がないのであります。今日全國に於て小學校の正教員の不足は二萬人と云ふことである。中學校の教員も足らぬので、文部省に於ては困つて居らるゝと云ふ有樣である。又此のごろ京都に大學校が出來ますが、この大學校へ送るところの教授も足らない。これからどうも歐羅巴へ留學に遣らなければならないと云ふ有樣である。女子教育は勿論である。まだ男子教育の着手しなければならぬものが着手が出來て居らない。進めなければならぬものが進めることが出來ない。他の機關の發達と決して平均を取ることが出來ない。甚しく權衡を失うて、恰も日蔭の植物のやうな有樣を呈して居るのであります。我が國の外交政略は、軍艦を殖やし、兵力を强めたならば、それでよろしうございませうか。如何に軍艦が堅固でありましても、兵隊に勇氣がありましても、我が國から諸方へ出て居る人民が無教育であるときは、如何にして外國の侮辱を免かるゝことが出來ませうか。無論外交と云ふものは只軍艦を以てのみ出來るものではない。その國民の德義と、その國民の知識とが進歩しなければ、

決して對等の交際を續けることは出來ないのであります。私が米國から歸りますときに一と晩布哇へ立ち寄りましたが、その港には浪速艦が碇泊してをりました。

私はその軍艦を見て實に悅ばしい感じが起りました。それから港へ上つて多くの日本人に遇ひました。ところが私はその晩どうも慨嘆に堪へず能く眠ることが出來なかつた。又桑港へ行きましたときには感慨の情が一層甚しうございました。多くの我が青年が桑港へ上陸をして居りますが、多くは墮落して居ると云うて宜しい位である。桑港に於て墮落しないところの青年は實に豪傑であります。えらい人物でございます。私は其の有樣を云ふに忍びませぬが、實に我が國民は蒙昧な不德なるところの下等人民を外國へ出すことに據りて我が國辱を來して居るのではないかと思ふ。どういふ有樣であるか、只今一つの例を擧げまするならば、彼の支那人でも野蠻人でもすることを好まないのに、我が國の下等人民は金錢の爲に己の妻を他人に辱しめさせるといふ事を聞きました。これは實際諸君は目擊なさらぬから痛痒を御感じにならないと思ひますが、實際外國へ行きまして、その內幕へ這入つて能く觀ますと云ふと、實に慨嘆に堪へない。幾ら我が帝國が軍艦や兵士を外國へ出しましたところが、若し我が國民たるところの人民が腐敗したり、或は蒙昧に陷つたり、即ち教育が進まずに居りましたならば、如何にして我が國威を世界に輝かすことが出來ませうか。この要點を摘んで言へば、外交上に就いて考へても、教育普及の必要あり

といふのであります。又商工業と教育とを比較して見ますならば、今日大阪を一見した者は、直ちに商工業の盛んなことを感ぜぬ者はありませぬ。併しながらこの大阪と云ふ都會の神經となつて居るところの教育と云ふものを考へて見ましたならば如何であるか。又此の我が國民の知識の程度を比較してみたならばどうであるか。我が國は隨分物品を國外へ輸出して居ります。併しながら我が國民が嘗て我が國の知識を外國へ輸出したことがあるかといふ事です。多くは我が國の新知識、新學問と云ふものは外國より輸入されて居る。善くこの教育と云ふ機關と商工業と云ふ機關とを比べて、教育の有樣を考へて見ますと、どうも平均が取れない。又憲法其の他の法律と云ふやうな政治機關も人民が不德蒙昧であつたならば何の役にも立ちませぬ。立派なる憲法も國民の教育が進まなかつたならば、却つて國家に害を爲すことがある。地方自治の如きも、無知蒙昧の民にはその恩澤を蒙らしむることは出來ない。然るに我が國の憲法、我が國の法律は美を極め善を盡して居る樣に見えますが、その憲法が進み、法律が進み、その他政治機關が發達した程にこの國民が發達をして居るか、教育はその割合に進步して居るかと云ふと、これも權衡を失して居るやうに見えます。それが爲に此の社會に今日種々な腐敗や弊害が現れて居ると云ふことは勿論どなたもお氣附きになつて居ることであらうと思ひます。

それでこの國家と云ふものは總ての機關が相平均調和して能く働きを爲さなければ、どうして

も能く成長することは出來ませぬ。然るに善く觀察をして見ますと、我が國の教育機關は、他の軍備や、商工業や、政治機關などに後れをとつて居ります。それで私は第一にこの諸機關を外國の身體に比較を致し、又この我が國の內部の有樣を考へて見まして、實に遺憾に思ふ點がございます。又その比較を失うて居るところの教育と云ふ機關の內部をよく探つて見ますと、どうもまだこの教育機關を充分これから他の機關に後れを取らぬやうに發達せしめようと思ひますには大いに缺けて居る點があるやうに考へられる。

今私は教育機關の缺點を擧げて見たいと思ひますが、時間が掛りますから、茲には唯その箇條だけを擧げて見ようと思ひます。その

（第一）は我が國教育の學制である。學制を茲に改革せんければ時弊を救ふことは出來ぬと云ふ一つの必要が迫つて居りはせぬかと思ふのです。

（第二）は學理である。教育機關が眠つて居ると云ふものは、教育の學理が眠つて居る、教育の學理が研究されない。四千萬の人口を有して居る我が帝國が、一人の教育專門家を大學の教育學の椅子に置く力がない。又今日女子教育に就いては種々弊害が現れて來た。これはいけないと云ふことは誰も氣づいて居りますが、これを歷史に訴へ、學理に照らし、以て研究してその方針を明らかにすると云ふこと、即ち我が邦女子教育の學理を研究すると云ふことは大いに怠つて居

る。今日は總て學理的に、根本的に研究をしなければ決して好結果を得られないが、我が國の教育と云ふものは學理の研究と云ふものを大いに怠つて居る。

（第三）は普及、前にも少しく申しましたが、殊にこの女子教育の普及と云ふことは誠に嘆はしき有樣で、この三府四十六縣の中で未だ高等女學校のない所は四十一縣あります。又大阪の如きは既に高等女學校を一箇持つて居りますけれどもその生徒は僅に六、七百人に過ぎない。その六、七百人の半ばは殆ど小學教育の程度である。これを彼の亞米利加の「ブルックリン」即ち大阪と殆ど人口を同じうして居るところの「ブルックリン」の中學校と比べてみますと、その公立學校には女生徒の數が二千人、男生徒の數が六百人であります。又もう一つの私立學校は、生徒の數は四千人ありまして、その中の三千人は女學生である。もう一つの大きな師範學校がその市街に立つて居りますが、これは悉く女生徒を以て成つて居るのである。さうすると既に此の三校だけで五、六千人の女學生を持つて居るのです。其の他にも尙種々な女學校があります。けれどもこの大阪の都會に於ては唯一の高等女學校を以てそれで事が足りて行くのであります。

（第四）は最も大切な事でありますが、これを辯じますと餘り長くなりますから略しますが、即ち教育の精神であります。

（第五）の缺點は社會教育、

（第六）は家庭教育、我が國の教育機關は家庭教育と社會教育とを缺いて居る。此の事は既に東京の發表會に於て陳述いたしました。

（第七）の缺點は女子教育を缺いて居る。これは大變大切なる問題であらうと思ひます。教育機關にして、若し女子教育を缺いたならば、これは片輪の教育と言はなければならぬ。彼の江原君は女子教育を缺いたところの教育は鳥の羽翼の一方を切つたやうなものであると云ふことを言はれて居る。併しこれは鳥の羽翼の一方を切つたばかりではない、即ち根本を缺いて居るところの教育と言はなければならぬであらうと思ひます。

私が茲に我が國の教育機關は女子教育を缺いて居ると申しましたのは、普及の程度から申したのであります。又發達の程度から申したのである。我が國の女子教育は未だ小學校と云ふ區域を脱することが出來ないのであります。又我が國の女子教育は精神を失うて居ります。充分に發達をしない。此の女子教育に就いては今日種々樣々の弊害があり、又國民が女子教育に就いて方針に迷うて居る。是等の點を以て私は我が帝國の教育機關は女子教育を缺いて居ると云ふ言葉を用ひた所以であります。

そこで我々が國家の有樣を考へますると、これから將來を慮つて、是非茲に教育機關を完備させねばならない必要に迫られて居りますから、茲に日本女子大學校と云ふものを設けて、その缺

點を補ひ、その精神を回復し、その普及發達を助け、その模範を作つて、どうか方針を確定したいと云ふ希望を持つて居るのでございます。斯く女子教育を完備して、この女子教育の力に據つて大いに男子教育に影響を及ぼさうと云ふのであります。即ち言を換へて云へば、我が教育機關に根本的の改革を行はなければなるまい。根本的に改良をすることに力を盡して見たいと云ふ希望であります。それで今、日本女子大學校——この大學校と云ふ言葉は隨分諸君のお耳觸りになるかも知れないと思ふのでございますが、私の大學校と云ふ意味は東京の帝國ホテルに於て既に陳述致し、又之に就いての考の大體を雜誌太陽の中にも陳述しておきましたからして、諸君の中には既に御承知の方もあらうと思ひます。又御承知のない方もあらうと思ひますが、この女子大學校の性質は如何なるものであるか、それに就いてはかう云ふ弊害がありはしないか、かう云ふ點はどう云ふやうに考へて居るかと云ふやうな、諸君の中に種々樣々の議論やら反對やらが起つて來るかも知れぬと思ひます。これに就いては詳しく私の精神を申上げたいですけれども、時間がありません。又その幾分は女子教育談の中にも現れて居る譯でありますからして、これは略しまして、この女子大學校と云ふものが何故に今日起らなければならない必要があるかと云ふ、その理由の二三を述べて置く事に致したいと考へます。

商工業の爲にも亦軍備の爲にも或は醫學の爲にも大學校の設けがある。陸軍大學校と云ふもの

は軍備の爲に、我が陸軍の爲に缺くべからざる教育機關である。又政治機關の爲に法科大學が必要である。醫科大學と云ふものは、我が國民の健康を保つて行く上に於て、一日も忽せに出來ないものであると云ふ事は明らかに分つて居る事であります。加之今日は染物屋の爲にも、大工の爲にも、土方の爲にも、大學校が要ると云ふやうな有樣になつて居る。それどころではない。これまでは役に立たない者として棄てゝ居つた處の白痴の爲にも馬鹿の爲にも盲目の爲にも、或は啞の爲にも大學校が要るやうになつて來て居る。このごろ亞米利加に於て啞で聾で盲目で、見ることも聞くことも言ふことも出來ない所の娘が段々教育を受けて彼の名高い「ハーヴアード」大學に入學した者がある。私が視察中にもその盲啞學校に行きまして、その發達の有樣を見て驚いた。即ち白痴教育、物を言ふ事も出來ぬ、物を辨へることも出來ぬ、數を算へる事も知らない、その馬鹿に教育を施して段々社會の缺陷を除くのみならず、幾分か社會へ益を與へるやうに人間を拵らへ直すことが出來る。實に教育の力と云ふものは恐るべきものであると云ふことは、この白痴院へ行き、或は盲啞院へ行くと云ふと深く感ずるのでございます。然るに獨り女子の爲に大學校と云ふやうなる機關は不必要であると云ふものがある。又女子教育は必要であると認めて居るものは無論多くあるのであるが、併しこの女子教育ほど六ケ敷いものはない。困難なるものはない。弊害の起り易いものはない。然るに何故に此の困難なる女子教育の爲に大學校を建て、そ

の發達を促す必要があるか。大學校と云ふものは總ての機關を學理的に研究して、根本的に發達を遂げさせると云ふ機關である。如何なる機關を發達せしめんと致しましても、どうしても學理に據らんければ本當の發達を遂げしむる事は出來ないと云ふ有樣に今日はなつて居る。それで私は今日我が日本帝國の爲に日本女子大學校を起して、總ての機關の根本を養成したいと考へて居りますが、私の大學校と云ふ意味には二通りあるのです。

第一は高等普通教育、第二は專門高等教育である。高等普通教育は人間を作るに缺くべからざる機關であり、高等專門教育は專門家を養ふに缺くべからざる機關であります。今後我が日本帝國の婦人は如何に教育すべきであるか。如何に養育すべきであるか。必ずや圓滿なる人と爲さなければならない。優美淑德を備へて居るところの婦人と爲さなければならない。智德に兼ぬるに健康を以てして居るところの國民を養成しなければならない。即ちこの人間を造るに、婦人を造るに、國民を造るに、高等普通教育が必要である。又女子は藝能を必要と致しますから、高等專門教育が必要であります。勿論高等教育と云ふのも、女子に對して高等と云ふのであります。又女子の簡易專門教育に對して云ふのであります。故に勿論其の時代の女子に適當の高等專門教育と云ふ意味であります。それで私は今日高等普通教育の必要も論ずべきでございますが、餘り長くなりますから略します。併し東京には女子高等師範學校があり、又諸方に高等女學校と云ふ樣

な備へもあるのに、その上に斯ういふ女子大學校と云ふやうな學校を起す必要は如何なる所に在るかと云ふ理由を少しく述べて終りたいと考へます。

（第一）今日の女子教育は器械的或は實用的になつて居る。職業的になつて居る。然らざれば遊戯的になつて居る。父兄が自分の子女を學校へ送るのに、何か教育をしておいたならば自活の途を得るであらうと考へて居る。然らざれば、慰み半分に勉強をさせて居ると云ふ有様である。それ故に器械的にあらざれば職業的である。又は遊戯的であつて、國家に最も必要なる人間を造り、圓滿なる女子を造るといふ教育が缺けて居るのである。即ち是等の缺乏を充たさん爲に斯くの如き女子大學校を要する譯であらうと思ひます。

（第二）は今日の女子教育には弊害が多い、どうも學問をさせると生意氣になつて、女らしい處を缺くやうになると云ふのが一つの弊害である。もう一つの弊害は學校へ遣ると世間のことに疎くなる。家庭の風に適しないやうになる。家風と云ふものに遠ざかつて來る。實際に役に立たないやうになると云ふ事であります。是等は實際女子教育の中に現れて居るところの弊害であつて、これを打ち消す事は出來ないのであります。然るに高等教育を授けると云ふことになると、その弊を一層烈しくするのではないかと云ふ議論が起りますけれども、それは教育と云ふことを知らない人の考である。教育と云ふものはさういふ不謙遜な傲慢なる所を去り、又は惡德である總

ての汚れたる點を取除いて純粋にするのが即ち教育である。教育と云ふものは種々様々に交つて居る金屬を熱火の中に入れて純金に仕直す所の方法手段であります。これは實際に於て現れて居る所の現象である。今日世界各國を歩いて見まして、多くの人に面會をし、交際をして見まして、實にどうも親切である、謙遜である、どうも善い人である、と云うて賞められる人は如何なる人であるかといふと、高等教育を受け、教育を全ふして居るところの男女であります。それで今日の女子にある惡弊と云ふものは教育を與へてこれを矯正するより他に方法はないのである。又今日家政に疎いやうになると云ふのは、社會にも一つの弊がありますが、一方から云へばその主なるものは寄宿舍である。寄宿舍の制度が悪いのである。もう一つは我が國の家庭が悪い爲に教育が出來ぬ。今日世の中に何所か善い處があれば自分の子女の教育を託したいと云うて居る人が澤山ある。この頃東京の有名なる教育家の中には、さう云ふ學校が出來たならば、假令其の學校が九州の端に置かれやうが、北海道の端に設けられやうが、私の娘を託したいと云うて居る人がある。どうも今日の寄宿舍制度が不完全であるから茲に一つの模範的學校を設立して、立派な家庭の風を造り、大いに善良なる家庭の風と精神とを注入する必要があるからして、今回完備なる理想的の寄宿舍の設備ある一大學校を起さうと云ふ必要が生じて來た譯でございます。

（第三）は今日の女子教育の缺點は女教員がないと云ふことである。實に模範の婦人がない。

善い母親となるやうな者がないと云ふことである。この頃私は學校の爲に善い人を集めて第一に、善い舍監を得たいと思ひまして彼方此方探して、種々な婦人に交際して見ましたが、賢婦は何れに在るかと云うて嘆息したことが、屢々ある。此の頃この女子大學校を起すに就いて、熱心に賛成して大いに骨を折つて居られる一人が、永く自分の子息の爲に善い嫁を欲しいと思うて、需めて見たけれども、どうも賢母良妻はないと云うて大いに嘆息し、これではいけない、どうしても女子大學校を起さなければならないと云ふ感じを起されたと云ふことでございます。

（第四）は音樂と云ふものはこの社會の腐敗を一洗する爲に必要である。家庭教育を助ける爲に缺くべからざるものである。然るに我が日本の音樂と云ふものは實に不完全である。我が國で一番發達しないものは音樂であります。殊に婦人に大切なる音樂が一番發達して居らない。また改良すべき點が種々ある。此の頃音樂專門家の言葉を聞きますと、我が日本は音樂に於ては彼の支那よりも、印度よりも、亞弗利加よりも劣つて居る。これを歐米各國に比較して見たならば、百年ほど後れて居ると云ふ事であります。併し今日我が國に於て音樂を發達せしむると云ふことは非常に骨の折れることで、學理的にやらなければならぬ。學問的に根本からやつて來なければ國民の道德心を直し、或は家庭の有樣を善くし、其の他種々の教育を全ふするやうな音樂は發達しないのであります。故に我が帝國にかう云ふ音樂即ち音樂部を有する所の完全なる大學校を起

さなければならぬと云ふ必要があります。

（第五）は我が國の教育の中で一番後れを取つて居るものは體育である。勿論精神的の教育もさうでありますが、體育は殊に後れて居る。一番研究の出來て居らないものは體育である。成程總ての小學校にも大學校にも體操と云ふものはある。これは如何なる體操であるか。唯各國でかう云ふ事をやつて居るからして、おれもやらうと云ふ事であるけれども、學理的に研究をしたのではないのである。それで今日の女學校でも男子の學校でも、一つの缺點は即ち學生の身體がわるい。身體を弱くして居る。發達を妨げて居る。このことはこのごろ文部省で調べられたところの統計が證明をして居る。歐米に於ても一時學問の爲に身體を惡くしたと云ふ時代が在つた。けれども今日亞米利加などの女子大學校、その他男子大學校の統計は何を表して居るか。大學校へ這入りまして這入りましてから卒業するまでに身體の機關が大變に進歩して居る。またその學校へ這入りましたところの女生は、學校へ這入らないところの女生よりは身體が良くなつて居る。これは彼の國の大學校から出て居るところの統計表に現れて居る。尤も一年の統計表を示すのみならず、毎週間統計を取つてやつて居るのです。これはどう云ふものであるか、その基は何處に在るかと云ふと體育學科と云ふものが盛んに行はれて居るのです。それに就いては獨逸には獨逸體操と云ふものがある。瑞典には瑞典システムと云ふ體操がある。亞米利加には亞米利加の體操がある。この

體操の術と云ふものは百年の星霜を經て遂に今日に至つたものであります。加之一般男子にも女子にも醫學と云ふ知識が注入されて居りますからして、この醫學と云ふ知識が大いに國民を發達せしめる。大いに身體を發達せしめて居る。然るに我が國に於ては體育學と云ふものは一向研究されて居らない。今日の體操と云ふものは學理に適して居らない。學理に據つて方針を定めて居らない。多くは各國に行はれて居るところの有樣を眞似てやると云ふ有樣であるから、これではいけない。矢張りこの身體を善くするには體育學が必要である。これが爲に矢張り大學校が要る。亞米利加の大學校には必ず體育部がある。また體育學校、或は體育大學校と云うてもよいやうな學校もある。それ故に今日我が國に於きましては學理を研究して、根本から改革をしなければならないと云ふ必要がありますが、今日の女學校には醫學を心得た本當に體育の分る教師は一人も居らぬ。今日は學校に於て醫學や生理學其の他衞生學の精神を吹込むと云ふことを大いに怠つて居るのです。私はどうしても日本の女子學校の爲に玆に體育學を學んで、少しく醫學や生理や心理や教育學が分つて居るところの體育教師を養成して各地の女學校へ派出し、大いに女子の體育を起さなければならない必要が迫つて居ると云ふことを感じます。故に將さに起らんとする大學校には體育部を設けたいと云ふ精神であります。

（第六）　にはその他衣類の爲にも家屋の爲にも、毎日我々が喰べて居るところの料理の爲にも

或は庭園の爲にも大學校が必要である。育兒の爲にも必要である。今日我が國に幼稚園と云ふものがありますが、この幼稚園の缺點は何處に在るか隨分總てのことが完備して居りますけれども、唯一點缺けて居るところのものは何か。即ち保姆が學理を知らない。唯恩物を與へて居る。運動をさせて居る。さうして何が爲にその恩物を與へるか、どう云ふわけでかう云ふやうな子供を扱はなければならぬかと云ふ學理に至つては保姆は知らない。それ故に却つて幼稚園には時々害を釀して居るところの弊がある。子供を傳する位の事には學問は要らないやうに思はれますが、決してさうではないのです。例へば私共が病氣に罹つた時に藥屋へ行つて藥を買つて來て飲めば治りさうなものであるが、さう云ふ譯にはいかない。どうしても醫者に據らなければならない。若し醫者に據らずして唯藥屋へ行つて藥を買うて來て飲んだならば——劇藥を飲んだならば偶には當てることがあるかも知らぬが、先づ多くは害を及ぼして遂に身體を亡ぼすと云ふことが起つて來る。醫者と云ふものはその道の學理を善く知つて居る。この藥を與へたならばどう云ふ結果を現すかと云ふことが明らかに解つて居る。この醫者と云ふものが私共の病氣を癒やす爲に必要である樣に、幼兒教育の爲に學理を辨へたる保姆が必要である。

實は今日私の頭腦は大いに疲れて居りまして、充分に皆さんがおわかりになるやうにお話することが出來ません。又一問題について一時間も二時間も懸つて說かなければならぬことを僅二分

か三分で申しましたからして、どうしてもその意を盡すことは出來ないのでございます。私は遺憾に考へて居りますが唯私は今日の我が國家と云ふ事を考へまして、この教育機關の有樣を考へまして、どうしても我が日本の爲に、我が教育機關の爲に、特に女子教育機關の爲に斯かる女子大學校を全國に三箇ばかり起すところの必要がありはしないかと思ふのであります。即ち關東に一校、關西に一校、九州に一校を設け、而してこれを女子教育の三大中心といたしまして、その普及發達を助ける必要はないか。これを文部省で直ちに着手すればよからうと云ふやうな考も起りますが、前に述べましたやうに文部省に於ては小學教員すら二萬人も缺けて居り、其の他種々事情がありまして、今日直ちにこれに着手は出來ないと云ふ有樣であります。此の際我々國民は大いに覺醒して、協同一致して、この女子教育の發達を助ける必要があらうと云ふ考で、この女子大學校の起らん事を希望して居りましたが、今や事略その緒に着きまして貴顯紳士の熱心なる御賛成を得、この大阪の地に第一に斯くの如き女子大學校を設立せんとする運びに至りましたことは國家の爲に誠に賀すべきことであると信じて居ります。

私は滿堂諸君の公共心、諸君の愛國心、諸君の義俠心、諸君の富の力は能くこの女子大學校を設立せしめ、且つ永遠に發達せしめ給ふところの力であると云ふことを信じて疑ひません。願くは私共の微衷を洞察されてどうか充分の御賛助を仰ぎたいと切望致します。（女子教育演說）

女子教育問題に就いて

明治三十年六月「女子教育演說」卷頭言

教育は邦家の生命元素となるべき人材を養成し、永遠不朽に發達すべき邦家の基礎を培養する須要機關なり。されば之が發達整頓を計らずして、徒らに邦家富强の策を講じ、永久の基礎を定めんとするは、猶砂上に家屋を建設すると一般、其の風雨の厄に逢うて傾倒せざるもの殆ど稀なりとす。思ふに我が邦輓近文運の進歩寧ろ驚くべきもの夥しく存す。其の教育制度の著しく整頓發達し來りて、山村の邊、水郭の畔、兒童の學舍に昇降するより、中央大都の下、世界に比肩すべき帝國大學の設けあるが如き、其の教育普及の程度と高等教育を施す學校數との如きは、之を歐米文化の隆運と同一視すべきに非ずと雖も、兎に角開國三十年間、教育制度比年進歩の結果として、一般國民知識の程度著しく增進し、同時に無學者の數減少して迷信漸く薄らぎ、惡風次第に改まり、從つて國民の品位徐々上進し來りしは、內外人の齊しく之を認識せざるを得ざるの事實とす。然り事實たるに相違なしと雖も、一度進んで之を大局の上より觀察する時は、吾人をして緘默を守る能はざらしむるものあるを見るなり。何ぞや我が邦に於ける女子教育問題是なり。

從來我が邦に於ては教育と云へば、無意識的に男子教育のみを指すものなるかの如く思惟し、加之實際に於ける教育機關も亦、專ら男子を教育すべく備へられしが如きの觀あり。勿論近來に至り、僅に女子教育の聲を聽くものあるも、其の聲や實に微且つ弱にして、しかも亦女子教育とは、半ば一種の遊樂なるかの如く思惟せられ、其の多くは實用を期せず、富裕餘りある名門富家の女子が、慰み半分に學ぶが如き迹なきに非ず、從つて其の高等教育を施すべき學校の僅少なると、其の組織の不完全なるは吾人をして轉た帳然たらしむるものなくんばあらず。故に其の所謂教育ある婦人と云ふも多くは半知半解のもの多く、世人をして往々其の弊害に堪へざらしめ、遂に非女子教育をさへ唱道せしむるものあるに到る。更に又教育なき一般多數の婦女子の如きは全く世運時潮の以外に別居して、國家の死生存亡に關する問題に對してさへ、冷々淡々相關知せざるが如きものあるなり。事情斯くの如くなるを以て、一般社會に於ける婦女子の地位、殆ど認識せられず、有れども無きが如きの觀あるはこれ豈文明國の眞相なる可けんや。況んや此の新機運に鞭ち、新運命を世界の活動場裡に試みんとする新興國の狀態なるべけんや。女子の天才を發揮し、女子の本性を發揚し、女子の地位を上進せしむるは實に我が邦戰後の經營問題中最急最要の問題なりと云ふも誰か敢へて之を拒まんや。

蓋し女子の社會に於ける實際の地位程範圍の廣く、其の責任の重く、其の影響の大なるもの少

なかるべし。手近く例せば、妻となりては其の夫に對する責任あり、母となりては其の子女を教養撫育する義務あり。其の子女と云ふの故を以て輕視し去る事勿れ。這般子女こそ、之實に將來國家社會を繼續す可き第二の國民にして、其の之を教養するの責任重大なるは云ふ迄もなく、影響の及ぶ所寔に一人一家に止らず、延いて邦家運命の消長興廢に大關係あるを忘るべからざるなり。經世經國に志ある者、眼中豈女子問題を沒了して可ならんや。

果して然らば、如何にしてか女子の天才を發揮し、勢力を發揚し、地位を增進するを得るか、此の問題を解釋せんと欲せば、吾人は女子教育を措いて他に求む可からざるを確信するなり。然らば即ち戰後經營問題中の問題たる女子問題も歸着する所教育問題に在るを知らずや。

女子教育、是實に刻下の最重要問題に屬す。然れども此の範圍は廣く、且大なる問題に對して吾人は今茲に之を詳論するの遑を有せず、讀者請ふ、其の詳細を知らんと欲せば拙著「女子教育」嵩山堂編輯の「女子教育談」及び今將さに出でんとする此の「女子教育演說」等を一讀あれ。然るに其の後世間往々吾人の本意を誤解する者亦なきにしもあらざるものゝ如し。乃ち茲に吾人が近時同志と共に其の設立計畫を天下に發表せし女子大學校の程度及び位地等に關し、聊か吾人の所信を開陳し以て本書の序言に代へんと欲す。

吾人の今將さに設立せんと欲する所の女學校は、之を稱して日本女子大學校と云ふ。稱して日

本女子大學校と云ふと雖も、其の實其の內部には幼稚園あり、小學校あり、高等女學校あり、大學本科あり、故に其の目的も亦必ずしも唯大學教育のみにあらざるや明白なり。之を要するに、日本女子大學校設立の目的大略三つあり。一に曰く、女子教育の上進を計るに在り。是高等女學校卒業後、大凡三ケ年修業の大學本科を設けんと欲する所以なり。而して此の大學本科あるは、即ち日本女子大學校てふ名稱の因つて起りたる所以なりとす。二に曰く、學理的並びに實地的に、女子教育を研究し、其の改善を促し、以て愈々日本女子に適切なる教育を發達せしめんとするに在り。是下に幼稚園、小學校若くは高等女學校を設け、傍ら以て女子教育研究の目的を達せんと欲する所以なり。それ斯くの如く、女子教育の上進を計り、改善を促し、以て間接に、女子教育並びに教育全般の普及を助けんと欲す。是實に其の第三の目的なり。故に日本女子大學校の目的は、唯大學教育のみを施すに非ず、從つて其の組織も亦唯大學部のみにて成立する者に非ざるなり。それ此の女子大學は本邦に於て創設に屬するのみならず、吾人は後來日本社會が進步發達するに伴うて益　必要を感じ、來る此の女子大學部に十分力を致さんとする素志を懷くが故に、其の內に幼稚園あるも、之を幼稚園とも云はず、小學校あるも之を小學校とも命ぜず、高等女學校あるも之を高等女學校とも呼ばずして、日本女子大學校とは稱したるなり。

又其の程度の如きは徒らに高遠を尊ぶに非ず、又卑近を好むに非ず。まだ嘗て世界に比類なき

一種特別の吾が邦婦人に必要適切なる程度の女子大學校を興さんことを期するに在り。故に或論者の言の如く、强ちに順序を誤り、程度に頓着せざる架空的計畫に非ざるなり。之を換言すれば、吾人が設立せんとする女子大學は、本邦女子の體力と智力との發達の程度に順當したる、一種特異の高等專門教育を施さんことを期するものにして、決して日本男子の爲に設けられたる帝國大學と其の高きを爭ひ、若しくは北米女子の爲に設けたる女子大學と其の度を等しうせんと欲するものにあらざるなり。それ均しく大學と云ふも、其の程度高低參差、必ずしも一定不動のものに非ざるなり。世には高度の大學もあれば、低度の大學もあるものなり。然り而して、吾人が女子大學を設立するは、本邦現時の女子教育の程度を、今一層高尙の度に進めんと欲するに在りと云ふは、取りも直さず過度に高等なる女子大學を設くるの弊を避け、本邦婦人に適合せる程度の女子大學を建てゝ以て順次秩序的發達を遂げしめんとする所以なりとす。

又或論者は曰く、本邦女子の中等教育未だ普及せざる今日、一躍して女子大學を設立するは、楷梯なき樓閣を建築すると何ぞ選ばんやと。是實に一應道理ある議論にして、等閑に付し去るべからざるものなりと雖も、詮ずる所寧ろ皮相の見たるを免れざるなり。之を內外の教育史に徵するに、教育事業の普及發達の跡には自ら低きより高きに進むと、高きより低きに及ぼすとの二途あるを認む。此の二途たるや、場合と時機とに臨み、前後緩急に應じて偏重偏輕なく、適用採擇

すべきものなりとす。若しそれ中等教育が具備完成せざる以上は斷じて女子大學を起すべからずと云ふが如くんば、到底女子大學設立の曉を見るべからざるのみならず、眞個に女子教育の普及發達を妨害するの甚しきものなりとす。

尙早論なるものは總じて何等の事業にせよ、之を創設するの際には、起り易き一種の反對論にして、吾人が初めて女子大學設立の趣旨を世に公にせし時より、既に業に豫期せし所なれば、其の起るは素より、吾人の怪しまざる所なり。然れども世人一般が其の必要を認識し、一人の尙早論を唱ふる者なき曉に至つて之に着手せんか、是既に幾分か其の時機を失ひたるものなれば、尙早論者の辯難聲裡に、之が創設に從事するは極めて緊要のことなりとす。而して吾人の意見を立證するものは獨り教育史あるのみならず、總ての事業の歷史は皆吾人の意見を立證するものなり。況んや本邦女子の中等教育は其の普及未だ完からずと雖も、識者の眼中には女子大學の必要既に判明せるに於てをや。

然るに或論者は曰く、假令女子大學設立の必要ありとするも、今日之を大阪に創設するの必要を認むる能はず、何となれば、大阪の教育は未だ十分普及發達せざるのみならず、大阪の境遇は教育に有害なりと。是亦實に一應道理ある議論なりとす。吾人は元來關東に一校、關西に一校、九州に一校、都合三校の女子大學を設立して、之を日本女子教育の三大中心點となし、以て其の

上進、改善、及び普及を謀らんと欲する素志を懷く者なるが、之を創設するの順序は、通常の場合より之を云へば、先づ東京より着手し、順次關西、九州に及ぼすべきを以て、當を得たるものなりと信ず。然るに日本の教育は殆ど東京に吸收せらるゝの觀あり、是日本教化の爲に決して賀すべき事にあらざるなり。教化の中心は成るべく之を地方に分配せざるべからず。而して關西に於て京都の如きは既に京都大學の設立せらるゝあるも、關西の小腦若しくは大腦の地位を占めたる我が大阪に於ては、商工業の發達頗る神速にして、其の機關も近年大いに整頓せしと雖も、尙一の教育中心點あるなく、一の教化中心點あるなし。是實に我が大阪の風俗が實利に偏し、人情が浮薄なりとの惡評を招く所以に非ずや。それ然り、教育機關の發達、三府の內最も進步し居らざるを以て、却つて女子大學を設立し、關西に於ける教化の中心點を造り、以て風俗人情を改善するの必要を認む。勿論一方より之を論ずれば、四圍の境遇善良なる所に學校を設立すべきは教育學者の定論なりと雖も、亦一方より云へば、學校は社會を教育し、社會の腐敗を淸むるの力を有するものなれば、腐敗せる社會には却つて學校の必要を認むるものなり。故に素より吾人は必ずしも大阪の社會腐敗せりとは謂はざれども、或論者の云へる如く、大阪の社會が果して一般の教育機關を損傷するに有力なりとせんか、却つて益々大阪に女子大學設立の必要を感ぜずんばあらざるなり、且つ社會境遇の善不善、良不良は、到底比較的のことのみ。東京の社會境遇は善

良なれども、大阪の社會は不善不良なりと云ふ者あるも、是只五十歩百歩の差異のみ。東京の社會境遇必ずしも有效にして、大阪の社會境遇は悉く有害なるもののみにあらざるなり。若し論者の說を嚴密に實行せんとせば、深山幽谷の地に學校を設けざれば能はざるなり。是到底言ふべくして行ふべからざるの說なり。假令其の境遇に一害ありとするも亦一利なきにあらざるなり。それ今後の日本社會は桃源の神仙社會にあらずして、多事多忙の活動社會なり。而して日本國中社會が最も活動し生命に充滿せる處は大阪を以て最とすべし。大阪は實に今後に於ける日本社會の活動の本源にして又中心なり。然るに活動社會に生存する者は活動的ならざる可からず。而して其の活動的の人物は、活動社會に於て之を養成せずんば得べからざるなり。彼の翠簾深く垂れ込めたる裡に人となりたる柔弱なる女子は、恰も暖室中の草木と一般未だ鍛錬足らざれば、活動的社會に於て何の貢獻する所も無くして終らんの恐れあるべし。加之教育法其の宜しきを得なば、却つて弊風惡俗に感染せざるのみならず、其の不良の境遇に對する反動の結果は大いに健全なる良心を養ふを得べき吾人の既に經驗する處なり。

是此の數點は則ち吾人が先づ第一に地を大阪にトし女子大學校を設立せんと欲する所以なりとす。（女子教育演說）

附　言

女子大學設立準備時代の講演錄としては以上を以て一先づ蒐集を止め、次ぎの明治三十四年東京に現在の日本女子大學開校に至るまでの設立豫定地變更の經緯、並びにその間の熾烈なる女子大學設立運動に對する先生の警咳は、既刊「女子教育」並びに、「女子大學設立趣意書」に依つて味讀する外なく思ひます。

右「女子教育」の外「設立趣意書」の概要は、既刊「成瀨先生傳」中の、女子大學設立運動の項を參照せられたく、尙又開校當初の實踐倫理筆記に多少の修訂を加へしものを以下附錄することにしましたから御參照下さい。

開校第一、二年の實踐倫理講話より

明治三十四年四月—同三十六年三月

倫理學とは如何なるものか

倫理學は行ひの學術なり。故に之を英語にて云へば conduct（行狀）又は ethics（實地行ふ）に當る學問なり。此れを以て moral science（道義學）或は freedom（自由）の學問とも云へり。凡そ世界の哲學とか、倫理學とかは、其の淵源を希臘に發し、日本の倫理は支那より傳はりたり。支那にては伏羲氏易を起し、天地間の理法を說きて以て人生に及ぼさんとしたるが、是れありしによりて我が國の倫理も大いに其の發達を助けられたり。斯かる事實より推すも、倫理學は實踐の學なりとも云ふを得べし。

諸子は今須く心の中に於て心理的大變化を爲さゞる可からず。是れ最も必要なる事にて理解的

のものには非ず。全く心の働きなり。予が切望する所は、諸子が悟りを開かん事なり。即ち悟りを開きし後、說明すべき事多し。心の變化は諸子が人となり、品性を作るにつきて最も大切なる事なり。婦人の知識を開拓する上に、又諸子が世に立つ上に學識も知識も勿論必要なれ共一層大切なるは品性なり。現今我が國の有樣を見るに、婦人の爲すべき事柄は名稱ばかりにて、實際は凡て男子の手にあり。知識足らざる故か、學識狹き故か、是れ世人の非難するのみならず、實際何か一つ缺けたるものあるに相違なし。故に諸子が進むに當りて先づ第一に自覺すべき事は、自分と云ふこと、並びに自己の缺點を知る事なり。人々己の失敗は實に殘念にて苦しきものなり。然れども、古來事を成就したるものは必ず失敗を重ねたる人に多し。失敗は實に己を研磨する所の試驗にして、之を重ねて後にこそ、大事業をも成し得るものなり。思ふに諸子の境遇は、恰も目下の季節に相當せり。即ち此の好時節——草木發芽の候に於て、其の知識を開拓し、良種を選びて農家の種播きする如く、諸子の腦裡に下種するに非ざれば、善良なる實を結ぶこと能はざるべし。故に先づ心を進化せしめざる可からず。是れ倫理學を學ぶ目的にして、實踐倫理の眞髓なり。即ち ultimate good 終局的善を研究し、生涯の目的を定むべし。次ぎには、其の目的を達すべき方法及び道を講ずべし。換言すれば、心意の進化と研究の方法とを發見し、且變化せん事を勉めざる可からず。是れ予が品性の修養と、眞理の研究との二方面より說き起さんとする所以なり。

吾人の理想

第一、我が國の品位を高むること

イ、女子教育を奬勵し、日本婦人として恥かしからざる人物を養成し、以て家庭の品位を高尙ならしむべし。

ロ、日本國民なりと云ふ觀念を强くし、外國に對しても我が邦の體面を汚さぬ樣に心掛くべし。是れは先づ國民の教育を普及せしめ、然る後初めて見る事を得べきものなり。殊に女子は家庭にありて直接子女教育の任に當るものなれば、所謂良妻賢母となりて其の任を全うすべし。

第二、廣く世界の形勢に注目して學術界に、實業界に、富國に、强兵に、我が國をして世界の競爭場裡の主人公たらしめんこと

斯くの如くならしむるには、是非社會を改良せざるべからず、即ち家庭の主動者たる女子を敎育して其の力に俟つべきものなり。

實に國家の盛衰は、其の國婦女子の賢愚によると云ふことを得べし。何となれば、婦人の賢愚は之を大にしては、社會の進退の步調となり、小にしては一家の興廢存亡に關するものなればな

り。而して社會を亂し、一家を亡ぼす事も、寧ろ男子よりも女子によりて生ずる事多きは事實なり。願くば女子たるもの、此に省みて自ら努力せられよ。先哲曰く、女子と小人とは養ひ難しと。此の苦言に鑑み大いに女子の品格を高め、其の學識を廣むる事を忽せにす可からざるなり。予は我が國の品位を高め、我が國の幸福を增進せんが爲に大いに女子教育に盡さんとす。

凡そ世の進歩につれて生存競爭烈しくなれば、人心も自ら輕佻浮薄に傾き易く、古の如く實着質朴など云ふ事は稀になりゆくものなり。されば往々國の爲を考へずして、私利を貪ぼり、我慾を逞しうせんとする者をも生じ、動〻もすれば、泰然として持する所ある潔白の態度を保つ事能はずして、世に云ふ小刀細工をなし、商業に、工業に、其の他百般事に就きて一時の益を計らんとする者あり。

我が日本帝國は四方海を繞らし、亞細亞より亞米利加に通ずる唯一の大港を有し、加ふるに產物も亦豐饒なり。故に海外輸出品の中にも名聲高きもの尠からず。然るに偶々狡猾商ありて、間間粗惡の品を混ずるにより、品質大いに低下し之が爲に外評をおとしゝもの、蓋し尠少ならざるなり。一例を云へば、茶、織物、生絲等の類これなり。然らば如何にして此の惡弊を匡正すべきか。曰く、先づ國民教育の普及を圖り、國家的觀念を發達せしめざる可からず。其の天與の寶庫を開き、之に人工を加へて琢磨し、外國の信用を固くして我が國の品位を高尙に保たんには必ず道德的

基礎に由らざる可からず。扨て今諸子の心理に於ける問題及び、內外より來る試みを大別すれば

第一、むづかしき事

生涯の目的、目的を達するに就きての決心、目的を達する方法。

第二、內部(感情)より起る試み

迷ひ、競爭、不平(不平に二種あり、自身に就きての不滿と自分の境遇に關する之なり。而して之をよく利用すれば己の益となり惡しく用ふれば事を破壞し己を躓かすものなり。國民の不平をよく用ふれば革命となり、改良となり、進歩を來す源となるものなり。或人曰く、不平とは意思の薄弱なる事と、自分に依るといふ事を缺くによりて起るものなりと。)

怪我、不健康(之は凡ての障碍の原因となるものなり。故に最もよく注意して健康を計り、活潑なる精神を養ひ以て知識を開拓すべし。)

第三、外部より來る試み

輿論の攻擊(一は嫉妬、一は主義の衝突)、近親の反對、境遇の變化。

外部より起る試みの中、主なるものは、輿論の攻擊にして、之には二つの原因あり、其の一は嫉妬により、一は主義方針—目的の反對(衝突)之なり。併し或は事をなし、或は自己の品性を造らんとする者は必ず戰場に立てるものと心得べし。夫れには非常なる勇氣を要す。如何なる讒謗

攻撃にも怯まず臆せず、之に打ち勝つべし。是は卽ち消極的の test なり。

今日諸子は困難なる境遇に立てる故、卒業後は大いに其の性質、境遇をも變ふるならん。此の二百人の諸子の中には、將來卓絕せる見識を以て世に出づる者あらん。又は內外の刺戟に堪へずして、凡々に終る者もあらん。されど予は、一人にても卓出せる人あらん事を希望するなり。又更に進みては、諸子が卒業後、大學出身の名に相應する所の有力なる婦人となり、社會に卒先して世人を導き我が國の教育、及び延いては東洋の知識をも開發せられん事を切望するなり。米國には、メレー・ライオンと云ふ一人の女子出でし爲に今日の如き國となりしにあらずや。世間の識者は皆云ふ。日本の教育は先づ女子をして進ましめ、今後その力によりて社會の空氣を一洗せざる可からずと。以て世の女子に俟つ所大なるを知るべし。諸子は此の重大なる世の期待に應ずべき、主義方針理想を有せりや、否や。又諸子の中に拔群の秀才を出すとも、今日の我が國の有樣にては其の女子一人の力に由りて進步せしめんことは到底望むべきにあらず。故に諸子は是れより相寄りて一の有機體となり、愛校心—親和力を養ひて其の目的理想を確定し、必ず成功せられんことを熱望す。

理想、目的、希望

同一の鐵にても磁氣を有するものと、有せざるものとの二種あり。而して此の磁氣を感ぜしむるには兩種を打ち合はすれば直ちに感應し、もとの力は少しも減ぜざるのみならず漸次擴がるものなり。諸子には果して此の力ありや否や。若し無しとすれば速かに感應せざる可からず。又有りとすれば之を人に施さゞる可からず、諸子は此の原動力を得ることに大いに勉むべきなり。古來聖人或は偉人などゝ稱せられし人々は皆此の力ありしによるなり。然れども、之とても容易に成功したるにはあらず。今日我が國の教育を唱導する者は、皆此の力の乏しきを歎ぜざるはなし。又人民にとりて云ふも、國民を統一するに困難なるを歎くなり。此に於て或人は、宗教によりて人心を收め、此の力を養成せしむべしといふ。例へば釋迦の如きは遁世して山中に多年の辛苦を盡し以て一の信ずる所を發見し、クリストは四十餘日の斷食をなし、マホメットは土穴の中に苦しみしを聞かずや。凡人と雖も此の理想—目的及び希望を解し得る時は此の境に到るを得べし。

理想、卽ち ideal は人の行ひにも事業にも、文學にも、美術にもあり。例へば、行爲にとりて云へば究極の善とも云ふべし。個人の行爲にも、學校にも、社會にも必ず一の理想あり。而して此の世の中は是非 utopia とならざる可からず。今日の如く戰爭などする有樣にては未だし。

希望（hope）目的に達せんには數多の困難あり、又多くの時を要す。されど如何なる事をも忍びて之に打ち勝ち、以て其の目的に到達せんとする大決斷なかる可からず。吾人の目ざす境地、

孔子の仁、基督の愛の說く所にして、佛教にては極樂、基督教にては天國と稱す。理想、或は目的を分ちて二とす。例へば倫理學、物理學等に云ふ學の意は二あり、一つは science 一つは philosophy 之なり。倫理學は moral philosophy と云ふべし。凡てのものに通じて最大なる理法を發見すると云ふ時には philosophy の語を用ふ。物には擬物と眞物とあり、而して擬物は空想なり。一種の power が出でざれば凡て甲斐なき事と知るべし。

諸子の此の學期間に必ず爲すべき事は

(1) 事物を研究する方法及び

(2) 永久不滅の精神―一種の動力

右　知識　讀書　記憶力　命令　講義　教授

左　能力　實驗　推理力　工夫　研究　自修

是なり。諸子は右の方法によりて如何に此の一學期を經過し來りしかを反省せられよ。從來は必ず右の方に重きを置けるを感ぜしならん。然し予は今後、諸子が一層奮發して左右平均に、若しくは左の方に多く傾かれんことを切望す。

試みに、諸子の理想を問はゞ或は云はん。賢母、良妻とならん事を欲すと。西洋の婦人にも往々曰く、淑女たらんことを望むと。之當然の言なりと雖も、熟考せられよ。男子にしてよき父となり、よき夫とならん事を期すと云はゞ、世人は如何に感ずべきか。妻に對して夫と云ひ、淑女と云ふ詞に對して紳士あり、之等は畢生の目的とすべき全體にはあらずして、僅かに一部分を指せるものなり。

我が國の教育及び、人民の思想は實に狹隘なるものとなれり。故に是非進化せしめざる可からず。西洋の一學者、此の進化と云ふことの定義を下して曰く、

「進化とは、吾人の中に宿る力の働きによりて、又一定の法則に從つて常に繼續せる進步的の變化なり」と。

ルソーは一の理想を描き、而して之が因となり佛國の革命は起りぬ。ピューリタンは一の理想の故を以て自國を捨てゝ亞米利加に渡り、今日の共和國を建つるに至れり。

コロンブスは印度に達せんとする一心より、新大陸の發見をなせるにあらずや。是を以て見れば、將來大學の業を修めんとする諸子は、今日の單純なる思想をして一層複雜に進化せしめざる可からず。知識を開拓しつゝあれば、不審、質疑等の交々來るあり。夫れに乘じて大いに心を振張せざる可からず。彼の多日莖葉萎縮し、恰も跡なきが如き有樣なりし草木が、一度春陽に接す

るや、忽ち葉茂り、花開き、立ち榮ゆるを見ずや。吾人心中の進化も亦方に是に似たり。

開校二ケ月を迎へて

本日は開校以來二ケ月と十四日目に相當す。此の間、實に短日月なりしと雖も我等は一の希望と、一の心配とを以て此の學期を始めしが、其の希望もどの程度迄達したるか、又心配もどれ丈けの結果を見しか。回顧すれば混雜多忙を以て此の期は經過せしも、併し我々の豫期せし程の心配、混雜は割合に起らざりしなり。扨てこれ迄說き來りし大意は、諸子が學問をなす方法、及び品性を養ひ、學校の精神を作ると云ふことなり。

我が國の教育は先づ、米國に、次ぎは英國、獨國にと交々採る所ありしが、初等教育より高等教育を通じて必要なるは勿論智育なれども、夫れよりも重きを置くべきは品性を陶冶し、所謂人物を養成する事なり。我が教育上、今日最も缺乏を感ずるは此の點にして、本校の特色は專ら此の點に勉むる事にあり。アメリカにはもとアメリカン・インディアン住み、淸教徒が移住せし其の當初は彼等土人の襲擊甚だしく、殆ど安眠するを得ざる程なりしかば、是は兵力よりも教育の力によらざる可からずとなし、兵備の費用を以て土人を教育し、以て今日の隆盛進歩の基を開き

たり。予は諸子の individual 卽ち各々の品性を作らん事を希望せしが、僅かなる此の短日月の間に於て、既に稍〻見るべきものありて、諸子の顏色態度の上に少しく變化を見るに至れり。

予嘗てアメリカにてボストンなるアンドバーの大學寄宿舍に入りし時、學生は大抵半白の老人にして、而も其の動作は小兒の如く實に無邪氣にして、談話することも一向つまらぬこと多きを以て、一度は落膽失望せしが、熱病に罹りし時、始めて其の眞相を知り、大國の學者、學生は斯かるものかと云ふことを始めて悟り、大いに感激せし事ありき。ウキリヤム・タッカー博士は時の大學總理にして、予等の社會學の教授なりしが、予の病めるを聞くや直ちに傳染性なる、而も外國の一書生なる予の病室を訪問せられ、萬端の指揮及び注意を卽座に決定し、且發熱中は毎日必ず二度づゝ見舞はれたり。又五十日間の就褥中氏の夫人の手にて好意を以て調理せられし種々の食品を三度ながら時々贈與せられたり。又、ウェーカー氏は優等生にして他日外國に留學生として派遣せらるべく非常に多忙なる際にも拘はらず、予の徒然を慰めんが爲に其の繁忙の中より毎夕來りて、面白き小說、雜誌などを讀み聞かせられたり。又或親友は、一日數回臥せる予の全身を鄭重に拭ひ淸め、種々の汚物をも一々手づから取りかたづけられ、其の他猶云ひ盡し難き介抱を受けぬ。又光線のよくあたる室に予を移すべしと醫師の勸告せしより、直ちに三人も室がへをなして、最もよき室に予を入らしめたり。（彼地の室はストーブ、炭、石炭等一切備へつけに

て、完備せる丈け容易に室を更ふべきにあらず。中々手間のかゝる、おつくうなるものなり。）

予が久しく居たりし家庭にては、雪の深き時などは、夫人自ら車を驅りて學校迄予を迎へに來られし事も屢々なりき。而して予が病を獲て此の家に歸りし時、二人の小兒は予が枕頭に睦れて予の頭を撫で、予の手を取り唱歌をうたひながら遊戯せり。其の歌の意は「あなたは牝鷄なり。我等は雛なり。親鳥の傍に遊ぶ雛の嬉しさよ」となり。予は之を聞いて實に骨肉の情をもちぬ。我が國人の動〻もすれば、座席を爭ひ、年少者を顧みず、或は外國人に尊敬の念を拂はざるが如きと同日の談ならんや。

扨て、倫理といふものは、倫理學として理論上より學ぶことゝ、實踐すべきが爲に實地實行に就きて修むるとの二つに分つべし。

而して此の學校の第一に勉むる事は、前にも云へる如く、品性を養成すること、即ち實行することを以て主とす。故に予は寧ろ學理としては、敢へて贅言せざるも、諸子は自ら誠めて發見せられんことを希望す。予が今日諸子に希望する所は、諸子自身の心の有樣を更へて眞に其の味ひを自覺すると云ふ事に在り。

前回に於て予は諸子に、神道にもせよ、佛教、或は基督、或は儒教、何なりとも一の據所を定め、以て其れに到着すべく一向專心に眞理を研究せられよ。諸子が取る所のものは、何にてもあ

れ予の束縛する處にあらずと云へり。此を以て諸子或は予の言を聞きて、然らば有神論にても、無神論にてもよしとて放任するが如く、さては撞着するに非ずやと誤解せらるゝ人々もあらんかと察せらるゝ故、更に此が說明をなすべし。

勿論宇宙間の眞理は一より外にあらざれども、古來數多の學者が之に達せん事に勉めて種々の學說を立て、以て今日に至りしと雖も、終に眞理に到着し、之が全權を掌握せし者は未だ一人もあらざるなり。彼のコロンブスが印度に達せんとしてアメリカを發見し、一時は此の地を印度なりと思ひしが如きも、此のアメリカの發見によりて終に世界を一周し、印度にも達する事を得しが如き皆其の間には多少の誤解もあるべけれど、各々夫々に取る所ありて猶撓まず、屈せず進み行く時は、何時かは眞理に到着すべし。諸子乞ふ、之を解せられよ。即ち何か一つの主義ある人となられよ。決して無主義の人とはなる可からず。換言すれば、理想あり、目的ある人とならざる可からざるなり。

希望（hope）諸子或は云はん。年若きを以て未だ定むる事を得ずと。メレ1・ライオンは如何。十三歳の時既に立派なる思想を以て一の希望を定め、之を生涯に貫徹せり。而して之がアメリカの今日の教育の基ともなりしなり。然れば之に徵するも、諸子の年齢は希望を定むる上に於て決して早きものならず。骨相學者は、人の頭を以て其の人物を知ると。曰く「人の頭には善事を希

望追求する機關ありて、之には大小あり、然るに他の動物は之を缺きたるを以て前途の理想―希望なし。是は人間に限りて存するものなり」と。

此の力の大小は個人に取りても、社會に取りても進歩の大原動力となる、最も大切なるものなり。諸子は須らく此の活力を得て、有爲の人物となられん事を切望す。

教授法及び試驗の方法

今日は第二學期に行はんとする教授法及び試驗の方法を布告すべし。是等の凡ての方法は、皆目的を達せんが爲の方便なり。構へて目的と方便とを混同し、或は主客を顚倒するが如き事ある可からず。

先づ諸子の學問を爲す目的を定めざる可からず。凡そ大學に入るに當りてよく人の問ふ事は、汝は學位を得んが爲にするか否かと云ふ事なり。而して學位を得んとするものは、論文を草して之を請求するなり。本校は諸子に學位を與ふるや否や。然らず。諸子は此の學校に於て資格を與へらるゝなり。而して此れを爲すには勢ひ多少の試驗を要するなり。惟ふに諸子の中には、實力を修養するが爲と、此の資格を得んが爲と其の希望に二種あらん。吾々は諸子が是れ丈けの程度

に進みたりとて、政府に交渉して學位の請求をなしたり又世間にこれを發表する等のことは爲さざるなり。諸子が卒業後直ちに facility ならざる時は、學位、資格などは何の効をも爲さゞるなり。諸子が此の校を卒業して世に立つ暁、諸子の責任の如何に重、且大なるかを思はゞ、此の三年間に諸子は如何なるものを獲ておくべきか。又如何なる人物となりおくべきかは問題なり。併し、此は予が敢へて喋々するを俟たざるなり。故に予は諸子の學力、主意等を早く知るの必要あり。諸子が果して成功し得べきか否かを問はるれば、予は答へん。「諸子が各々爲すべき事に勉め、其の取るべき方法を誤らずば、敢へて成らざる所以なきなり」と。

予の受け持つ所は實踐倫理學 practical ethics なり。之は純正倫理學 pure ethics に對して云ふ事なり。而して實踐倫理學は、純正倫理學の如く、理論、學說等を主とせざるも、其の中自ら整然たる秩序あるものなり。故に先づ之を諸子に咀嚼せしめん事を要す。現今、世界各國にて最も研究の新しきものは、社會學にして、これに續くものは、婦人問題、勞働問題等なり。而して是等は凡て practical ethics に含まるゝものなり。故に予が受け持つ處のものは、時々刻々に起り來る活問題にして、須臾も研究を怠る可からざるものなり。諸子と共に直接研究すべきものなる故、學生の進むに先立ちて實行すべきものなり。例へば時計の役は時を計るにあり、之をして其の用をなさしめんには、先づ此れを卷きて原動力を與へざる可からず。斯くの如く諸子各自が

研究の第一着として勉むべきものは玆に存す。諸子の生涯に決して滅す可からざる處の燃燒力を保つ事を得ば、予の大いに滿足する處にして、之を得るは卽ち教育の目的なり。

一、原動力　二、實力　三、方法

此の三つのもの揃はざれば、何事をも成就する事能はず。又大いに時間に損あり。今日世界各國の教育の有樣を見るに、我が國もその進步著るしきものあれども、眞理を發見する點に於て教育法の不完全未だしきなり。然らばそは何故なるかと云ふに、全く教育の方法宜しからざるが爲なり。故に予は教育の方法を根柢より改革せんと欲するものなり。而して之は先づ、諸子より始めざる可からず。予は知識の分量よりも、此の三つの點に重きを置くなり。此れを以て予が諸子に要求することは、經驗、實驗、觀察等に富み、卽ち自動的にして且最も適當なる學課を選擇して發達すると云ふ事にあり。

原動力とは如何なるものか及び之を得る方法は如何にすべきか

諸子各々その目的、理想に達する事を得ば、之を成功の生涯といふ。然る時は諸子自らの爲は

勿論、國家、社會の爲有益なる人となるなり。

而して之を爲すには資本を要す。例へば、時、金、才、健康、意志等は、必ず揃はざる可からず。是等のものは、成るべく多くを得べき事なり。其の成るべく多くを得るには卽ち原動力を養成せざるべからず。一、二の例を擧ぐれば、永くアメリカにて商業を爲しゝ人の話に、猶太人の娘を年久しく召使ひし事あるが、其の家に來りし時は、僅か十三歲なりしに、よく働きその熱誠驚くべきものあり。故に如何にして斯くも働くかと仔細に觀察したるに彼女は每夜就寢前に、一の本の如きものを見るを常とせしが、是は貯蓄銀行の帳面なりき。而して數年にして少女としては隨分多額の貯金をなすに至れり。之が彼女の唯一の目的にして、且猶太人の特性なり。思ふに、猶太人は今日迄、純粹なる血統を以て存すれども、猶太國は已に滅亡せり。故に富を以て第一となし、又何時にても旅行の必要を生じたる時の用意を爲さゞる可からず。特に女子は結婚なども殆ど貯蓄の多寡によりて定めらるゝ故に、若し、貯蓄なき女子ありとすれば、斯かる女は役に立たずとて、排斥せらるゝ有樣なり。故に此の一事が猶太人の凡ての行爲の動機となれるなり。支那人も、チヤン〳〵とて輕蔑を受けながら、よく數千金を容易に得て貯蓄する心に富めり。日本人は其の力乏しき故、外國に行きて商法を爲すも、數百金の利益を得て歸る者も少し。是等は金の事なれど、學問を修むるにも同樣なり。例へば、フランクリン氏の如きは大學に學ぶ事すらな

し得ざりしにも拘らず、彼國幾百千の大學卒業生を凌いで世界に名譽を轟かせたるが如し。扨て原動力に三種あり左の如し。

原動力
- 第一、性質―善と惡と、智力的のもの、倫理的のもの、審美的のもの、創造的のもの
- 第二、程度
- 第三、永久に堪へる事

教育の目的は、壓制的ならずして incentives を起さしむるにあり。諸子は成るべく其の點に迄達せんことに勉むべし。

扨て此の吾人をして活動せしむる力、即ち原動力を大別すると

incentives
- physical impuls　生理的原動力
- mental impuls　心理的原動力

身體に對しては精神とも云ふ。而して精神の働きを起さしむるものを incentives 又は motives と云ふなり。凡て語には類似せるものあり。故に注意せざる可からず。例へば行爲は conduct と云ひ、動作は action と云ふが如し。行爲とは、必ず吾人の意志に基きて起る處の活動にして、其の活動は、必ずしも身體の上に現れざるものをも云ふ。之に反して動作とは、已に行ひの上に現れたるものにして、必ずしも意志に關係せざるものをも云ふなり。

凡て今日我々が學問し、企圖する事も皆行爲なり。而して其の善惡は、悉く自己の幸禍損德となるものなり。故に行爲を善くせん事を佛教家に問へば、戒を守れと云はん。又クリスト教にては、行ひを正しくして十戒を守れと云はん。然れども、戒其のものが道德をすゝめ、人間を左右するものには非ざるべし。此を以て行爲なり、學問なり、眞に成就する人あらば、是は其の前に心が非常によく働きしなり。畢竟其のもとは意志なるも、意志を動かして此に至らしむるものは原動力に外ならざるなり。例へば、本校に多額の金員を寄附せし人夥し。其の精神を見れば、種々の精神より出でたる行爲にして、名譽の爲に、利己の爲に、或は愛國心、或は信仰心などより起れるものなり。故に、其の金額の多寡によりて論ずべきには非ざるなり。

諸子が學問を修むる上に於て始終養ふべきものは、精神を高尚にする事、換言すれば、原動力を養成する事なり。最もよき、高尚なる精神を養ひて取りかゝらざれば、眞の大業は成し難し。然らば、如何にすれば之を養ひ得べきかと云ふ事は、一の問題なり。即ち宗教、神學、哲學、科學等によらざる可からず。吾人は其の中の何れによるべきか。抑も人間の進歩發達及び吾々の成長の順序より考ふれば、最初に宗教、次ぎに神學、哲學、科學的となるが如し。

トランスヴアール國民が、非常の勢ひを以て英國に反抗し、少しも屈せざる所以のものは、一の宗教心なり。彼の蒸汽船が、蒸汽の力により石炭、材木等の燃料を要するが如く、吾人の心の

中にも燃やすべき材料を要するなり。而して此れにも種々あれども何にてもよし、要は其の取り方、即ち選擇の如何にあり。選擇宜しきを得れば諸子を幸福にし、悪しければ大いに害ふ。さて心理的原動力を細別すれば次ぎの如し。

心理的原動力
- 一、智能的原動力
- 二、倫理的原動力
- 三、審美的原動力
- 四、構造的原動力

選擇と改心

吾人の今最も勉むべき事に二つあり、第一は選擇にして、第二は心をかふる事なり。

第一選擇には善悪の二つあるのみ。故に最も適當に選ぶ時は常に善となるなり。

選擇
- 一、善……圓滿、全體
- 二、悪……偏、局部

吾人の心身には常に燃えてやまざる處の火あり。故に之が圓滿に燃ゆる時は善きも、偏すれば甚だ悪し。其の一例をあぐれば、米國大統領を暗殺せし者の言に曰く、予は幾度も此の兇行を遂行せんと狙ひしも、果すこと能はず、殆ど絶望せしも、或社會黨の一女子の演說中に「凡て各國の

國王は、悉く全滅に歸せしめざるべからず」と云へり。此の一語は忽ち予が主義決心を沸騰せしめ、予をして最早猶豫する事能はざらしめたり」と。或は我が國の伊庭想太郎の如き、國家の爲に一命を抛ちて星氏を殺さゞる可からずとなし、遂に此れを決行せるものなり。彼等の此の精神は、よく萬物を排して此の暗殺を遂げしむるに至りしも、暗殺は實に東西共に悪しゝとする所なり。彼等の心中に今少しく圓滿なる火が燃えしならば、彼等が國家に盡す所の精力は一層よく働きしならんも、惜しい哉、其の火力は一方に偏したるが爲に己の生命をも亡ぼすに至りしなり。

第二、心を更ふる事。今我々の心が癇癪してゐるとか、眠つてゐるとか云ふことあり。然るに悔ゆるとか、目がさめるとか云ふ時は、さきの我とは非常に變りあり。斯かる事を改心と云ふ。改心とは、從來心中に悪しき原動力の働きしを、今度は善き原動力が働くやうになる事にして、之を生れかはるとか、甦生するとか云ふなり。而して吾人の身體健全なる時は、心中に燃ゆる火即ち佛教に所謂煩腦はやむなきも、若し不健康ならんか、夜は眠るべきに眠られず食時ならざるに食氣を催す等の事あり。故に不健康なる時に凡ての慾に從はゞ、大害あり。斯かる人は大いに impulse を更へざる可からず、此の如き事は單り身體の健、不健に限らず、平生吾人の心中にも亦斯かる狀態あり。されば心に起る情は善きものもあれど悪しきものもあり、吾人の心には是非速かに更めざる可からざる事あり。而して之を改むるには三つの方法あり。

一、生理的變化より心理的變化を來すもの

昔は心理學と、生理學とは別物なりしも、今日にては生理學を學ぶには、必ず心理學を辨へざる可からず。心理學を研究せんとすれば、必ず生理學の知識なかる可からず。兩者は必ず相伴ふべきものにて吾人が人を教育する上に於ても又己を正しくする上に於ても考へざる可からざる事なり。

嘗て予の友人に放蕩者ありて、予も屢々注意を與へたれど甲斐なかりき。此の人は元來酒を好み、酒盃一度口に觸るれば、前後不覺の所業多かりしも、此の頃斷然禁酒せしに全く別人の如くなりて、溫厚なる人となり、家業に出精せり。此の人の斯く迄變りしは不思議のやうなるも、蓋しこは故ある事にして、此の程條虫出でたりと云ふ。條虫は其の口を取らざれば根治する事能はざるものなり。然るに夫れは非常に口長くなりて、隨分成長せしものなりき。さて此れが出でしより酒を好まぬ樣になりし由にて、即ち身體の有樣が變りてより、實に善き人になれりと云ふ。之は先日聞きし一例なり。其の他身體の變化が心に影響する事に就きては、其の例少からず。

二、心理上の一時の變化

是は何か心に非常に感動する事又は、非常に悟る事ありたる時に生ずる變化なり。是は誰も幾度も書にて讀み耳にせし事あるも、眞に其の事をするものなし。諸子の中にも、或は之を信ずる人少からんと思はる。眞に諸子の心に之を了解し、心中に一つの力を得られんことを希望す。

昔、アテネに極めて訥辯なる人ありき。聲は非常に低く、性質甚だ溫厚にして、恰も羊の如き人なりき。斯く語はどもり體は弱き人なりしも、一度時を得しより、全く別の人となり、古今無双の雄辯家となれり。此の人年甫めて十六歳なりし時、アテネにて、民法案に關して大演說をなせる人ありき。之を此の少年は聞きて大いに感激し、男子たるものは須らく斯くの如くならざる可からずと奮ひ起ちて、自分の聲を練習する爲に、野に叫び、海濱に出で、波の響きに勝つ發聲の練習をなせり。又或時は、調子を整ふる爲に石を銜みなどし、或は家に籠りて鍛錬し、又修辭學を研究し、思想を高尙にし、專ら將來大雄辯家たらん事に苦心せしが、遂に放逸安居せるアテネ人を喚起して、强大なる國家を形成せしめ、救世主とも稱せられしは抑も何人ぞや、曰く、デモステネス其の人なり。之は男子の一例なるがさて女子の身にして何としても出來ぬ事は兵役につくの一事なり。之さへ除かば奮發次第にては隨分男子の爲すべき事をも爲し得べし。然るに此の兵士の爲すことを敢へて爲せし婦人あり。之をジヤンヌ・ダルクとす。ジヤンヌ・ダルクは田舍に生れし一少女なるが、十三歳の時、佛國の危急に際し、負傷兵の事を聞きて大いに感激し、

身は一女子なるも佛國の爲に大いに戰はんものと非常なる苦心の結果、善く其の功を全うせし人なり。之等は例外なるも、一旦心のかへ方によりて、斯程の事も成就し得ると云ふ事は大いに學ぶべきなり。故に諸子が爲すべき事を成功するには、兎も角も非常なる困難を經過せざる可からず。其の力だに得る時は容易なる業なり。されば是非此の力を得られん事を要す。而して夫れには方法あり。

ジャンヌ・ダルクは極く內氣なる女らしき人物なりしも、この難事を耐へ忍びて成功せり。一は女の身を以て男の爲す事を爲し、天晴の大將となり、千軍萬馬の間に起ちて少しも狼狽する事なかりき。今一は兩親が如何程歎きしかも知れず。されど是が爲に少しも心を動かされざりき。又、一婦人の身にて兵士となり、佛蘭西の爲に英軍と戰はんと云ふも、誰か之を信ずる者あらんや。然れども屈せず撓まず、纖手よく萎微せる佛國の人心を鼓舞して一方の勇將となりし事、實に難き事なり。而して彼自ら善く此の難に堪へたる所以は、眞に愛國心の大なるものありしによるなり。凡そ人の世にありて非常なる事を爲さんには、手段あり。マホメットは三年間穴居して考へ、釋尊は山中に入りて行を積み、クリストは四十日間斷食をなして人民の爲に祈れり。

予が今日迄學校を持ちし經驗によれば何處にも三、四種の人あり。卽ち何か事ある時には、己の寢食をも打ち忘れて考ふる人あり、不平なる人あり、得意になる人あり、又何ともなき人あり、

例へば、學校全體に何かする時にも、話に加はらず、少しも關係せぬが如き之なり。斯く種々ある中にも、少々不平がる位は怨すべきも、最も惡しきは何も感ぜざる事なり。若し己の事より外の事は少しも氣にかゝらぬ者あらば、英語にてこれを selfish men と云ふ。世界中にて、最も愛國心の乏しきものは支那人、猶太人なり。此の猶太人及び支那人は、利己主義の外何をも思はず故に此等の徒は、世界各國何處に行くも愛國心のなき者として誰も齒せざるなり。國家に對する愛國心の必要なるが如く、學校にても愛校心の大切なるは、言を俟たざるなり。

予の久しく居りし町に、一億萬圓の金を自分一代に貯蓄せる人ありき。然れども公共事業には一錢をも出さゞりき。其の人の從弟に、ジョン・ポプキンと云ふ人ありて、大學の費用に應分の寄附せられん事を相談せしも、斷然拒絕したり。斯くて此の人は遂に誰にも之を與へずして死し後には七十餘歲の未亡人殘りしが、其の家に三十歲ばかりの園丁を召し使ひ居たりしに、此の未亡人は彼の園丁に結婚を申し込みて先づ二百萬圓を支度料として與へたり。其の後、予が歸朝して三年目に其の老婦人は死せしより、彼の大金は其の儘園丁の手に渡りしかば、巨萬の財は秋毫も世に益をなさゞりき。之に反して、サンフランシスコのスタンフォードと云ふ人は、同じく一億萬圓の金を有せしが、子もなく夫婦のみなりしに、スタンフォード・ユニヴアシチーの爲に悉く其の金を出したり。凡そ社會に利己主義の者多く出づる時は、其の國は決して發達せず。又斯

かる人は何處に行きても除け者にされ、社會の爲にもならず。故に全體の爲に考へるといふ事は何の上にも必要なり。吾人の一擧一動は、是が原動力となりて働かざる可からず。大金を出し〻者も、大なる公益事業なるが、生涯苦心して身を犧牲となし〻者は最も大なりとす。例へば布哇は癩病人多き所にして、之に罹れば或一小島に移されて一生其處にあぢきなく果つる習慣なり。然るに佛國の一女子は妙齡の健康體にして、將來如何なる幸福をも得らるべき身なるにも拘はらず、此の島人の不幸を慰めんといふ心のもだし難くて、遂に此の島に移住し、是等病人の爲に一命を捧げて十年間程働きたる後、同症に罹りて此處に死しぬ。其の志や賞すべし。

吾人今日の責任

一昨日の來賓中、湯本武比古君の演說に、此の日本女子大學校は、我が國に於ける唯一の女子高等教育を施す場所なり。故に凡ての教育界は皆模範を此處に仰がんと、注目して俟つ所なり。斯くの如く責任の重、且大なるを見ても宜しく全力を盡して世に益せられん事を希望す、と云はれ、西園寺公爵は、此の日本女子大學校を興し〻事は、日本女子の爲に一紀元を與へしものにして、東洋女子の新天地を開きしものは、實に此の日本女子大學校なりと稱せらる〻程に成功を奏

せよ、と述べられたり。横濱の或外字雜誌は、今我々は日本の外資輸入に、財政困難に、其の他種々の問題に就き心配せるが、此の日本女子大學校が成功せしならば、是等の杞憂は立ちどころに消滅すべく、以て東洋の文明を生む事を得るならんと云へり。之等は敢へて過言にはあらざるべし。

彼のジャンヌ・ダルクの如きは、國の將さに滅亡せんとする危機一髮の時に處して、斯程の事業をなし、國家をも救ひたり。我々は此の開明太平の世に生れて、何故に彼等の爲し〻程の愛國心を燃やさゞるか。之は只書籍を讀みしのみにては出來ず、一種の大なる力、即ち校風を生まざる可からず。一度之を生みおかば、永久に繼續して發達する事を得べし。日本魂は國民の生命なり。若し我々極少數の人々が此に校風を生みおかば、將來次第に發達せんこと疑ひなし。故に此の時代に當り、最も注意すべき事數ケ條を云はん。

第一、愛國心及び愛校心、第二、私心を去る事、selfish の弊害を具體的に例すれば解し易からん。例へば先日の夜會の如き折などに、諸々の役目を定むるにも、投票にすればやはり男子間には運動するもの等ありて、不平あり。甚だしきに至りては、人を中傷離間して叩き落しても自分が其の任に代らんとするが如き事少からず。斯く組織を作る上に於て此の selfish は弊害最も多く、且大なるものなれば、之を除かざる中は、團體をなして眞の organism となる事無し。

予はこれ迄、婦人會に、青年會に、廢娼論に、種々の團體より依頼を受け、又寮舍などの事にも度々干渉せし事あれど、何時も日本にては旨くゆくもの少し。故に、各國共に斯かるものにやと漫遊中にも此の社會事業に注意して研究せしが、西洋と我が國とは、凡ての點に於て大いに趣きを異にせるを感じたり。私心とは、先づ下に示すがごときものを云ふなり。嫉妬、高慢、我が儘、猜疑等。

團體的原動力

惟ふに、今日迄の吾々の有樣は烏合の衆に外ならざりき。只渾沌たる狀態なりしも、漸々進みて機械的の關係となれり。而して今少しく進む時は、始めて有機的關係の團體となるべく、凡ての事に此の三つの順序あるものなり。我々は今、有機的關係を以て其の中に一種の生命ある團體とならんことを希望せるなり。其の有機的關係を生ずるに最も必要なる條件は、吾々の心中に働ける活動力なり。若し吾々の心を圖に畫きて見るならば、隨分發達して大きなる頭腦を有する人もあり、又小さきもあり、種々雜多なり。然れど之を一つのものとして見るときは、物質の存在する以上は、必ず一つの力あり。そは凝集力なり。凡て物體と物體とが關係して、大きく云へば宇内となり、小さく云へば吾人の身體となる。それをさして引力と云ふなり。予惟ふに、若し吾

吾の心中に働く力が凝集力にして、私といふものゝみ働き、私のみが行爲なりしならば決して發達する事能はず。然れども其の間に物質が集りて體を成す時は、必ず引力を有するものにして然る時は vital power とか、親和力とか種々の名を付くるなり。吾々は有機的關係なる故、一の學校となり、一の會となる時は烏合のものに非ず。關係を相持して一の活きたるものとなるには物體ならば引力と雖も、心にては外の名を附けざる可からず。此の力なかりせば、眞の團體とはならず。而してこれを破壞するものは、物體にて云へば反撥力なり。例へば其の原動力となるものは、光、熱、電氣等もあれど、斯かるものが其の間に生ずる時は、こはれて了ふなり。故に茲に引力と、反撥力と戰へるも、引力が之に勝たざる可からず。其の反撥力の著しきものは、人の心にある嫉妬なり。是は凡ての團體を破壞する所の大なる反撥力にして、内閣も、會社も、皆之によりて瓦解する事、日本人の通弊なり。之は烏國なる故もあらん。又、封建の餘波にもやあらん。實に頭腦の狹小なるを示すものなり。之は獨り女子のみならず、男子にも高慢心とか猜疑心とか甚だ夥しく、彼の歐米諸國の人々の如く、廣量大度にして有爲の質を備ふる者甚だ稀なり。斯かる私心が一つにても我が心中にある時は何事も成功せず。諸子が此の校に入りて人と共に爲す事を勉め、反撥心に勝つ事能はずば、孰れの學校、孰れの家庭にてもやはり成功せず、度外視せらるゝに至らん。就中嫉妬などは、吾々の成功を害するのみならず、身體の成長をも害するも

のなり。其の次ぎに害をなすものは、虛榮卽ち名譽心なり。吾々が之に勝たざれば、何事にも成功せず。故に譏譽褒貶を意とせざるものとならざる可からず。社會に立ちて國家の爲、人道の爲事を爲さんとするには、之に勝つ丈けの力なくば、決して成功する事能はず。諸子が赤心を以てする事を、人より野心と云ひ、僞善と云ひ、樣々の惡口せらるゝとも、夫れが心にかゝる位ならば、寧ろ去つて隱遁すべし。是はやはり名譽心あるが故なり。吾人は國の爲盡すべき故に働くなり。古來聖賢を見られよ。皆僞善者、野心家と云はれて生命を終へたるに非ずや。されど永久の生命は、常に光明赫々として死せざるにあらずや。

次ぎに競爭心を去らざる可からず。他の人と我とを比較して、人より上にならんとするを競爭心と云ふなり。予は諸子が彼の人よりも己は勝れたりなどゝ比較せざらん事を望む。今諸子各々を見るに、各自の長所あり、短所あり、そは又各々違ふ所に於て長短あるなり。故に目と鼻とを比較する事能はず、物を見るには目に勝る所はなく、嗅ぐ事に至りては、鼻の特權なればなり。故に兎も角も吾々が互に事を爲さんとするには、目のやうなる人、口のやうなる人、各々に長所を持ち合はして交換補益せざる可からず。之を以て競爭せんとするは誤りなり。只我々は、昨日の我と、今日の我とを比較して進歩せんことを希はざる可からず。吾も人も共に進歩せんことを目的とすべきなり。次ぎには獵官熱と云ふ事あり。佛國人は此の熱最も烈しく、役人になるには

試驗をなす故に眞の學者は出來ざるなり。英、米などにては斯かる空氣なし。凡そ官途につける人が、必ずしも當時第一流の人物にはあらず。諸子が人と共に事をなす上に於て、虛榮心等よりかくかくなりたるが善しなど思ふは誤りにて、之は反撥力より出づる事なり。故に眞に夫れにならんとする者は、衆人の爲に仕ふるといふ精神なかる可からず。投票の場合にても、一度選びたる以上は、其の人が吾々の爲に仕へて呉るゝもの故、吾等は大いに感謝せざる可からず。畢竟凡ての事には、破壞せんとする力と、成功せしむる力とあるを以て、此の善き力が勝を占むれば、團體を成長せしむるのみならず、各個人をも、夫々成長せしむるものなり。こは全く有機的關係ある故に成長と云ふ事あるなり。

諸子が會を爲すにも、其の中に眞實の social-life が出來ねばならず、表面上の成立は何の効をもなさゞるなり。諸子は種々の方面より來れる故、各々違ふ所に長所短所あり。自重心のあるは善き事なるも、他より少しも感化を受けざる時は、孤立して進歩する事なし。會は始めは打ちとけて儀式ばらずに愉快にせざる可からず。諸子のこれよりなすべき事は、競爭、名譽、利益等が原動力とならずして、主義、研究、taste 等が原動力となりて、是等のものが日夜活動して發達せん事を要す。

抑も吾々の事を爲す原動力には、一時にして消滅するものと、永久に續くものとあり。消滅す

る方の力は、之を心理學上の語を以て云ひ現すに最も近きものは本能なり。

action を起すもとの力に種々あり。本能のみにて働けるものは下等動物なり。人間は最も高尚なるもの故、本能は少きも、本能的の働きを有す。即ち任意的に氣の向く樣にするなり。例へば、本を讀むにも、挿畫を見れば妙だなアと思ひ、讀んで見ようと思ひ立ちて讀めば此れは面白い。それでは猶讀み續けんと考ふる心を生ずるなり。

第一、眞に目的を定めて斯う云ふ事を得ようと思ひてするのとは違ふなり。外界の境遇によりてするは面白き樣なるも、境遇が變るか、六ケしき事に出で遇ふかする時は、永久に持續するものにあらず。忽ち消滅するものなり。

第二、名利、名利心が動機となる事は今日の人が事を爲す主なる原動力なり。是によりて大いに人を奬勵し、鼓舞するものなり。凡そ今日の人の、立身する有樣を見るに四途あるが如し。一は試驗、一は贔負、一は門閥、一は實力にして、就中實力によるものは、他の三者によるものよりも、二倍も三倍も骨の折れることなれば、實力のみによりて他を顧みざる人は甚だ稀なり。例へば先日聞きし話あり。或學校に講座開かれ、最初は只研究を目的として試驗をなさゞりしに、その始めには五人の生徒入り來りしも、漸次その跡を絶ちて遂に三人となりしを以て、已むを得ず試驗を課する事とするや否や、忽ち三十人の學生を得たりと云ふ。以て社會人心の如何に名利

を追求せるかを知るに足らん。さはれ名利に刺戟せられて起る所の力は永久持續せざるものなり。教育上の事も亦然り。今日我が國の學生は凡て此の方に滔々として走り下れり。諸子はよく是に注意して、その濁流に染まる事なく、折角計畫せる本校の目的方針を失ふ可からず。

第三、競爭心又敵愾心、義士仇討等は單に敵愾心のみより起るにあらず。義、孝を本とせるや明らかなり。之に反しナポレオンの如きは、非常に偉き人にて比類なき力ありしも、續く力にあらず。

第四、第三に反して他を愛する心、例へば博愛、仁道等なり。是より起る心は凡て尊し。

第五、研究心又眞理を愛する心。

即ち第四及び、第五の如き心が眞に吾人の心を動かす原動力となる時は、益々深く進みて永久に發達する事を得るものなり。此の二つのものが心を動かし、行ひを支配し、勢力の源泉となる人は下の如き特色を有せり。

一、其の人の爲す事は必ず一定し、又必ず一定の制限あるものなり。畢竟其の人は必ず心の中に是が私の天職なり、此の爲に私は生存すと云ふ確たる目的あり。故に多岐にわたる事なし。

二、活動と、研究とが心中に調和宜しきを得て、組織だち居ると云ふ特色あり。

ものは凡て同化し居ると云ふ特色あり。

是等の事を最もよく解し得るには、實例をあげて說明すべし。古來、大業を成せる人の經驗を聞けば明らかならん。斯かる人は皆研究心に富み、又爲す事に制限をつくるものなり。英の哲學者スペンサーは、生來多病なりしも、能く大業を爲せる人なり。當時の英國は、凡ての外國語を修めざる可からざりしも、氏は凡てを取らんとはせざりき。即ち氏が研究せんとする事に最も必要なる語學を爲しぬ。而して其の生涯に爲しゝ事は、隨分夥しきものなり。就中氏の始めて著述をなしゝは、三十歲の時にして Social statics 七十五部を著はせり。然れども、之を求むる人少くして十四年間に漸く購讀せられたり。次ぎは四十二歲の時 First Principleses を、四十四歲の時には Principles of Biology. を、五十一歲の時 Principles of Psychology を著はしぬ。而して彼が畢生の力を集注したる Principles of Sociology は實に三十六年の長日月を費して書きたるものなり。其の他教育學に關する著書も亦多し。

其の始めに當りては氏が研鑽を盡して著述すれども、世は顧みず印刷を請負ふ人も無かりき。故に氏は少しばかりの財產も是が爲に投げ出し且病身なりしかば、時には十八ケ月も床に就きし事さへあり。今年は已に八十一歲なるが、斯くの如く輿論にも容れられず、金に乏しく、病身にてありながら、力衰へずして非常の進步發達をなし今年は已に八十一歲なり。此を以て見れば、斯く永續する力を有する人は、自ら悉く他の事を捨てゝ、先づ其の本據を固め、自ら爲すべき事

を勉むるものなり。氏の著述及び研究は斯くの如く種々あれども、皆調和して、大、且つ一なる philosophy となれり。諸子の爲に諸講座を設ければ、どれも皆學びたく思ふならん。併し餘り手をひろげ過ぐれば、結局無制限となりて得るところ反つて無からん。故に餘程制限して調和宜しきを得ざる可からず。今は種々の事が頭腦に入り混ぢり居るも、融合して一の production を生ぜざる可からず。斯くなる時は諸子の研究力は如何なる事に遭遇するも、決して衰へず、進步發達する事を得るなり。ヘブライの諺にキヤメルラックド云々と云ふ事あり。其の意は己の取るべきものを失ふと云ふ事なり。返す〳〵も制限を加へ心の中の調和融合を計らざる可からず。

注意力の集注

之は或意味より云へば、日常必要の事にして、力ともいひ得べし。物の出來る人、力の有る人等云ふは孰れも注意力を集注し、又堅忍不拔即ち永く續くる力の有る人を云ふなり。有名なる文豪 Thomas Carlyle 曰く、續けるところの力は即ち天才なりと、genius とは文豪にて云へば、能力有る人の事、研究する人ならば original research をする人にして、物を仕遂ぐる迄は決して止めざる力なり。又、十九世紀に於ける佛蘭西のある大哲學者曰く、天才は延長したる注意

力に外ならずと云へり。予は更に云はん。之は始終必要なるも、又時々非常なる場合に於て非常なる注意力を出し、以て集注する事必要なり。吾人が常に使用する注意力は、一部分の物なるが或時は大腦及び、小腦に於ける神經全體の注意力に大凝點を作り、之に大印象を爲すべき時あり斯かる focus を作りて印象を捺さんとする時は、恰も寫眞を撮る時に少しも動かれぬ如く、一つの focus に一つの繪を映さゞれば、大理想、品格等を作る事能はず、例へば散漫せる日光を一つの鏡に受けて、之を焦點に集むれば、金屬をも熔かし、物を燒く事をも得るなり。之と同じく何人も必ず大いなる努力と注意力と無かる可からず。斯程の事は一生涯に於て度々は出會はざるも、普通の注意力を要する事は毎日有るものなり。其の一大凝點を作りて、此の印象を腦中に捺す事に吾々は力を盡したるものなり。

我々の生涯には時々非常なる難問題の起る事あり。之を解釋するは甚だむつかしきものなり。學生時代にては、人々の著書を見て過すも、之より活動時代となれば、自ら書物をも著述せざる可からず。即ち物を拵へねばならぬ事有り。此に至ればやがて社會の困難なる暗流は滔々として吾人を遮らんとす。其の時我が腦中に印象せられたる、立派なる品格と、之より出でたる堅忍不拔の精神、即ち永久に疲れざる注意力の集注無くんば、忽ち此の暗流に捲き去られんとす。

例へば論文を書くにも、能く調べの屆きしものもあれば、經らざるものも有り。之は骨折りが

少き故にして、綿密に調ぶる時は誰にも出來る事にて、人の生れつきには左程優劣あるに非ざるなり。茲に於て吾人自らの力を試し見るに二つの方法あり。

一、經驗に徵する事……注意力を集むる事が出來しや否や。

二、結果を見る事。

凡そ教育を受けし人なるか否か、物の出來る人か否かは、一見して解るものなり。而して斯くなる迄には、長き經驗を要するも、結局は其の人の注意力の如何によりて判斷する事を得。我が國の小學生と、外國の小學生とを比較すれば、其の差異非常に著し。

注意力の如何は、眞に其の人の力の如何を示すものなり。而して之は小兒の時より養成せずば、成人となりて後完全ならしめんとするも、容易ならざるなり。或經驗あり、學識あり、拔量ある裁判官の云へる事あり。曰く、吾人の brain と ability 等は、最も廉價なる商品なり。唯、空氣、水、火等の如く、缺く可からず。然も何處にも存在する物と同樣なり。然れども、之等を善く用ひて一の有機體と成れる其の ability は、實に尊く、古來稀なるものにして容易に得難きものなりと。

前にも云ひし如く prolong attention 即ち延長したる力、及び永久繼續する力必要なるが、此の上に well attention 必要なり。(aspiration 向上精神とも云ふ。)

吾人は注意力の集注に就きて、一時大いに熱したり。之は甚だ宜しき事なれども、之丈けにては冷むれば復元の如くなるのみ。然れば、此の熱したる時に鍛冶屋の如く極力鍛へて、立派なる印章を鑄造せば、冷めたる後も今迄とは變りて、立派なる物と成るに至るべし。之と同じく我々の精神も、熱したる時夫れきりにせず、必ず印を捺す事を忘る可からず。返す〳〵も品性を陶冶する事を忘る可からざるなり。

人の働き、能力、理想、思考、仕事等は、きれぎれにては甚だ小なり。併し、生涯を貫徹して統一したるもの、即ち統一的に組み立てられたる時は、初めて羅馬人の如く、有力なる働きを爲す事を得るに至る。品性の出來たといふ事は、偉大なる人と成り得る資格を養ひ得たりと云ふ事なり。之には、時機を失ふ可からず。例へば、盆栽の松と成るも、廣莫たる原野の松となるも其の初めは同じ種より出でゝ或程度迄は同じく進めども、或境遇に勝つ事能はず、此の時に勝つ事を得ざりしものは遂に盆栽たり。此の時機を失ひて一度盆栽となりては、如何に奮ふも遂に大なる松となること能はず。之に反し、此の時を切り拔けて勝ち得たるものは、即ち大いに發達すべき道に出で、自らの思ふ存分に成長し得るなり。斯くして品性の基礎の出來たる人は、此の大木の如く成らざる可からず。一度此の域に到達すれば、伸びんと欲する時は飽く迄も伸び得らるゝものなり。而して吾人に善化を與ふるものと成るなり。

品格養成

ナポレオン曰く「人は數字の如きものなり。一より十までの數は其の數字の價丈け。併し同じ六にても之を萬位の處に置けば、六萬となる。然れば校長となる時は、其の價値と實力とは、刺戟と熱心とによりて自然に出で來るものなり。故に人は成る可く好き地位を得ざる可からず」と之は我が國にても、古より行はれし說なり。地位と實力とは相伴ふと雖も、婦人の如きは萬一悪しき人に嫁げば、自身は如何にうちに寶を有するも、遂に世に立つこと能はず、恰も地下に埋められたると同じく、日蔭の者となるなり。然れども地位などは餘り關係せずともよし。唯好みて悪しき地位や悪しき人を選ぶ必要は少しもなし。注意すべき事は、自分に最も適當し、且好める地位を選ぶことなり。而して其の適當なる事業や地位には、萬事を捨てゝ最も忠實に盡すべし。之即ち自分の主義に働く事となればなり。換言すれば、吾人の意見に意志を從はしむるは、人間唯一の神聖なる事にして、主義の爲に爲すべきを爲すは、最も良き地位を得る手段なり。自分は之丈けの肩書あれば、此の席でなければ坐らぬ等と云ふ人は、却つて良くならぬものなり。唯自分の好みて爲しゝ事は、席は下でも何でもよし、之を忠實にすると云ふ決心にて、地位の高きを

望まぬ人は、眞に働く人なりと知るべし。

然れば人は、地位の卑きを恐るゝ事なく、唯自身の品性善に進み難き事を心配せよ。品性の立派に出來し人ならば、何時も失敗する事無し。性質の惡しき事は、惡しき缺點を憎むと雖も、其の人を憎む可からず。品性の善からぬ人は人として最も憫むべく、又其の人の生涯に取りて之程不幸なるもの無し。人は、馬鹿でさへなくば力に於て心配せずともよし。唯德性に於て缺けたる人程困る事はなく、其の人の不幸之に過ぐる事なし。此の德性に缺けたる程匡正し難く、又自分に見えぬものは無し。之福澤先生の所謂「人品教育は出來ず、之性は天性にして遂に直し難し。」にて、之は直されざるに非ず。直す事の難きを云はれたるものなり。

故に他人の事は自分が直りてからにて宜し。先づ己を直さゞる可からず。汝若し、人に用ひられぬならば、社會に出でたる後の事を氣遣ふならば、品性のまだ出來ざるところあるならば、之は人の所爲にはあらずして、責めは全く自らにあり。故に能く之を分析して反省百度せよ。然らば始めて修養と云ふ事を明らかにするを得るなり。

人の性は其の面の如く異れり。之と同じく學校の性質も其の名の如く異るものなり。學校の性質は如何なるところより成りたつか。之は寮舍、次ぎは各級の風より成るなり。

他を化する事能はざるは、やはり己の惡しき故なり。然れば、若し全體は善けれども或一人が

惡しゝと云ふ場合ありとも、其の人をさして惡しゝと云ふ勿れ。之自身が未だ人を感化する力無きに出るものなり。故に人を知るよりも先づ實踐躬行して、今迄よりも一層勵行せよ。又茲に團體の調和の出來ぬ程苦しき事は無し。友人間にても然り。斯かる時は、決して一方の惡しきには非ず、双方共に惡しきなり。如何となれば、彼が惡しき故に之は出來ずと不平を云ふは、此の場合にては双方共に云ふ事にして、此の時若し、眞に一方善き時は、決して人を怒らずして、大いに忍ぶところ有るなり。

無論高き理想と、下劣の理想とは一致せず、古來如何にするも感化する事能はざる人々も有りしかど、我等は爲せば成るのである。惡しき學校は惡しき人を責めて夫れに罪を歸する事多し。併し斯樣の事をすれば、其の惡風は到底直る事なし。故に斯かる場合には、宜しく人を誘らず他に罪を歸せず、自ら責むること必要なり。凡そ團體の不調和は、自らを許し、人に罪を歸する事より來るものと知らざる可からず。

孔子曰く、「學んで勵行し、道に達するを得ざる者は、未だ之有らざるなり」と。此の語は眞に人をして失望せしめず、如何に力無き者をも奮起せしむる唯一の語なり。而して我が國の古聖賢も、其の多くは何事も爲せば成る、と教へしと能く相似たり。蓋し又人を起たしむる秘訣か。

世の中に慈善と云ふ事あり。此の心無き人を吝嗇と云ひ、又最も理想且道德の低き人と云ふ。

而して隱德有る人をさして、非常に德の高き人と云ひ、陰險なる者をさして、惡の最大なるものとす。又一方より見れば、金錢に關せざる陰險及び詐僞多くあり。唯吾人は之を悟らざるのみ。

性質の曲れる者は人に憎まれ、醜けれど、之半ばは精神上の病氣なる故、身體上の病氣と同じく憫むべきものなり。然れば之を憎み、之を排斥せば、恰も大病人を憎むと同じく、實に人道に反する者に非ずや。卽ち大國民たる者は、之を陰に陽に救ひ直さん事最も高尙なる業なり。而して之には非常なる忍耐を要し、少しも其の人に知られぬ樣秘かに之を實行するは、大なる隱德と云ふべく、斯くの如きは金錢を多く惠むよりも、其の曲れる人に取りては尙一層有難き事なり。之に反して人の善行を見つゝも、知らぬ間に人の缺點を探し、或は知らぬ間に人々の間に毒種を播き居る人あり。例へば人のアラを探して之を密かに人に知らするが如きは、人を毒殺するに等しく、恰も暗殺すると同樣にて、斯樣にせられし人は遂に挫折する事有るべく、其の所行は實に罪惡の最大なるものと云ふべし。

學校の間に、若し此の隱德多く行はれざれば、校風は良くならず、讒誣の風行はるゝ時は、決して良き校風を作り難し。斯かる學校は、內に良風有りと雖も、一敗地に塗るゝに至らん。而して吾人の屬せる團體は、卽ち吾人の身體に等しければ、其の惡しきは、全體としても局部としても、皆吾人の身體の汚れたる事となり、其の善きも惡しきも皆直接我にかゝるところなり。故に

吾人は協同心盛んにして、之を取り除かざる可からず。予は重ねて諸子に云はん。「人の惡しきを云ふ事勿れ」と。

修德の方法

古より行はれて最も注目されし一の仕方は、人間の罪惡は總て心慾より來るものなれば、此の慾を殺して無我に成る事を努むるもの其の一なり。之を採用する人々の方法にも種々有りて、佛教、基督教に最も嚴重に行はれたるもの克己・禁慾などの方法あり。斯くして意志を强くする處の工夫を凝らすなり。併しこゝに考ふべき事は極端なる禁慾主義者は却つて人間の本性を歪め遂に自殺的行爲にまで導くことあり。人間と生れたる以上、人間の理想に生きざるべからず。然らざれば生れたる甲斐なし。故に禁慾主義、克己主義と云ふ事も、修德の方法として意志を錬り、而して宗教的無我にまで行く方法としては可なり。

抑も道德家は宗教に依れる人多し。現に我が國に於て、道德上の制裁なきは、宗教無きがためなりとする說は政治家、道德家の中にも多し。而して宗教に根據を置ける者の最も大切なる事は信仰なり。併し一言に信仰といへど、これにもまた種々ありて、奇蹟を信ずる者有り。又祈禱を

以てする者有り。故に此の信仰に依る事は非常に感化力有るも、其の裏には少なからざる危險も有れば、其の爲に誤れる者も多し。又誤れる他力主義に依れる者、又一方には唯我獨尊主義とて意志力即ち自力に依る者あり。之も動もすれば傲慢、無慈悲に陷る缺點を有す。又主觀、客觀と云ふ事あり。主觀に過ぎる人は殆ど精神病になり、客觀即ち境遇のみに依る人は殆ど精神無きが如き行爲をなす事あり。玆に於て形、抽象的模範、精神、實踐、應用、或は人物等に依る人も有り。諸子の中にも知識、其の他種々のものに依れる人有らん。然らば、何故に人をして失望に終らしむるかを考究せざるべからず。

以上修德の方法は種々有るも、其の一方に偏する者は必ず成功する事を得ず。故に予の考にては信仰、工夫等の力のみにては、修養を遂ぐるものには非ずと思ふなり。意、智、情、境遇、理想等に偏するは誤りなり。然らば此等には一も取るところなきか。否々、之等の中には非常に尊き眞理あり。故に各々の長所を採り、全部が統一さるゝに至つて、初めて効果有らん。つまり中庸を取らざる可からず。吾人の生涯には軌道あるを以て、之に外れざらん事を努むべきなり。

予の經驗によれば、多くの女學生は學校に在る間はとにかく軌道を踏み外さず行くが如きも、卒業後社會に出つるに及んでは、蹉跌失敗に歸する者多し。例へば、宗教に傾ける者は頑固なる頭と成るに非ざれば、精神病者、又は迷信者となり、或は社會の風潮につれて萍(ウキクサ)の如く漂ふ者有

り、彼の嚴然として怒濤の中に立つ巖の如き者は、實に得難しとす。世の多くの人を見よ。激情に驅られては衝突して倒れ、或は見識足らずして軌道に外るゝ者夥し。嗚呼、誘惑極まりなくして恰も亂麻の如く復雜なる人生に、正道を辿り行く事亦難からずや。而して人の世に處するや、綱渡りにも似たり。從來の人々の修養法は、實に此の危險なる綱渡り法のみなりき。

人生のあらゆる慾情を分ちて、物質慾、社會慾、精神慾とする人あり。又は、肉慾、智慾、體慾とする人もあり。禁慾主義に陷る時は、活氣無くして滅亡に至るべく、進步發見等は一も成る事なし。乃ち其の反動として起るものを快樂主義とす。快樂とは慾望を滿たすにあり。之等極端なものは到底調和の出來ざるものかと云ふに、決して然らず。宇宙には遠心力と、求心力との二つあり。遠心力は飽く迄も向ふに行かんとし、求心力は遠くなる程引き寄せんとす。故に吾人は願望力、即ち身體を壯健にして、益々其の力を働かせざる可からず。夫れと共に非常なる克己力即ち體慾、心慾、名利心等を制する力を養はん事を要す。此の二つの力相俟ちて能く調節する時は決して危險なる事無し。我々には非常なる活動力必要なれども、必ず生涯步むべき軌道が見えざるべからず、古の武士道は即ちこれなり。

今日まで軌道を外せし人の多くは感情を制し得ざるに因る。感情激すれば、行路を眩まさるゝを以てなり。予が諸子に就きて最も危ぶむ點は此の感情に激する事なり。今一つは、理性の力を

適當に働かす事、即ち判斷の如何にあり。非常なる事件に遭遇して其の事の眞相を知る事、及び之に對して如何に處置すべきかに苦しむことなり。諸子の現在は人に問ふべき時代なるを以て差支へなきも、諸子が一校を預り、一家を齊へ、諸般の事を自ら決すべき地位に立つべさ時は眼前に迫れり。故に此の力無くば人の上に立ち、人を支配する事は生涯出來得べくも非ず。之を以て感情の爲に軌道を誤らぬ事、難事に遭遇しても正しき判斷を下し得る素養、此の二點は諸子に就きて予の最も心配に堪へざるところなり。向上的精神は如何程強くとも可なり。唯此の求心力即ち克己力が之と並行して、大いに發達せざるべからず。

我々は遠心力と、求心力と、軌道を觀る明との三方面より研究して處世せざる可からず。若し一方を缺かば、品性墮落の虞れあり。故に修德とは、此の三點を平均に養ふ事にして、即ち智情意の德を平均に養ふ道なり。本務の數の多き如く、德も亦細別すれば、自己に對する本務を盡す力を勇と云ひ、家族に對するを愛と云ひ、國家に對するを義と云ひ、社會に對するを仁、自然に對するを智と云ふ。此の五德も亦三種の德に入るなり。勇と義との二つは意に屬し、愛と仁とは情に入り、自然に對する德は即ち智なり。故に予は意志と德との關係を說きて、修養法を述べんとす。

此の三つの德が平均に發達せざれば、品性墮落の虞れ有るにも拘らず、何故に第一の意より說

くかと云ふに、此れは歷史的の關係有る事と且修德に着手の順序より見るも、意を先きにする事を正當なりとす。何故に歷史的の關係が、意の德に關係の深きものなるか、又第一に意の德を養ふべきかと云ふに、抑も德の發達し來りしもとに遡れば、意の德は勇より發達し來れるものなり。

德といふ文字は、支那の儒教より來れり。西洋にて所謂 virtue は、羅甸語のヴイルトスと云ふ事にて、英語の manliness(丈夫)と共に孰れも勇と云ふ文字と同じ。勇—德、德—勇にして、東西の德の字義及び社會の德の根源は皆勇氣の發達に外ならず。我が國の德は大和魂にして、其のおこりも亦勇にあり。女德も所謂武士氣質にして、希臘の德も stoicism 英國の chivalry (騎士道)なり。stoicism は西曆紀元前第三世紀に出でし希臘の哲學者 Zeno の創設したるストア學派の主義にして、其は感情といふものを全く意志に從はしむるなり。彼はストアボイキレーと云ふ處にて學舍を開き弟子達に教へし爲、之より其の名となりぬ。其の目的は大膽、平靜、快活の德を養ふにありき。其の思想が發達して chivalry の德となりしものなり。

儒教の德の骨子も克己なり。即ち、見レ義不レ爲無レ勇也、とか、殺レ身爲レ仁 とか、克レ己復レ禮等の語あり。基督教の主義も亦同じ。基督曰く、「爾曹我に從はんと欲する者は、十字架を負へ」此の精神が修德の基となれり。故に德とは意志の習慣に外ならざるなり。己の爲すべき事の爲には、如何なる難關をも辭せずして意志の命ずる處に從ふが德なり。斯くして勇は今日も依然とし

て德の樞要の地位を占む。

今日は發達して圓滿になりしも、昔は德は卽ち勇、不德は怯懦なりと考へたり。

我が國の德育は、大和魂を養ふに有り。之は卽ち西洋にて云ふところの self-control にして、喜怒哀樂によりて顏色を變ぜず、志操を抂げざるなり。卽ち平然として己の爲すべき事に從ふの謂なり。女子には三從の敎ありて、彼我共に忍耐を主とするなり。其は婦人は主として、育兒、敎育、養老、看護等にあづかる者なればなり。三從の如きは云ひ易くして實際行ひ難けれども、現在の感情を忍びて、一層高き理想の爲に、總てを忍ぶ事と知るべし。之我が國女子敎育の根本にして、また德育法の根柢をなせるものなり。ストイック主義は、恰かも我が武士敎育の如し。Epictetus は、ストア學派の哲學者なり。此の人の學說と模範とによりて、ストイシズムは大いに發達せるなり。彼はもと奴隷なりしが羅馬にて敎育を受け、甚だ貧困なる上に跛者にてさへありき。併し此の人程艱難に遭ひて、しかも總てを忍び盡したる人は稀なり。其の主意は、人間の目的は思想にあらずして實行にありと云へり。嘗て奴隷なりし時、非常に虐待され、彼の主人は棒を以て彼を毆打せり。然れども彼は平然として曰く、「あなたがもう少し注意して打つて下さらぬと私の脛が折れませう」と注意せしに、主人は益々ひどく打ちて、遂に彼の足を挫折せり。其の時彼は怒れる樣子もなく、「先程云々の注意をせしにあらずや」と云へり。彼の膽力の如き

は、道德上、缺くべからざる要素にして、然もこは意志の發達せるものに外ならざるなり。

女子は比較的感情を制する力弱し。故に意志を發達せしむる事は、諸子の修德の基礎なり。諸子の品性を崩すべき試みは、諸子の生涯に多々あるべし。故にこれに添ふべき意志力なくば、忽ちにして其の品性は滅び盡すべし。卽ち先づ情と戰ひ、惡に戰ひ、己の主義を全ふせざる可からず。其の次ぎの勇の德は、從容卽ち狼狽せぬ事なり。現今我が國の學者、政治家は、實に此の力乏しき故、一事に遭へば忽ち其の職を辭し、又結婚する者も、終りを全ふせざる者多し。次ぎには堅忍不拔、之が養はれずば、其の人の生涯は必ず失敗に歸す。此の精神全身に滿ち、而も濫用せざる人にして、始めて志を生涯に貫徹する事を得るなり。聖書の神の言に、「我は嫉妬の神なり」とあるは、卽ち人民を子の如く思ふ故に、其の不正を許さゞるなり。親が子を害せんとする者を見れば、烈火の如く怒るは此の心ある故に愛情あるなり。フアラデーは理學者にして、大發明家なり。或人彼を評して曰く「フアラデーの柔和の下には噴火山の如く燃ゆる火あり」と。

意志の力、卽ち勇氣は、諸子が自由を得る爲に必要なり。自由とは、奴隷の反對なり。西洋には古來、奴隷、壓制等の行はれし爲に、人皆自由といふものを渴望せり。我が國にては、奴隷もなく、非常なる壓制もなかりし爲、自由の思想少く、文學等に於ても其の趣味を感ずる事も乏しけれど、奴隷は實に哀れなる境遇に在る者にして、此の制度は十九世紀の初めに至りて漸く廢

せられしも、或部分に於ては、未だに殘存せり（例へば醜業婦の如き）。世には肉體上の奴隷のみならず、精神上の奴隷となる者あり。卽ち束縛といふ事は、古來文學にも現れ、又我々も幾分か其の分子を含む事を感ずるなり（暴君、惡しき繼母など）。併しそれ等の爲につまらぬ心配に時間を費すのみならず、果ては身體をも弱くするは、やはり奴隷の境遇なり。諸子が業を成さゞる時は、其の敵は各自の心中に存するものと知るべし。故に自分の爲さんと決心せし事は、必ず仕遂ぐる丈けの自由を得ざる可からず。此の心の自由を得るには、意志の力、卽ち勇氣なくしては決して能はざるなり。故に若し、友人の我を妨害し、我に反對する事あらば、我々は其の人を憎まず、彼は精神上の捕虜となり、暴君の壓制を脫し得ざる者と見て、之を憫み助けん事に努むべし。然る時は、其の人に對して腹の立つことなし。

一、諸子の本務を全うする爲に意志の力を要す。

二、女德の中、最も大切なる柔和には、必ず意志の鍛錬を必要とす。

昔より勇敢なる人は最も宏量にして、且柔和なりと云へり。故に將來德を修むるには、先づ此の勇氣を養ふ事必要なり。

三、如何にすれば此の力を養ひ得るか。

之も細かく、且圓滿に考ふる時は、複雜なるを以て、後に至りて說明すべし。其の中最も必要

なる點を云へば、意志を最も善く使ひ、善く働かすべし。其は困難なる境遇にありて非常なる忍耐を續け、刻苦勉勵して進まんとする人を見て悟るべし。凡そ思想界の先導者、發明、發見者等、少くも天下の人目を惹き、頭角を顯はし、人にして、非常なる迫害、苦難の中を通過せざる者は無し。又、宗教、學說、黨派、文明等の跡を尋ぬるも、皆然り。現在世界中にて最も有力なる宗教は基督教なり。

基督教は羅馬といふ大强國を敵として三百年間相對峙し、幾多の人命を失ひし事は、殉教者傳に明らかなり。又ガリレオは、地球運行說を稱へし爲に羅馬法王より取消を命ぜられ辛うじて餘命をフロレンスにて送りぬ。佛教者の中には坐禪、斷食等によりて、意志を鍛錬せんとする者有るなり。斯くの如く苦難に耐へ又わざ〳〵その苦難の道をとつて我々の意志を錬りこれを發達せしめんとするなり。故に必ず之を通すといふ決心を以て困難と戰へば、我々の意志は研かるゝなり。之を忍ぶ事が最も愉快に覺ゆる樣になる經驗を積まざる可からず。

今一つは唯無暗に困難するのが善きには非ず。自分の一つの主義方針ありて、その中にて困難を忍ぶ事を要す。故に我々の意志には最も高尙なる目的を有する事必要なり。左に揭ぐる語錄は予の最も仰慕し、且咀嚼せし事なり。曰く、

予は三種の寶を持ち、之を貴み、且守れり。

第一、人道を愛する事

第二、節儉なる事

第三、予は他の人よりも勝らん事を思はず、而して人道を愛する故に恐れなし。儉約なる故に我は人に施す事を得るなり。

又野心と云ふものより、自由を得てゐる故に、誰も予の上に立てる者無しと。

之は最も吾人の修養となる語にして、此の主義を以て世に立つ人は最も立派なり。人道とは、人の爲にするといふ事なれば、此の考を以て働く時は、何の恐るゝ事も疚ましき事もなし。然るに當世の人は人道を卑しみ、慢慢にして節儉を輕んじ、浪費多し。而して野心に束縛せらるゝ故常に人に勝らんとして焦心す。之等の道を辿る者は、日に日に死地に進みつゝあるなり。

然るに此の主義有らば益々意志を固くし、着實に目的を達する事を得るなり。吾人の最も束縛せらるゝものを名譽心とす。之に由りて何時と無く卑劣に陷るなり。總て我を他に較べるといふ事は、團體の精神を傷るものなるが、之を有たざれば總てに自由を得て明らかなる事を得るなり。

修德と情との關係

我々は情の奴隷と成り易きもの故、極端なる克己論者は之を罪惡とし排斥すべきものとせり。

然れども情は然程我々を害するものに非ず。修德及び進歩の爲に缺くべからざるのみか、意志の力と相俟ちて、互に助くべきものなり。即ち情の力強くなれば意志の力も亦強くなる事、恰も宇宙の遠心力と求心力とに於けるが如し。故に一方を殺ぎて一方を強くする事能はず。情は斯くの如く吾人に缺く可からざる大切のものにして、而も非常に危險なるものなり。故に之を善く制し善く働かす事必要なり。決して之を無くして了ふのが人生の目的には非ざるなり。

情は果して克己論者の云ふ如く罪惡なるか

予は然らずとせり。情は德の土臺となるものにして、之には肉體的のものと精神的のもの、或は高きものと卑きものとの別有るも、之等は情そのものゝ惡しきにあらず、働かせ方の如何に由るなり。孔子の仁、孟子の惻隱の情、英語の compassion, sympathy, 等は、總て德の動機にして、慈善博愛等の原動力となるものなり。又復讐の動機は公義心の基となるなり。例へば赤穗義士の如きは今日より云へば復讐は善き事にあらざるも、其の時代の制度、思想等より見れば、必ず此の擧に出でざるを得ざりしなり。カントの所謂「全く動機を離れ、心情より獨立して、全然道德律に從つて事を爲すは、人間には爲し能はざる事なり。」孔子曰く、「人の善を好む性は恰も水の低きにつくが如し」と。之は性善說なり。

古より人間は最大幸福を求むる者なるが、其の最大幸福とは、所謂安心立命にして之を與ふるものは宗教なり。安心を得るは即ち道德なりと云ふを得べし。孔子の云ふ德は仁、釋迦は慈悲、佛蘭西の或學者は曰く、「善を爲すを樂しみ、實行する情熱有る者は、即ち有德の人なり」と。之等を總括して云へば、善は心情の理想的活動にして（理想的活動とは調和にして强弱各種の活動的順序の調和するを云ふ）、德は情の相互の衝突を防ぎ、活動の調和を保ち、之を平均して秩序的に爲すものなり。

何故に快樂を求むる事は空しきかと云ふに、之を求むるものは常に滿足する事無く、又之を求むる爲に身を誤り、罪惡に陷る者あり。之等は畢竟不調和に基くものにしてスペンサー曰く、「快樂の最高點は情の圓滿にあるなり。快樂は進化と同伴し、不快は破壞と同伴す。」と。之は盡し得たりと云ふ可し。何となれば心配、良心の責めは身體の健康にも心の發達にも害あり。浩然の氣、快活等は身體の發達にも心の發展にも益あり。併しながら玆に衝突といふものありて、之を混亂せしむる時は大いなる害あり。故に德に進む、即ち進化といふ目的を以て愉快に事を爲す時は、其の發達は非常に速かにして効果あるものなり。

智と德とに於ける關係

エピクテタス曰く、「人生の目的は行爲なり。而して行爲は意志の力に依りて爲す」と。又「德は意志即ち智なり」とも云へり。又、アリストテレス曰く、「德は物を選擇する力、事を熟考する力なり」と。世間には往々智を以て德に不必要なるものとし、却つて有害なりと云ひて女子にも學問を爲さしめざるを可とする傾きあり。又宗教家は智を輕んじて專ら信仰に重きを置かんとす。然れども思ふに、不善を爲し、不德を爲す者の多くは、物の解らぬ人即ち智のなき者なり。

又智は信仰感情を排斥し、論說理想と相反し、兩者相容るゝものに非ざる樣に考ふる事あり。然れども智の結果は理想學說にて、恰も吾人の魂に於けるが如く、而して實行は之に較ぶれば、恰も身體の如きものなり。智を缺ける人は、暗夜に旅行する者に似て、其の目的も見えず、其の道筋も分明せざるなり。故に智を輕んじて實行のみを重んずる人は、自分のみはよしと思へど、其の行爲は却つて自身を輕んじ、且社會をも害する事あり。又智なくして實行のみの人は、進步する事なし。idea ありて初めて進步する事を得るものなれば、吾人の尊ぶべき實行は、時々刻々常に進步的なるを要す。

智を分ちて四つと爲す

一、知覺

二、知識

三、智慧

四、智力

一、は事實を知覺する事、又は事實を記憶に存して置く事を云ふ。吾人の知識、即ち knowledge は、内界と外界との二方面より入るものなり。内界とは我を知ると云ふ事より始まる。即ち直覺的なり。外界とは即ち讀書、談話、講義等に由りて得るを云ふ。

二、は口に入れし食物を嚥下して消化せし物が、血となり肉と成り、骨となるが如く、内界及び外界より入りし知識を全く我が物として消化し、我が智となしたるものを云ふ。

三、は全く消化せられし後、力となりて働くを云ふなり。

四、智力とは反省力の意にして、此の力は自分の經驗及び他人の經驗、且は世界の事物に照らして反省するものにして、之によりて理想、目的、人生の至善等を定むるものなり。又結論をなす此の力は、未開の民と文明の民、下等動物と高等動物、德の高き人と俗物とを區別し、隨つて文明を生ずるなり。此の能力を發達せしむる事は吾人の修養上最も大切なり。

前にも述べたる如く、修德、信仰等に對して此の力は大切なりとする人と、之を否定する人と有り。信仰に重きを置き過ぎる人は此の力を輕んずる傾きあり。故に古來懷疑說を持つ人は、物を調べざれば信ぜず、又今まである所の考に疑問を起して見るなり。之等を異端者として排斥する考は、古より多けれ共、此の働きなき人は進歩する事能はず。英國の科學界の泰斗、ハックスレー曰く、「懷疑說は却つて我々の最も高き義務なり。而して迷信は避く可からざる罪惡なり。」と。

ともかくも如何なる宗教家も文明を否定する事能はざる可し。今や世界の大勢を見て進化と云ふ事を認めざる者は無からん。或人は此の世界に宗教でなければならぬなどいふもあれど、何事も總て reflection power によりて發達するものなり。即ち科學の力によりて進歩しつゝあるなり。

男女の心理上の區別の主なるものは、男子には此の懷疑力強く、女子は直覺力強き事なり。男子は信ずる前に必ず why といふ事を考ふれども、女子は此の考に乏し。故に女子は迷信に陷り易し。男子は取捨し、女子は心醉す。隨つて女子は如何なる親友を得るも之を益友とする事能はず。之は女子教育上最も恐る可き事なりとす。英國婦人の中には偏見にて物を定むる者多し。反省力により物を定めず、偏見によりて定むるは、保守的に傾く基にして進歩を妨ぐるものなり。女子の特徴とも云ふべき直覺力は、急なる時、又は文學等には必要なる事あり。

判斷に就きて

次ぎに來るものは物を判斷するに己の考よりも他人の說に依る事多し。聖敎、格言、輿論、他人の說等に依りて己の主義目的等を定むる者あり。婦人が自己の考のみに依らず、他人の說に依りて考ふる弊を云へば、

第一、他人の說に依りて考を定むる事は、必ず其の基礎薄弱なり。故に一旦其の敬服せる他人の說と反對なる說を聞かば忽ち變ず可ければなり。

第二、境遇により、或は輿論によりて變るなり。從來の女子敎育は危險を恐れて何を敎ふるにも具體化して敎へしも、實際、學問は斯くの如くするものに非ず。原理をつかまへて其の時々に應用すべきものなり。併しこれは敎育者の杞憂のみならず、自身の考、自己の說を立てゝ進步せざる可からず。

第三、他人の說に依りて事を決する人は、欺かるゝといふ恐れあり。基督も弟子達に對して、「爾曹を世に出だすは、羊を狼の中に出だす如きものなり。」と云はれたり。世の中は欺きつゝあるものなり。人に欺かるゝは不道德なり。罪惡なり。其は吾人の心には判斷する智力を附與せら

れたるに之を用ひず、不注意に反省の德を缺きて然らしむるものなればなり。

第四、自ら物を考へぬ人は、眞理に不忠なるものなり。君上に對し、眞理に對し、其の他、本務に、道德に忠實なる人は、決して油斷をせぬ者なり。故に此の反省力を養はざれば、基礎ある品格を養ふこと能はずと知るべし。

第五、運に任せて物を定める事、一例を擧ぐれば、我が國婦人今日の結婚法なるべし。先づ聞合せには財產、地位、性質、學問等、人のいふ事を聞きたるのみに賴り、其の他は全く天運に任せ置くなり。此れは己の思慮を用ひずして事を決する最も危險にして且最も不道德なる事なり。

判斷を誤るに二つの種類あり

一、心ならず判斷を誤る事——正當の判斷を得たき心はありながら、智力なきために誤る。斯かる人々は事に當りて狼狽し、感情を害するのみならず、失敗に歸する事多きものなり。

二、故意に判斷を誤る事——僞の人、不正直の人、曲りたる人。

兩者共に德に缺けたる人、惡人とも云ふべく、その身は禍をまぬかれざる可し。而して或行ひは、之等の中孰れに屬すべきか分ち難き事あり。其の判斷は我々に取りて容易からざる事なり。其は人の手前、己の利害等に關する情實を生ずるに由るなり。例へば楠正成、足利尊氏を論ずる

が如きも、善く當時の事實、歴史等を詳細に調ぶる時は忠臣、國賊等の判斷は下し難かる可し。若し其の子孫より考ふれば、更に容易ならざるなり。眞を眞とし、僞を僞とし、愛憎の念を去り公平にすれば判斷を誤る事少きも、今日の世ほど、之を誤れる世は無かる可し。其は愛情、都合、利害、好惡等の念に驅らるればなり。平重盛の進退の如きも當時の事情、道德より察すれば尤もなる事なり。何となれば其は公私の情を混ずればなり。

今日は八方美人と云ふ語有り。八方美人にて善くば差支へ無きも、實際に於ては白を白、黑を黑と分たざる可からざる事ありて、中々行はれぬものなり。孰れの方面よりするも一度判斷を誤る時は不德なり。其の判斷に迷ひ、進退玆に谷まると云ふことは必ず情實、公私、善惡等を混ずるにより、其の結果は常に失敗、禍なる可し。扨て物事を判斷するに就きての誡めに二種あり。

消極的の誡
- 物を判斷するには人の說、風說、輿論等のみによりて定むる事勿れ
- 情實のみにより物を判斷する事勿れ
- 利害の心によりて定む可からず
- 愛憎の念により定むべからず
- 好惡によりて定む可からず

積極的の誡
- 感情によりて定むべからず
- 偏見によりて定むべからず
- 良心によりて判斷すべき事
- 理性によりて定めざるべからず
- 道理と思ふ事に從ふ事
- ロヂカルに判斷する習慣を作るべし
- 自分の爲に總ての行ひの標準を定めて物を判斷し、何事も標準に叶ふ樣にする習慣を養ふ事
- 正義によりて定めざる可からず（眞理に忠實なる心を養ふこと）

予が諸子の爲に最も恐るゝ點は、感情に動かされて判斷を誤る事なり。昔十四世紀に英國が暗黑世界に陷り宗教、政治、實業等總て腐敗せし時、ウイリアム・ピットは「私のみが此の國を救ふ事が出來る」と云ひ、私情を去り正義一片を以て世を救ひ、民心を誠に歸らしめたるは何人も知る所なり。今日新聞に現れ來る總ての人心の動機は私情、情實にして、其の生むところは虛僞なり。社會は滔々として斯くの如くなるを以て、諸子玆に注目せずんば其の渦中に奪ひ去られ生涯得るところ無かる可し。マルチン・ルーテル曰く、「予は此處に立てり。其の他に爲すべき道無し。我は爲すべき事を爲す故に一歩も退くことなし。」と。其の意は、誠とすることのために

盡し、他を顧みずと云ふ事にあり。之を爲し能はずば、決して眞の事を爲し能はざるなり。

如何なる德を備へたる人を善人と云ふか

意を重んずる方の德は、勇氣及び不變にあり。動き、變ると云ふ事は最も惡しき事にして、之は意志の弱きに因る。人の眞價は言行よりも、心中の目的にあり。

智の德は智慧、正直、眞實等にして、眞を發見し、眞に近づかんとする事、而して情の德は親切、同情、寛大、慈悲深き心等なり。

此の智情意の部門を分ちて各々の德を記し、一つの表と爲し、さて全體に完備したる德を備へん事に勉むべし。然る後、第一に考ふべき事は、各々の部類に入るゝ德の中には、一寸考ふれば相衝突する點有るが如く見ゆるものあり。併しこれを深く考ふる時は、却つて此の三つの德完備して一つの大なる德となるなり。併し意の德を全うせんには、必ず情智の德加はつて之を助成せざる可からず。例へば智を缺きたる勇は蠻勇、猪武者となる。即ち愚者の勇、頑迷となるなり。情の德に智、即ち正義を缺く時は姑息の愛となり、却つて人を害するものなり。智の德に意を缺かば、亂行、優柔となる。故に此の中一を缺かば、決して完全なる人となること能はず。斯く云へばいと容易きことなる樣なれど、實際に於ては常識にて誤解せることあり。一方に偏したる人

を見て、最も尊ぶべく、甚だ善き人なりと思ふことあり。形態の不具は笑へども、心の不具を知らず。大いに崇拜する弊あり。諸子は決して此の誤解に陷る可からず。是非三つの德を全うすること必要なり。

次ぎに今一つ最も大切なる事を述べん。我等の世界は其の始め混沌たる有樣より成立せりと云ふ。混沌たる狀態より自然の運行によりて、秩序整然たる今日の如き cosmos とは成れり。宇宙間數多の天體あれども衝突する事なく、吾人と萬物との間にも一の關係あり。我等の身體も亦一の cosmos なり。此の cosmos に相當する語は日本に無し。諸子の知識は caos なるも、其の中に必ず cosmos とならざる可からず。修德の法も亦然り。種子の分子ありて必ず統一せられ、完備せる cosmos となるべきものなり。斯くして初めて吾人も亦 unity となるを得べし。然る後、相寄りて社會、國家、宇內と云ふ大なる cosmos を作らざる可からず。

杖を捨てよ、自ら歩め

諸子の熱心に力を用ふべき事は、品性陶冶、團體的精神、實力を養ふことなり。此の兩者の關係を能く解釋する時は、決して別物に非ず。例へば吾人の健康の如し。心も亦然り。我々の日々

得る新知識は我々全體の食物なり。毎日見聞する所のものが、唯暗記的ならずして實力となるならば、則ち品性の陶冶に與りて力有るものなり。此の二つは本校創立の始めより、能く諸子に了解せられん事を希望せり。故に予が本校の學生に實力を得しむる主義方針は、諸子が從來經驗せし方法を根本より改良せざれば、本校の望むところの人物とはなること能はざるなり。然るに今日の試驗法は暗記のみを以てす。學生は金箔を得んとし、社會の病源は依賴心より發す。故に諸子は眞に實力を以て世に出でざるべからず。さすれば何も諸子を妨ぐるものなきは明らかなり。

專門の學校ならば生徒を藝人になすべきも、本校は然らず。其は生涯の勝利を得せしめんと欲すればなり。諸子は水桶となる勿れ。噴水となれ、泉となれ。校風、學風も之よりは具體的に說明すべし。一番時のかゝる、然も獨立して爲し難き學問は何かと云ふに、先づ外國語なるべし。

之より後、外國語は必要益々多くして、其の書は愈々得易くなるべし。吾人は廣く世界に通ずる語を知りて思想を交換し、知識を廣く、且高くせざる可からず。故に或人は「語は家の窓の如きものなり。」とも云へり。自國の通用語を廣むるにも、外國語を知ること必要なり。coffee, lemon, orange, 等を始め match, station 等は殆ど今日は我が國の語となれり。idea, thought 等も日本の文字にて表さんとするも、其の眞義は解し難し。唯英文の中にて自然に認むることを

得べし。故に國文を學ぶにも外國語を知らざれば、國文その用を爲さず。今一つは交際上實用に便なり。而して教育上必要なる事は言を俟たず。之より少しく予の經驗を述べん。

予は十三歳の時蘭學を始めしが、十五歳にして英學に移り、辭書と文典の書を求め、之に由りて學ばんと欲し、或先生に問ひしに「無益なり」と云はれ、大いに失望せり。而して毎日少しづゝ reader を讀みしが、十八歳の時外國人に聞きしに、「自分でせよ」と云はれたり。此に於て方法を定めたり。即ち

第一、獨立。忙しき中に少しの時間を之にあてゝも爲さん。而して一日も怠らざること。

第二、實際に用ふべし。決して飜譯を日本文にてせぬこと。

第三、心理的原理を應用し、必ず學理的方法を用ふることこれなり。

予は十三歳にて國を出でし時より、旅費、學資等一切親より受けず、十八歳の時大阪に梅花女學校を建て、五學級を一人にて教へ、小使を置かず、校長、教師、會計、用達等總てを自ら辨じ常に一時過ぎて寢に就けり。三度の食時の後、十分間計りづつと毎朝便所に行きし時と、道を歩む時、及び人を訪問して待たさるゝ間等を語學の勉强に充てたり。斯くて二年の後には Encyclopaedia 等を用ひ通辯をなし、又外國人と相談もなせり。予は此の時より暗記をなさず、學校に入らず、師につかずして之をなせる者なり。併し幼時には小學、中庸、大學、論語、孟子、

十八史略等の素讀より進みて、蒙求、論語、孟子、史記、十八史略、春秋、日本外史等の輪講を爲し、漢文、漢詩等をも作りたり。斯くて師範學校に入り、頭髪既に半白の人を友として劣らず六ケ月毎の試驗に首尾よく及第して十六歳の時卒業せり。茲に於て予は金箔をつけて巡回訓導となりしも、之に甘んずる事能はず。之より獨學に由らんと決心せり。今日の人々の學問の進まざるは、心足らざればなり。而して最も大切なる事は、順序なり。耳の語、眼の語、話の語、字引の語等あり。要するに易きより入るべし。故に日々に讀むものは非常に面白く、心に泌みつきて感ずる物、肌身離さじと思ふ程の書を撰ぶ可し。

次ぎには心理學の原理を應用すること。即ち心の働きなり。耳と眼と口とを馴らすこと。又子供らしくなる事故心のはたらきは左程要せざるやうなれども、我々の自然に從はざる可からず。茲に於て最も大切なることは心のはたらきなり。吾人が物を考ふるにも語を用ひざる可からず、故に最も便利なる語を用ひて考ふる傾きあり。予は屢々外國人より問はるゝことあり、「君は物を考ふるに、日本語にて考ふるか、英語にて考ふるか」と。其は、英語にて物を考ふる習慣をつくれば、英語も自然に進む譯にて、同化せざれば如何に暗記するも効なし。又英語を學ぶには、英語に漬からねばならぬと云ふ人あり。此は一理あることなれど、頭を馴らし、耳を馴らすことは自ら爲し得るものにして、或人は蓄音機を耳にあてゝ發音を直す法によるもあり、要するに注意

力を集むること、明白なること、判然と理解することは、學問を爲すに最も大切なる事にて、之は面白く感ずる時に起る事なり。又實用に充つること必要にて、予は始めより之をなせり。今一つは新しき事、面白しと思ひし事は、新聞などにて必ず讀む事なり。又書くことを怠るべからず。之は題を課せられて、苦しみながら爲すに非ずして、自ら樂しみて爲すこと及び話すことなり。心の合ひたる仲間を組みて、四、五人にて英語のみにて互に面白き話を爲すなり。

凡そ物ありて idea 成り感ずるところより word 出づ。故に成る可く實際と、語とを離さぬ樣に勉むべし。自ら爲すことは遲きやうなるも、成功の基なりと知るべし。

學理的方法とは、外國人に賴らずとも僅かの時間の用ひ方によりて、必ず爲し得らるゝものにして、之は獨り英語のみならず、何の學問にても斯かる風に自ら修むる時は必ず成功するものなり。

諸子生涯の志として全力を注ぐ可き事は何なるか

天職、本務

之は左程解し難きにあらず。又諸子自ら運動して求むべき職にもあらず。今諸子を賴むが如く仰ぐが如く、呼びなす聲、さし招く手は、果して諸子の耳目に映ずるや、否や。其の聲は切なり。

望みや急なり。それが耳目に見え、聞ゆるならば、我は責任を全うするに足るべき力ありや、用意ありや、と省みれば、其の聲の何處より來るかは明らかに認めらるゝならん。

今日の我が國家、社會、家庭は諸子を待つこと甚だ切なり。今日地位を與へよ、名譽を與へよ、と絶叫する者は、雲霞の如しと雖も、眞に本務の爲に一命を抛ちて盡す者は稀なり。今日の我が國は人物拂底なり。之最も我が國にとり恐るべき弱點なり。今一つは今日國家の急を見て、直ちに起つ人あらざることなり。

斯くの如き狀態なるを以て、國家は女性諸子に向つて、非常なる熱望を以て殆ど願ふが如く、呼びつゝあるなり。諸子自ら難しとせん。世人皆然り。さりながら女子によりて挽回することを得べしと、望みを囑する者有り。予も亦その一人なり。之は諸子一人にては成し難きも、團體の力によりて諸子各々出來る丈けの力を以て之を引き受けて起つ者あらば、必ず此の要求に應ずる事を得べし。諸子或は躊躇するところあらん。然れども諸子の國家に對する本務と、家庭に對する本務とは異なることなし。國家、家庭、父母の呼び聲は、一にして二ならず。今一つは到底我が力に及ばざる事にあらざるかと云ふ問題起るべし。諸子の力にては成る程骨は折るゝなり。我が力にて出來るや、否やを考ふるには、先づ己の天賦の性能より思はざる可からず。而して諸子は、女の手にて之を爲し得る力有るなり。又之を爲すが最も適當なる天職なり。

古今興亡の跡を考ふるに、皆原因するところあり。故に予は、必ずしも今日諸子の手を以て之を治す可しとは斷言せざるなり。此の大病に弱りたる者を養ひ立て、身體に榮養を與へ、社會の衝突を融和せしむ可き天性を備へ、社會の調和者、國家の教育者たるべき感化力を有するは女子なり。之は決して予が獨斷にあらず。

昔より活眼を開きて社會の狀態を見、後世への豫言を爲せる人々も、皆異口同音に稱ふるところなり。

佛蘭西の或學者は曰く、「天地間に於て、社會を感化する力の最大なるものは、婦人によりて保たる。婦人は善惡孰れにも、最大なる感化力を有す。」と。又或人の曰く、「佛國の社會にて中流以上の者にして犯罪せる人の百中、九十九迄は、皆其のもとは婦人にあり。」と。

羅馬のカトーは、「羅馬帝國は、今や世界を統轄せるが、其の羅馬を統轄せる者は婦人なり」と云へり。婦人自ら本務を重んじ、社會が婦人を重んじたる時は、羅馬隆盛の時代にして、然らざる時は衰亡せること、事實に照らして明らかなり。之等の事實を分類して眞理を探求する時は、古來幾多の學者の云へるが如く、其の本は婦人にありといふ事に歸着す。國家の風、腐敗したりと云へば、その國家は衰へたりといふべし。斯くの如き風潮の源は、家庭にして、其の本は婦人なり。家庭は小なるが如しと雖も、國家の風を作るところの基なり。

今一つ國家の風――性質を作るものは個人の品性にして、之亦母の薫陶によるものなり。有名なる人の傳記を見よ、皆云はずや、「我が成功は實に母の賜なり」と。之は予の例證するを俟たざるなり。然らば則ち今日社會の風惡しきは、母より及ぼしゝものと云はざる可からず。故に國家の風を正しきに歸さんとならば、先づ根本なる母親の教育より始めざる可からずといふ事は、世人の既に認むるところなり。

然るに今日の家庭は如何、確乎たる意志を抱き、社會を感化すべき力ある母親は、甚だ多からざるなり。源淸からずば其の末を如何せん。即ち諸子が立派なる家庭を作り、其の模範を示さるゝならば、國家の大慶之に如くは無し。

吾人は二千萬の同胞婦人を教育せんと欲するものなり。今日の高等女學校教育、男子の教育、家庭、寄宿舍は如何。單に書籍を暗記するのみ。之を改良するには、總ての方面に於て適當の働きをなすこと必要なり。故に立派なる家庭、立派なる母を作るといふことは即ち立派なる國家を作る事なり。之を爲すには又種々の活動を機關として、其の目的を達せん事に勉めざる可からず。之を總括して云へば、教育の一言を以て足れりとす。予の所謂教育とは、品性を作り、家庭、社會、國家を教育する事なり。之は最も尊き天職なりとす。孔子の如く、ソクラテスの如く、ルーテルの如く、人を奮起せしむるところの人物を出すも、皆教育にあり。之諸子を俟つ事、最も急

なる所以にして、此の任務を完うせずんば國家の前途は安からざるなり。

時に就きて

力と方法

予は先日も十九世紀は世界に於ても、又日本に於ても、非常に事業の進歩發達せし時代なり。廿世紀は婦人の時代にして、又日本に取りては婦人の爲に一の新世界を開始せしものならんと云へり。然るに此の日本女子大學校は、廿世紀の曉に當りて誕生せしものにして、諸子は其の始めより一の志を立てゝ入學せられし人々なれば、諸子は此の廿世紀の舞臺に現るべき、主なる演技者なりと述べぬ。而して諸子の將來を察すれば、是を三種に分類する事を得べし。其の

第一は、廿世紀の活劇を演ずる所の原動力、即ち是より起る所の進歩の主動者となる人。

第二は、それ迄には行かざるも、此の廿世紀に於ける我が國の進歩に後れず追ひつく人。

第三は、時世に後れて遂に廿世紀の事業には餘り與からざる人。

今日の世界の大勢は決して現狀の儘にて止まるべきものに非ず、諸子も亦何とかして是に後れ

ざる樣不斷の努力をなすべしと、誰も皆考へらるゝならん。併しながら、自ら右之等の中、孰れに屬するかを知り、大いに社會の爲に貢獻するに足るべき力のありや否やは疑問なり。故に予は三種に分ちたれども、誰々は孰れの階級に屬し、某々は孰れに入るべしと分類する事能はず。諸子自ら考ふるも、確かに孰れなりと云ふ事は、能はざる所なるべし。予は諸子が殘らず時世の先導者としての地位に到るべきものと思ひ、又一方には殘らず、むづかしきものなりとも思ふなり。何となれば、是より諸子が爲さんと思ふ事は甚だ多し。今諸子が學科を修むるにも、制限せられたる科目を、定まりたる時間に修むるのみにても容易ならざるべし。其の、足りない、出來ない、むづかしい等云ふ事の源は、何處にあるかを考へざる可からず。或人は己の仕事が自分の力に餘る故、到底自身の時と力とより考ふるも、それを仕遂ぐる事はむづかしいと感ずべく、次ぎに或人は他人には出來るならんも、自分は天性短才なる故爲し能はずと感ずる者もあらん。又或人は學資に困り、ために家に歸りて爲すべき事多からん。又諸子の中には、自分が男子と生れしならば爲し得べきも、女子なるが爲に出來ずと考ふる人もあらん。例へば、ヒュース孃の云はれし如く、西洋は人種が違ふ故、どうも氣性にて仕方なし。彼はアングロサクソンなる故爲し能ふも、自身は出來ずと考へらる。又諸子が、有名なる人の傳を讀むも、スペンサーの綜合哲學、社會學、ダーウインの書などを讀めば、如何に此等の人の腦髓は偉大なるかを知るに足るべし。或はエヂ

ソンの電氣に關する機械を發明せる、又文學者にて云へば、シエークスピヤの如き高尚なる思想の湧出せるを見れば、到底吾々通常の人間は、如何に勉强するも、斯かる事は出來ざるべし。是等の人々は一種特別なる考を有せしかの如く思はるれど、其の實は決して然らず。彼等に苦しまずして、是れ程の考が出でしものならば、決して尊ぶに足らざるなり。例へば蜘蛛の如き、アミーバの如きは決して教育の力にもよらず、instinct にて爲すもの、奚ぞ之を尊重するの價値あらんや。併し如何なる大家に聞くも、其の經驗、苦心は毫も吾々と異る事なし。此の大切なる問題が、諸子の問題とならざれば、予が敢へて喋々するの必要なし。諸子の心中に時といふ問題が、一の大問題とならずば、如何に說明するも甲斐なきなり。而して是は諸子の爲に考ふるも、甚だむづかしき事なれど、諸子がこれをなさゞれば、其の實あがらず。何となれば大學は、家其のものにあらざればなり。

而して諸子の誤り易き二つの點あり。

第一は、其の事をよい加減に考ふる故、經驗なく、且無形の事なるが爲に實際に遠く、空想多くして、結局自ら欺かるゝ事なり。

第二は、これに反し無論むづかしき事故到底出來ざるべしと思ひて落膽することなり。併し予は思ふに、諸子が此處にて第一の事を見出さゞれば、其の成功覺束なしと信ず。今云ふ處は、諸

子が第二の過に陷らんことを慮りて、之を防がんが爲なり。既に十九世紀に現れし大學者の經驗を聞くに、皆吾々と同じ困難は身邊に横はりしなり。されどその凡てに戰ひて打ち勝ちたるに外ならず。然るに自身は爲さんと欲するも、不才なるを以て能はずとするが如きは、罪を天に歸するものと云ふべし。兎角人は、罪を人に歸し易きものなり。殊に學生の失敗せる時には、學校や、教授や又友人を怨みに思ふもの多し。豈愼しまざる可けんや。

古來大學者と稱せらるゝ人の言を聞くに、私の學校は私の居る所なり。家に歸れば卽ち家、田舍に行けば則ち田舍がやはり私の學校なれば、到る處として私の學校ならざるはなしと云へり。ジョン・バンヤンは種々の小說を作りしが、彼の學校は彼が十二年間在りし鐵窓の中なりき。全アメリカを動かしたるアンクル・トムス・キヤビンの著者ストウ夫人の學校は臺所にして、フランクリンは其の仕事場が學校なりき。彼等の師は凡て彼等の交際する人々なりき。彼等は規則正しく凡て設備完備せる學校に入學せざるも、敢へて師に乏しきことなかりき。天地萬有は悉く彼等の師にして、自ら彼等が發明の便りとならざるはなかりき。これを以て見れば、世界の偉人は實に卽ち自分で自分を教育せるものなり。自分の境遇が惡しき故、或は天性鈍きが爲、又は病身なるが故にと思ふは抑も誤りなり。志を立てゝ、終に夫れを遂ぐる事能はずして、老大、徒に悲傷せる人及び之に反して成功し、活動の中に年を重ねつゝある人の經驗を聞くに、又凡ての辛酸を

嘗め來りて事を廢せし人と、遂に然らざる者とに聞くも、今少し時機が多ければよかりしにと歎ずるものは一人も無し。彼の失敗せる者は皆曰く、我が爲に機會は幾度も來りしに、惜しい哉予は其の時機を逸したりと。卽ち諸子の將來にも、あの時斯くすれば宜しかりしにと云ふ事は、蓋し少からざるべし。如何なる境遇に在りとも、自ら志を立てゝ、成功する道を知れりと信ずる人はよきも、未だ其の確信なく、反對の勢力强き時は、之が爲に打ち負かされ、服從して止まる者あらば實に憂ふべきなり。今諸子の境遇は、一方には爲すべき事多く、且責任は重大なり。又一方には、夫れを皆仕逸げんと思ひ、責任を果たさんとすれば容易ならず。凡ての事がそれを妨げんとするなり。是等は心裡にある誘惑及び氣のつかざる處にある反對の力なり。而して成功を期するに必要なるものは

一は力にして

一は新しき方法なり

此の二つが結合する事を得ば、諸子は容易に成功する事を得べし。十九世紀の進步は著しきものなるが、そは力と新しき方法との結合せるに因るなり。是と同じく我々にとりても此の二つを結合する事を得ば、志す域にも直進して到着する事を得るなり。彼のエヂソンの大發明の如きも始め之を是非爲さゞる可からずと云ふ考を定め、然る後其の方法を研究したるものなり。

以上述ぶる所は「時」に就きてなり。其の前より云ふ所は、廿世紀に於て吾々は果して其の任務を盡し得るや否やと云ふ事なり。是につきて最も大切なる事は力と方法との結合にあり。力につきては已に說明せしが、次ぎには方法につきて述べんとす。

人或は云はん。方法は大切なるものにあらず。精神だにあらば、方法はさほど喧しく云ふには及ばずと、是尤もの事なり。若し方法のみによりて教育の結果を得んとならば不條理なり。方法にて事を爲し能ふものならんには、アメリカにて行はるゝ事を、日本に於ても直ちに爲し能ふべき筈なるも、然らざるは何ぞや。例へば、ナイヤガラの大瀑布あるが爲に之を利用して、全國中に電氣其の他の大事業を布き得るも、我が國にては斯かる奇態の事は眞似難きが如し。凡て力は器械ありてその中に用ふる事を得て後、動かしむべきものなり。動機、誘因等も善き方法によりて、始めて正當に用ふる事を得。十九世紀の進歩は大なるものなり。歐洲に於ける文明の發達は實に甚だしきものなり。そは十九世紀に至りて、人間が大原理を發見せしによるかと云ふに然らず。十九世紀の發達は、只發明にあり。即ち從來ありし力、及び古よりありし方法を新しく應用したるに過ぎざるなり。畢竟方法の改良に外ならざるなり。教育にても、其の以前より大なる教育家出でたりしも、十九世紀に至りて其の方法を改良せるなり。又、醫學も非常に進歩せり。ジフテリヤ、疱瘡の治療等の如き、皆醫學の學理を應用する方法の發達なり。電氣應用も新方法に

あてはめる事を得しに由るなり。故に原理、力、時、等の如き、凡ての物が、少しも增加せしにはあらず。而も非常の進歩をなせるは、全く只新しき方法を發見せしに因るなり。惟ふに廿世紀は空中の旅行をも爲す事を得べし。從來の輕氣球に乘る者は上には昇る事を得しも、旋回する事能はざりき。然るに頃日獨乙にては衆人の見る所にて實驗せしに、風に從ひて三哩を八分間にて行き、塔を廻りて歸りには風に逆ひて廿秒にて歸りたりと云ふ。諸子の學問を爲すも是と同じく天地に潛める力を發見して、新方法に應用する事を得ば、是迄の人の十年かゝりし事を僅か一年にて爲す事をも得べし。諸子が發見せざる可からざる急務は、其の方法なり。屢々述ぶるが如く大豪傑、大學者と雖も、特別の腦髓を有するには非ざるなり。只凡人と違ふ所は其の方法にあり。如何にすれば力を增し、又早く達するを得るかは、時を應用する方法による事最も大なりとす。

時を利用する方法

是は吾人一人の經驗にては明らかに解し得べからず。即ち成功せし大家に問ひて多くの說に徵する時は、自ら釋然たる所あらん。

What is time?　　Time is power.

Time is money,　　Time conquers all.

時とは何ぞ　　時は力なり

時は金なり　　時は凡てを征服す

獨逸の或大學者曰く、「時は奇蹟を行ふ神なり」と。其の他大聖人、大偉人、大學者に聞くに、皆時の大切なるを感ぜざる人なし。異口同音に唱ふる所は、私が此の大事業を成しゝ事を考ふるに、皆時が無かりしならば、決して爲し能はざりしなりと云はざる者なし。故に吾々今日責任を感ずる者、凡ては、此の時の必要なる事を感ずると共に、時を利用する事の困難及び、如何にすれば此の時を利用し得るかを、明らかに知りたしと思はざる者なからん。

第一多くの人の所謂「時が足らない」と云ふ事を以て量の不足とするは誤りなり。其の足らずとする所は、是を用ふる力の足らざるなり。今我々はお互に時を使用せり。又今日と云ふ日を吾々は使用せり。而して日に何卷の書物を讀みしと云ふも、左程の効あるに非ず。假令一頁にても良し、それに記されたる眞理が、眞に諸子の頭腦に入りしならば、大なるものなり。眞に合點のゆきたる人は、僅かに一節を讀みても非常に多くの考おこり、大いに決心する所ありて、自分の力が知らず〳〵増加して、制し得可からざる考が湧然として起るなり。然るに一方には、讀みても〳〵其の意を解せずして只讀過する人あり。何故かゝる差があるかと云ふに、是他なし全く本

氣となるとならざるとの差なり。眞に時を利用する事に就きては、日本語には適當の詞なし。之を英語にて云へば、教育上最も大切なる事は interest なり。先づ吾々が人格を高めると云ふ希望があるならば、眞理を愛する心、修養に力を盡す心、一意に到達せんとする熱望、又一事業を爲さんとする心が、常に燃えざるべからず。夫れには rejuvenation 必要なり

rejuvenation とは、再び少年に立ちかへる事にして、即ち若がへるといふ事なり。吾人は生涯年をとらざる青年とならざる可からず、常に此の氣象が復興せざれば、發達は期す可からざるなり。アメリカ人は、概して此の力盛んなり。又彼の獨逸國が、十九世紀の始め、イエナの戰ひに於て大いに敗北し、殆ど佛蘭西の屬國視せられし觀ありしも、能く今日の隆盛をなせり。獨乙は廿六の州と、四つの王國とより成り、その主なるものをプロシヤとす。

而してプロシヤが佛國の爲に蹂躙せられしより、上下心を一にして大いに教育を盛んにせり。今其の教育制度の大體を云へばユニバーシテイ、ギムナジウム、ハイスクール、カンマンスクールの四つに分れたり。ギムナジウムは文科大學の如きものにて主としてラテン、クラシック等を修めしむ。そは rejuvenation を養成せんが爲にして、此の國が長足の進歩をなせる所以は、實に老ひぼれざる國民となりしに因るなり。凡そ學者の頭腦を大別すれば三つとなるべし。第一、保守家、第二、急進家、第三、進歩主義即ち是なり。東洋は一般に保守的なるも、就中支那は最も

甚だしとす。それ故世人往々孔夫子を退歩主義、又保守家なりとする者あり。これは甚だしき誤りと云ふべし。夫子は堯、舜、禹等を崇拜し、我が師とせしより、一見復古主義の如く見ゆるを以て、門人中或は孔子の眞相を悟らずして自ら保守家となりし者少からず。彼等は孔子の糟粕を嘗めし者なり。夫子の意奚んぞ之に留まらんや。生涯學んで倦まず、行うて已まざる精神は、朝に道を聞き、夕に死すとも可なりとし、又故きを溫ねて新しきを知ると云へるが如き語に徵するも明らかなり。即ち汎く古今に亘りて判斷の材料を取り、古きを捨てずして新しきに向ふの意氣滿ち〳〵たるを知るべし。人誰か古を學はずして、今日事を談ずるを得んや。

保守家は云はん We must keep the old accept new. と。されど眞の保守は新しき眞理、新しき事柄には極力反對する者なり。有名なる天文學者ガリレオは、望遠鏡にて、遊星に四つの衞星ある事を發見せしかば、之を友人に示し「どうか君一度、彼處にある星を、此の望遠鏡で御らん下さい」と云ひしに友人は、そは決してあるべき筈なければ、見るに及ばずとて、肯ぜざりしと云ふ。之等は眞に保守家の極りと云ふべし。世に又、己自ら聖人になりしつもりにて、一切人の忠告を受けざる人あり。自重心は大切なるものなるも、斯くの如きに至りては、全く老朽せる者にて、人の糟なり。故にキリストは斯かる者を蝮なり、僞善なり、墓なり、と云へり。孔子は三人行かば必ず我が師ありと云ひぬ。こは常に學ばんとする快心あるによるなり。

急進といふ方は、新しきもののみを取る爲に却つてその本領を失ふなり。斯かる人には組織も品格もなきものなり。故に以上の二者は、取るに足らざる事を悟るべし。之に反して進歩論者は古き眞理は固く持ち、己の本領を動かさずして、しかも新しきものを喜んで容るゝ人なり。之は故きを溫ねて新しきを知る人故、始終進歩なり。而して進歩するに大切なる規則あり。一は、する、一は、なる、一は、まなぶ、と云ふ此の三つをよく守るべし。只その人物になりしのみにては、甲斐なし。何か世の爲にせねばならず。而して學びやめざるなり。孔子曰く、吾常に終日食せず、終夜眠らず、以て思ふも益なし、學ぶに如かず。と。又曰く、學問は思考によりて補ふ、思考は又學問によりて助けざる可からずと。

而して猶、此の上に學ぶ事を要す。是が偏すれば、到底發達は庶幾す可からざるなり。予が說く所は實踐を目的とするも、無論學理なり。故に學理も必要なれど、兎に角實行が先に立たざる可からず。之を以て平生聞きたる事は直ちに應用して人格を高め、智育の助けとせられん事を希望す。以上縷述したる事を簡單に云へば、時の分量に非ずして、時を用ふる力の大切なる事を說明したるなり。

大器晩成

適當の詞なきも、大器晩成とでも云はゞ宜しからん。若し諸子が成功を急ぎ、俗に云ふあせるといふ事になりては、却つて不可なり。やはり古來時をよく用ひたる人の說を聞くに、所謂せつかず來れるなり。併しながら生涯に必ず一の取り得る所有り。故に先づ全體を考へ、其の全體より割り出して時を使用せざる可からず。又此の反對を云ふ人あり。予は早くより父を失ひし故、叔父の許にありて始終誡められたる事あり。そは予が獵を好むより、大鳥打ちの小鳥もよううたぬと云はれし事なり。夫れも說明を誤らずば、大いに味はふべき事ならずや。

世に金を貯蓄する人を經濟家といふ。予の知人に、今六十歲ばかりなるが百萬圓以上の貯蓄をなせる人あり。常に子弟を誡めて曰く、「汝等一圓以上の金を使ふには、然程考を要せず。されど一圓以下の金子を用ふる時には、謹みて熟考すべし」と。實に然り。小額なりとて意を用ひざる時は、大貯蓄も爲し難し。少しの金をよく考へて使用する人は、大金をも善き事に使用し得るものなり。嘗てアメリカの或財產家の許に、寄附金の相談を爲さんとて、門口まで來りし人あり。然るに戶外に立ちて樣子を聞けば、今しも主人は大いに怒りて番頭を叱り居る樣なり。そは小僧

がマッチの一方を使ひて棄てたるを、番頭の誡めざりしによるなり。（彼の國のマッチは兩端を用ひらる）之を立ち聞きせし彼は、斯かる人物にては到底寄附金などはむづかしからんと思ひながら、兎も角面會を乞ひて懇談せしに、豫想よりも十倍程の寄附を得たりしとぞ。予は金子のみならず、時も斯くの如く利用すべきものと考ふるなり。諸子の日常にも、一分以下の時に注意すべし。十九世紀發達の原因は時を省く事にあるなり。

予嘗て、プリンストンより、ウースターに移りし時、五弗（我が十圓位）の書籍を買へり。其の本には、定價を記しありしが、予は餘り急ぎしかば、代價は後より送りたり。我が國の人は買物するにも、まけるとか、ねぎるとかいふ事に、多くの時間を費せども、西洋人は決して斯かる事をせず、そは全く時が金なればなり。時間嚴守といふ事は、非常に大切なり。每日一分づゝを儉約し、よく使へば生涯には非常に多くの事が出來るものなり。併し之を有益に使ふといふ事は永久とか、無限とかいふ事に解せざれば詮なき事なり。銘々にとれば、生涯といふものより考へざる可からず。之を譬へば、宇內といふ觀念なき人には、太陽といふ事解らず、此の太陽系統といふ事を解せずば、月の盈虧も說く事能はざるなり。つまり全體といふ事を解せざれば部分も解し能はざるものなり。

吾人の生涯に爲すこと、考ふる事、及び行爲等はやはり時間を充たさざる可からず。併し全體と

いふものは、全體につきて考へ、部分々々に充たしゆくものなるが、年月は恰も連鎖の如きものなり。故に時も有機體のごとく、全體の如くならざる可からず。又吾々の生涯も、神經系統の如くならざる可からず。神經は全身にわたれども、處々に濃き所あり。薄き所あり。吾人の爲す事も、所々に塊りを要す。畢竟吾人の生涯は、時といふ觀念を持つ時は、廿世紀といふ事、又自分の天職としては、生涯の事を考へざる可からず。然らざれば今日のきれぎれの時を以て、立派なる品性を作り上ぐる事能はず。奈何となれば、我々が時を失ふに、二つの大なる誘惑あり。

即ち

一、未來の爲に現今を犧牲に供する事

二、多くの人は心配の爲に時間を空費する事

是なり。前者は將來を考ふる爲に、今日を無益にするなり。是は甚だしき例を云へば、放蕩息子が金を使ふと同じく、或は碁に耽り、釣に溺れて怠惰に流るゝ如く、諸子の中にもむだなる事を喋舌り、又つまらぬ身の飾りに時を移す者あらん。されど苟も志ある者は、今日を無益に使用する事能はざるなり。

廿世紀は、今より百年間を云へば、吾人の前途を五十年とするも、徒費する時間は生涯の半分以上あり。

後者に至りては吾々は無論考へて見ねばならねど、杞憂にのみ時を費すべきものに非ず。心配をする爲に、今日爲すべき事が出來ぬ事多きのみならず、心配は又身體に害を來し吾々の活動に要するエネルギーを消費する事甚だし。是は如何なる人にも起るべき弱點なり。されど心に時の全體を解し、今日を使ふ人には缺點少し。故に直接の問題として諸子の考を要することは、

一、廿世紀に於ける諸子の本務

二、諸子の生涯に於て爲し遂ぐべき本務

を明らかに覺悟する事なり。廿世紀に於て諸子の直接に關係すべき事は、無論日本國民として勉むべき事を考へざる可からず。世界の文明は西と南へ段々進み行きつゝあるなり。十九世紀の始めには、新興國としてアメリカありき。次ぎは日本の番にて、今一つは南方センツラル・アメリカの方に渡れり。今や我が國も米國に劣らず發達せざる可からず。教育の上より見るも、米國のハーバード・ユニヴアシテイの最初の生徒は僅かに三百廿五人なりしが、今は實に五千人以上となれり。故に初めは極少數なりしも、今日は世界文明の基を爲せり。嘗て我々の考へし所は、已に我が國の輿論となり、數の上にても、實際の上よりも大いに發達せざる可からずと云ふ事なり。此の點に就いて日本の教育制度と、外國の教育制度とは異れるを以て、諸子には或は了解し難かるべし。併し我が國に於ても從來の如き制度にては、到底不可なりと云ふ事は、最早多くの有力なる人々

に悟らるゝ樣になりぬ。即ち二、三年前より教育制度研究會といふもの設けられ、未だ公にならざれども、已に新聞紙上にも記載せられ、衆議院にも提出する事となりたり。此の案によれば、日本に數多の大學を起し制度を改めんとする計畫にて、夫れは中學校より大學に入るべき組織にせんとする案なり。

而して、今後は大學を一私人が建つる事を得るやうにし、私立大學と雖も、官立大學と同じ特權を與へ、卒業生には、學位をも授くる事を得。その中に、女子大學の制度もあり、之は高等女學校より入學するものとし、大學卒業生には男子と同じく學位を與ふる事を許すべしとの建議なり。斯かる制度によりて學校の發達する事は、一大急務にして、殊に我が國の爲には目下の急務なり。米國にはもと廿四の大學ありて、夫れ等の學校は學生の月謝と、寄附金にて、年々の經費を維持し、或大學の如きは今日實に二億萬圓といふ基本財産を有せり。彼の名高きハーバード、エール、プリンストン等の大學は皆私立なるが、之等は決して役人製造所の如きものにあらず、又今日全體の中、百分の五十二の官立師範學校あれど、そは官費生にはあらざるなり。而して大學出身者と師範學校卒業生とは、孰れが勝れるかといふ事は、現に歐米にても喧しき問題なり。故に予は前述の如き教育制度の行はれて、教育の大發達を見ざる以上は、國民の天職を全うする事は望むべからずと信ずるなり。斯かる女子大學制度の行はるゝ曉には、日本の教育も一大進歩

を來すべし。即ち男子にとりては、早稲田專門學校、慶應義塾、女子にありては此の日本女子大學校出身者が、此の大問題を解決する標準となるべき者なり。故に一言を以て云へば、諸子各々は斯かる重大の責任を身に負はるゝものなれば、最も自重せられん事を要す。

諸子の心中に、若しも在學の三年といふ事より外なかりせば、眞に成功する事能はざる可し。畢竟廿世紀の國民として、我が國家及び、廣く人類の爲に盡すべき任務と、諸子の生涯に爲し遂ぐべき事とを、眞に了解せざる可からず。

今日云ふ處は、吾々の生涯かゝりて爲し遂ぐべき事業及び、研究すべき事は何ぞやといふ事なり。諸子が爲すべき事多き中に、必ず生涯研究せんと欲する科目あらん。それを三年と限りて、其の間に仕おふせんと思ふは誤りなり。生涯の心算を立てゝ爲さゞれば、此の三年は何の効をも爲すことなからん。此は凡ての人の疑はざる眞理なり。而して生涯の間に計畫をたてゝ成功せし人の經驗にあらざれば、取るに足らざるなり。或人嘗て多くの偉人の中、成功の代表者とも云ふべきは誰なるかを、米國の文豪エマスンに問ひしに、エマスンは第一にスウエーデンボルグを擧げたり。此の人は獨乙の大哲學者、宗教家、思想家にして八十五歳を以て死せり。スウエーデンボルグは自分の爲すべき事、研究すべき事が確定せるを以て已に與へられたる時を、悉くその目的の爲に使用せり。即ち食物とても成るべく簡單なるものを選び、決して美食せざりき。其の食

料の主なるものは、パンとミルクと植物のみなりき。されど健康は凡ての事の資本なる故、其の爲には必ず時を使ひたり。而して彼は生涯獨身にて終りぬ。世間多くの人は、つまらぬ交際に時を費せども、スウエーデンボルグはさる事をなさず、只知識を交換する爲には交際の甚だ必要なるを認めたれども、不要なる事には一切携はらざりき。故に或人はスウエーデンボルグを評して非常にせまき人なりと云ひ、彼の眞價知る人は誠に少かりき。偉人と雖も、其の時間を節する事斯くの如し。況んや普通平凡の者に於てをや。

凡そ何人と雖も眞に大なる事業、大なる研究を爲さんには、雜事は省き得る丈け省かざれば、到底時は足らざるなり。獨乙の大學者カントは、生涯獨身にて、凡ての事を省き得る丈け省略し、交際なども餘り爲さゞりしが、唯食事の時のみは有益なる友を招きて食しつゝ知識を交換せり。米國のメレー・ライオンは獨身生活をなして生涯教育の爲に全力を注ぎ、ビーチヤー・ストウは嫁して後も猶文筆をとり、孰れも女子教育の爲に大いに貢献したる人なり。佛國のボルテール、米國のフランクリン、又英國の社會を動かしゝウエスレー等は、皆思想界に於て、社會に大變動を來しゝ人々なり。斯くの如く生涯精力を集注したる人の事を考ふれば大いに開發する所あり。予は女子を人として婦人として、又國民として、教育せんと欲する者なり。此は既に著書にも記し演說にもし、公然天下に告げたる事なり。諸子幸に誤解する事勿れ。

時をよく使ふ秘訣は

健全なる知識を得、健全なる行爲をなすといふ事なり。而して此の健全といふ中には、完全なる知識、本末ある知識、理論ある知識、有機的の組織等の意をも含めり。さて此の問題を解するに先ちて、決すべき問題あり。そは銘々の心の狀態に關係せり。即ち吾々が或人に接するや、その人物の如何は、顏色、目つき、態度にても略ぼ推察せらるゝものにして、之を大別すれば、生理上、心理上、骨相等によりて知る事を得べし。さて人の氣質にも種々あれど、先づ今日普通の分け方によれば、四種の中孰れかに屬すべし。

多血質の人は物に激し易く、活潑にして物事をよくすれども、永續し難し。

膽汁質の人は剛膽にして容易に物に動ぜず、亦よく事に耐ふるなり。

粘液質の人は平坦なる性質を有す。

神經質の人は執念深し。

物の眞僞を判斷し、又輕重優劣を辨別する事は吾人の日常に最も大切なる事なり。今日の天候を見て明日の天氣を推察し、時勢を見て社會を解し、物を聞きて眞僞のわかる人と少しもわからざる人とあり。そは皆心による事なれば、吾人の心に準備なくては叶ふ可からず。又社會の風に

も幾分か感染するものなり。一言を以て云へば、今日の人心は眞面目にあらず、ごまかしなり。凡ての事が本氣に非ず。何事も先づ本氣になり自分の事として考へずば了解せられぬものなり。一の眞理を研究するにも、書籍を讀むにも、先づ我が心正しきか否かを省みざる可からず。先きには人の性質を學理上よりわかちしが、此を俗語にて云へばよくわかる事なり。

一、笑ひ上戸(浮きたつ性質)

二、怒り上戸(よき事にも惡しき事にも怒る人)

三、泣き上戸(心の中に泣くより外の事なき人)

四、粘液質に屬する者

宗教上より云へば、クリストの祈禱、禪宗の座禪あり。孰れも心をおちつけて、正しく考ふる態度となるなり。然るに今日の實社會は、ごまかしを以て世を渡るもの多し。即ち人心は醉ひ、狂ひ、踊るも舞ふも、凡て輕佻浮薄極まれる故、たまたま眞面目なる事を爲せば、世間より嘲笑せらるゝ有樣なり。嘗て英國が、斯くの如き狀態に陷りし時、ピューリタン起りしも之を容るゝ人なく、遂に國外に放逐せり。又クリストの出でし時も、眞に之が眞相を解し是認せし者は、僅かに十餘人のみなりき。ソクラテスも又然り。今我が國人心は、幾らか、かゝる有樣に傾けり。

故に吾々は、時には寢食をもうち忘れて考へざる可からず。此の時に當りて、眞面目なる者出でずして可ならんや。

さて健全なる soundness と云ふ事に就きて云はんか、之には二つの要素あり。

第一の要素——完全と云ふ要素あり、物を學ぶにも皮相に流れずして、深き所に達するを云ふなり。諸子は讀みしもの聞きしものにつきて自ら考察せよ。例へば衞生學を學ぶ時は如何にすれば我が健康を保ち得べきかと云ふ事に直ぐ應用する力ありて始めて soundness とはなるなり。

第二の要素——有機的に組織だたるものならざる可からず。秩序あり、本末ありて終始一貫せる行爲ならざる可からず。斯く云へば諸子或は思はん。眞に完全なる事を得んとするには、勢ひ問題を少くせざる可からずと。併し是に伴ふ弊は、狹きに過ぐる事なり。さて種々の問題に當りて考ふべきは重要なる點と、補助物との區別を立つる事なり。例へば諸子の中、己は生涯教育學を修め、充分之を研究せんと思ふものあらん。されどその一つの目的を達する爲には、唯教育學を研究するのみにては不可なり。故にその補助として進化論をも調べざる可からず。又心理學、生理學、神經系統、人類學、生物學、社會學等をも考究せざれば、斯かる大問題は解し能はざるなり。而して此等の全體を究めん事は中々容易の業にはあらず。又是等が個々の物となりて腦に入る時は、何の効をも爲さゞるなり。必ず連絡して目的物の助けとならざる可からず。

何故に諸子の直ちに着手すべき事の遲延するか

一、多忙なる故に直ちに爲し難しと云ふならん　予は之に答ふるに、忙しき故、延引してはならぬと云ふなり。非常に忙しき人の經驗を聞くに、忙しき人程速く物を運ぶものなり。ナポレオンは非常に多忙なる生涯を送りし人なるが、凡ての事を電光の如く處理せる秘訣は何ぞや。「吾人の用務は輻輳し來つて、十も二十もある樣なれど、その中の最も大切なる事は唯一つなり。故に此の一事を爲す爲に、凡ての事は犧牲に供すべしと云ふ事が、早く見分けらるゝなり。而してこれを悟る時は、寸時も猶豫する事なく、直ちに着手決行すべし」と。スコットは或時、百拾壹萬圓程の借財を身に負ひし故、早く之を返濟せんものと決心し、晝夜を分たず非常の勉强をなせり。而して其の忙しき境遇にあり乍ら、朝飯前に返書を認めし事毎日廿通より卅通に及びしと云ふ。此の人は決して今日爲すべき事を明日に延ばさゞりし人なり。スコット常に曰く「朝飯の前に必ずその日の仕事の頭を碎く」と。如何にむづかしき用なりとも、朝起きたる時その强敵を挫き置かば、終日勝利に歸するものなり。ダニエル・ウエブスタも同じ經驗を爲せし一人なり。古來澤山の仕事を爲しゝ人は、決して物を躊躇せざりし事を知らざる可からず。

二、困難、むづかしいと云ふ事　此の誤りは、時を眞に勘定する事能はざるより起るなり。吾人は十年かゝりて爲すべき事を、一年にて爲さんと企つる事あり。これは數理的に考ふれば直ぐ解る事なり。

三、輿論の反對、或は一個人の反對を恐るゝ事　吾人が輿論又は友人に反對するは、必ずしも善き事にはあらざるも、眞理の爲には多少之を忍ばざる可からず。先見の明ありて率先者となる者は、須らく主義を貫徹すべし。之が善き事なり。正しき事なり。爲すべき事なり、と信ずる以上は、蹶然起つて行はざる可からず。假令一時成功し難き樣なりとも、心の光は益々輝きて、力を增し加ふべし。

予は十九才の時、京都に在りて同志社の事、組合教會等の事に就きても斷然獨立主義を稱へしが、新島先生を始め、海老名君、松村君、横井君等の同志も、總て之に反對せられたり。然れども、今日に至りては組合教會は獨立主義を取りて、最も勢力有るものと成れり。故に之が善なり斯くせざる可からずと信ずる事の爲には、全體が反對する事ありとも、構はず着々それを實行すべし。而してその結果善ければ終には全體之に從ひ、萬一惡しき時は改むれば宜しきなり。

四、相談　此の相談といふ事はよき事の樣なれども、心弱き人ならば必ず此を爲したる爲に熱心を冷やさるゝなり。善き事に相談の力あるが如く、惡しき方にも力あり。惡しき友は惡しき方

に引込み、善き事あらば打消すなり。故に進退を決するは我にあり。必ず善と信ずれば何ぞ相談を俟つの必要あらんや。

五、失敗　如何なる人も失敗せざる事無し。失敗すれば即ち改むべきなり。所謂九轉十起の諺に由り、失敗に勝ち、決して之に心を奪はれざらん事を勉むべし。失敗は人の勇氣を挫き、躊躇せしむるものなり。故に諸子が、爲すべき事と知りたる時は、今日より着手せん事を希望す。

其の時の機會を其の時に得よ

今日我が國學生の最も大なる缺點は、眞相を取り能はざる事なり。之には秘訣あり。各人の境遇、機會等は左程の差異なし。唯人をして非常に違はしむるは、其の物を取る事の如何にあり。故にこれを眞に了解する事に勉むべし。

諸子の心には確かに眞心あり、熱心ありて、物の眞相を看破すべき判然たる知識及び、心身の力を得んと欲し、又時々刻々德を積みたし、或は此より起るところの人生の幸福安心を得たし、と云ふ希望はあるならん。併し總ての人々は曰く「心の活動する程度に應じて之を滿足せしむる丈けの力を得難し」と。又世人多くは富を渇望せり。例へば金、銀、鑛などありと聞けば、如何

なる冒險事業をも進んで爲すものなり。斯かる經驗より見れば、世界は實に財源に乏しきものゝ如し。併し實際は、宇宙に充滿せるものにして、十四億の人間が如何に取るとも盡きざる上に、自然は實に公平なるものなり。斯くの如く或物は充滿せるにも拘らず、人間は何故に貧しきか。曰く財源及びそれを取るべき機會は公平なるも、唯人間がそれを取る術を知らざるに因るのみ。總て吾人の心中に渇望せるものを、如何にして取るべきかを知る事必要なり。之は落ちて居る物を拾ふ如き事に非ず。宇宙は常に活動し、吾人の日夜求むるものは、四時諸子の頭上を通過する事飛鳥の如し。故に夫れを取る事の如何に由りて相違を生ずるなり。或人の語に「我々に來る機會は後頭が禿げて居る」現在は甚だ短し。銃獵等も一瞬のわざなり。其の瞬間に觀察して捉ふる事を得ずば機會は永久に去るものなり。之は予の獨斷にあらず。總て科學なり、文學なり、其の他實業、工業等何事によらず成功せし人の經驗を聞くに皆然り。即ち重きを現在に置かざるは無し。

"Dont brood over the past, or dream of the future, but seize the instant. Opportunity is just like the flying bird."

之はくよ〳〵と考へて居るなと云ふ事なり。現在爲す可き事に熱心の足らざるは、必ず過去の事を考へ或は將來の事を想像するために現在の事を怠るなり。何故に過去の事を悔ゆるかと云ふ

に其の現在に於て怠りしが爲なり。然らば過去の事を考へ、將來の計畫をなすは惡しきかと云ふに、決して然らず。故に之を誤解す可からず、過去の經驗に由りて將來を愼しみ、又將來の爲に現在はあるなり。此を以て、過去及び將來を考ふる事は甚だ必要なるも、今予の說くところは過去及び將來の爲に、此の大切なる現在を犧牲に供する事勿れと云ふ事なり。予の常に云ふところは、全體と部分とを誤る可からず。其の時々に判斷を誤らざる知識を得よといふなり。

扨て其の力は如何にして得らるゝかと云ふに、諸子の心中に靈感が臨みし瞬間に於て之を捉へて熟考するにあり。

ジエームス・ワットの蒸汽機關發明は世界に貢献するところ甚だ大なり。湯の沸騰したる時、鐵瓶の蓋を持ち上ぐる事は、何人も度々見る事なるが、ワットは之によりて大發明の暗示を得たり。其は日頃何彼に就きて、始終考へ居たる時に當り、一寸心中に浮びし考を逃がさゞりしに由るなり。

其の他フランクリン、シエクスピア等も皆然り。瀧澤馬琴の里見八犬傳とても種無きにあらず之に由りて考ふれば如何なる大思想、大文學、大發見と雖も不思議なるものには非ずして、各人の頭上を飛來するものを、其の瞬間に捉ふるにあり。之は心の極細微なる作用にして、總ての事に應用せらる。

開發的の教育とは、其の瞬間に於て取る可き物を取らしむるに外ならず。既に經驗ある人は予の今說くところの事に就きて合點する事あるべし。之無き人は直ちに之につきて熟考、決心せざる可からず。即ち吾人の最も大切なる事は、總ての事を即時瞬間に決する事なり。此の習慣つけば、萬事躊躇する事なく心中常に愉快なり。

瞬間を分ちて三つとす
- 考　考起れば直ちに物を
- 決心　決斷し之を
- 實行　實行する事大切なり

然れども玆に注意すべき事は、人から何か聞けば、前後を顧みず忽ちに夫れを爲して而して忽ちに失敗する事なり。吾人の欲するところは、諸子に決斷力を養はしめんとするにあり。而してその決定を爲すには考を要す。果斷に富みたるナポレオンさへ

「先づ心中に考へ、之は爲すべきものと判然了解せざれば何事も爲さゞるなり」と云へり。

When you did not quite know what ought to be done, it was best to do nothing at all.

畫家と雖も實際手を動かして描き始むれば左程むづかしきものに非ず。又時を要するものに非ざるも之を考案する事最も困難なり。然るに斯く〳〵すべき物と決心すれば、疾風迅雷の如く爲すべきなり。之を以て或時は考へ、或時は決斷し、又或時は實行すべく時の區別あり。物を爲し

つゝある間に一寸起る考を逸せざる事大切にして、工夫、發見、觀察等は皆茲に存す。

予は先きに物事を延引するは、自他の時を盜む賊なり。然るにとかく人間は此の疾ありと云へり。之を治する方法如何。物事を速かに決するの外無し。予は先日より、諸子が出來難しと感ずる事を諄々說きて倦まざりき。例へば、品性陶冶の如き事も、諸子の心中にある癖を根柢より作り直す事及び、友人の性質を直す事等は容易ならざる事なり。而も今之を爲し能はずば、將來敎育家となりても、人を感化する事能はずと知らざる可からず。單に自己のみならず校風を作り、社會の風を匡正し延いて國家の風潮を挽回する事甚だ困難なり。試みに之を問はゞ、三種の答を得べし。

一、決心せり――何事も成功する人

二、決心の出來ぬ人――何事にも反對し破壞する人

三、出來ぬ人――何事を試みても失敗し、將來望みなき人

第一に屬する人は決斷ある人にして、物の成功せぬといふ事なし。假令表面に見えたるところは鈍くとも弱さうなりとも、腹に決心有る人は必ず最後の勝利を得て志を達する人なり。予は學年の終りに當り、此の問題を興ふべし。諸子須らく自省せよ、昔スコットは百餘萬弗の借金を償却せんと決心せしより、其の志全身に充ち滿ちて如何なる難事をも打碎かざるは無かりき。半信

半疑は心の病源なり。決心する時は猶豫なく實行すべきもの、之は此の期に於ての好問題なるべし。

予は諸子に對して二つの希望を有せり

其の一は、理想的敎育家に成らん事。其の二は、諸子が學校を出でゝ向ふ方面は、社會に於て最も要求し居るところのものならん事を望むなり。

理想的敎育家と云ふ事はつまりモデルに成ると云ふ事に同じ。之は予の考ふるところにては、敎育の改革の爲し得るところならんと察せらる。モデルと成れば其の人は死すともその精神、理想は永久に亡びざるものなり。歷史上より考ふるも古代文明の源をなせるギリシヤ、アテネの文明は、實にアテネ人が長い間理想を抱きて夫れを實現せし結果によるものなり。彼のパンテオン神殿の材料は純潔なる蠟石にて刻まれたるものにして、調刻、裝飾等何れの點より見るも殆ど完全なるものにして、卽ち建築のモデルと成れるものなり。斯くの如き理想なれば、宮殿は崩れてもその美は決して滅せざるなり。

之は美術史の示すところなるが、敎育に於ても同樣なり。古のルソー、コメニュース、ペスタ

ロッヂ等は皆自らモデルとなり、理想を作りしも、其の死後永久に此の主義が實行せられんとは彼等自身も思はざりしならん。然るに之が今日の開發的教育の源泉と成りしなり。即ち理想的教育主義を立てゝ、理想的學校を建設するは容易ならざる事なるも、一度此の志に覺醒すれば、假令その人の生存中に行はれずとも、必ず後世に行はるべきなり。而して現社會は交通自在にしてペスタロッヂ等の時とは比較すべからざるを以て、之が普及は一層迅速なるべしと思はる。故に諸子は家庭にても、學校にてもよし、理想的教育家とならんには、其の縣、其の市に於て主義を布教する事を得べし。今一つは現社會に於て、是非とも諸子の救はざる可からざるものあり。其處に進んで改革せられん事を熱望す。諸子は必ずそれに當り得る資格あり。之は點數に由りて爲し能ふ可きものに非ず、此の一年間に十分その力を養ひ、此の資格を作られん事を希望す。

第一、意志の鞏固なる事

パンテオン神殿は、純潔なる蠟石なるを以て火、水、風の恐れなき爲にアテネ人は此の材料を取りしも、結局物質なるを以て倒れたり。彫刻を蠟石や、鋼鐵に施せば、消えざるが如く諸子の品性も亦斯くの如く堅固ならざる可からず。其の材料は即ち鞏固なる意志に外ならざるなり。故に先づ諸子の材料たる意志を、鞏固に育てざる可からず。其は永遠不易の性質と成らざる可からざる事なり。地位境遇に因りて變ずる人ならば、決して人を感化する事能はず。故に諸子の人物が日々輝ける太陽の如くならざる可からず。然るに女子の性たるや、或時は圓滿なるも時としては平靜を缺き、又或時は光輝を放ち、或時は暗黑となる。其の故は他なし。抑も月は自らの光を有するに非ずして、他より受くる光にて輝くものなればなり。イソップ物語に月が其の母に對ひて「私に適當したる衣服を與へられたし」と乞ひしに、母の曰く、「或時は滿月となり或時は新月となり、盈虧常なき汝なれば、如何なる服を作らば最も汝に適すべきか計り難し」と答へしと云ふ諺あり。故に諸子各々に就きて、夫れ〴〵各個人の天職は如何なるものなるかを示すこと能はざるも、其の境遇によりて今日の理想を跡形なく變更せん事は、予の從來の經驗に照らして、女學生の爲に最も杞憂するところなり。故に在學中如何なる困難にも堪へ、種々の問題にもうち勝ちて、充分各自の主義を貫徹すべき勇氣を養はざる可からず。

第二、事に當りて狼狽せぬ事

コーネル大學には男子部と女子部と有り。或時女子數名にてボートに乘り、湖水に出でしに一人の女子狼狽するや一同續きて狼狽せしより、忽ち其の短艇は沈沒せり。靜かに判斷すれば斯かる事は無くてすむなり。

マサチユウセットのアシユランドと云ふ處に或婦人ありき。非常に小膽にして臆病なる性質なりしも常に狼狽せぬ習慣を養へり。一夜夫の留守中目を覺ましゝに、階下にて物音聞えしかば、靜かに床中にて考を定め、そと戸を開きしに果して盜賊の來れるなり。乃ち戸を閉ぢて夫の愛銃に彈丸を籠め、一旦出でんとせしに又眼鏡を忘れし事を思ひ出し、之をかけて徐ろに戸を開きて先づ聲をかけ、頓て息の音をとめて呉れんずと、一發の下に賊を討ち、身を全うせりと云ふ。此の修養だにあらば、如何なる暴風怒濤にあふとも泰然自若たる事を得べし。之婦人にはむづかしき事なり。反對を恐れ、失策を恐れ、ビクビクする者は生涯成功する事無し。而して沈着の性を養ふ者は事に臨みて一箇の少婦と雖も、有髯男子に遜色無きなり。

第三、非常なる忍耐力を有する事

予、米國に在るや、努めて白痴院を觀察せり。其の歴史を聞くに、感ず可きもの多し。初めて之を建てし先生の話を聞くに、發言はおろか歩行すら爲し能はざりし小兒を辛うじて教育し、出來る丈け其の能力を伸展せしめ、彼等の不幸を最小に制せられたりと云ふ。教育家の最も困難なる事は、性質の曲りし者を矯正するにあり。之も今日は浮浪の子、或は犯罪人を集め教育する人多く、又効果も見ゆる所なるが、實際諸子が社會に立ちて人を感化するには、必ず非常なる忍耐を

要す。直ちに癇癪の起るやうな事にては、到底人を教育する事能はず。之は實地の研究なり。

第四、知識

眞の教育家は注入せるものに非ずして、自ら湧き出づる知識を有せざる可からず。又諸子が子女を教育して、彼等に與ふべきものは斯くの如きものならざる可からず。畢竟知識の庫の鍵を諸子の手に持たざる可からず。之を以て其の庫を開き、人々に知識を與ふる人たらざる可からず。

然るに今日の教育は師範學校にて行へるが、其の方法は注入的のものなり。故に諸子が此の校を出でゝ教育に從事する時、今日の教育制度の如何を知らざれば直ちに失敗す可し。又教科書の調査等を心配せらるゝが如く察せらるゝも、之は甚だしき誤解なり。今日日本の教育には根本的の誤りあり。之は大問題なるを以て、諸子の心には一寸了解し難かる可きも、其の大要を云へば今日の教育は書物を讀む事の如く思惟せる者多けれども教科書は編輯者の集めし材料引例證明に過ぎず。然るに日本の現在の人民は四千萬有り。之に誰にも共通せる献立をなし、何處の家庭にも用ひらる可き食物を與へ得べきか。之は到底望むべからざる事なり。然るを教科書に限りて、何處の學校、如何なる程度の生徒にも全然適合するを得んや。即ち教科書は吾人の參考に過ぎざるなり。又教育家自身が、生徒に說明教授するに丁度適當せるものなるや、否や、明瞭ならざる

なり。今一つは教育家が學生に教ふる所は、單に教科書に限られたるものに非ず。天地間の森羅萬象凡てこれ教材にて教ふべからざるものなり。故に生徒に示す材料、說明等は教科書にある物よりも一層勝りて適當なる物を自ら作る力なかる可からず。之を以て吾人の生徒に教ふる所の大部分は直接自ら得たるものなる事を要す。

凡そ學問は讀書に限らず自ら科學を作るにあり。讀書には思惟力が進化して知識となり、科學となり、品性となり、力とならざる可からず。之は大學のみの事と思はんも、決して然らず。程度こそ異なれ、教育の本源は幼稚園より此の主義を取らざる可らず。唯鸚鵡的に物を記憶せしむるに非ず。自ら爲す習慣實力を養成せしむるにあり。故に諸子が小兒を教育するに當りては大いに用意すべきなり。教育書を精選するは勿論、小兒の心中に活動する心理を解して、教育を施さゞる可からず。自ら教科書を編成せざる可からず。之には小兒の心理を研究して、最も適當なる材料を以て指導する事を要す。人の編輯せる教科書によりて唯記憶せしむるが如きは抑も教育の本旨を誤れるものなるも、今日は人の足らざるため滔々として此の弊に流れつゝあるなり。教育の本は教育者に存す。古人も云へる事あり。「眞の教育者は自らを教育する者なり」と。此は自ら道德を修養し、知識を開發すると云ふ事にて、此の知識、習慣、品性を以て後進を陶冶する者を云ふなり。教育者は仙人の態度を取る可からず。常識を備へ、活動社會を知り、自然と人生との

關係を辨へ、時に應じて最上の處置を爲し得る力無かる可からず。故に今諸子の先づ第一に養ふ可きものは智力にして、之は注入的の知識以上のものなり。

予は重ねて諸子に云はん。先づ眼識を具へよと。

第五、教授法

諸子の卒業も間近になつて教授法又は、其の他の事につき、直接社會に出でゝ學得の知識を應用すべき場合の事を種々諸子が懸念するは尤もなる事なり。併し之は諸子の學得せる知識により自ら悟る所無かる可からず。予は卽ち今日行はるゝ所の方法其の教授法を諸子に依りて將來改善せん事を希望する者なり。故に予は今日已むを得ず玆に今日一般に行はるゝところの通弊を論じ置くべき必要あり。之を一言に云へば、今日の教育家は死物なる、機械的教授法に束縛せられ、自由の活動を缺きたり。故に生ける人間を取扱ふべき眞の方法を解せずと云ふ可し。先づ第一に遺傳に束縛せらる。詳言すれば、今日の方法が注入的、獨斷的、具體的になり、常に保守的に傾き、眞似をする、丸呑込みにする、又は讀書的等の弊あり。之等は總て今日の教育法を云ひ表せるものと知る可し。此の教育法の傾向が、我が國にては殆ど先天的に存するを以て、人間が生るゝや否や之に傾きたる養育を受け、母の心も亦之に傾ける者多し。此は甚だ恐る可き事にして、

人間の本能的活動――生れつき程變へ難きものは無し。其の點は諸子に縷述して說く必要はなかる可し。然らば之を改良薫陶すべき筈なるに惜しい哉、今日の母親は、其の活知識を缺けり。此の恐る可き傾向は如何にして根治すべきか。

ミラボー曰く「其の人の教育は母の教育より始めざる可からず。即ちその人の生れざる廿五年前より着手せざる可からず。」と。之遺傳を指せるものなり。遺傳は兩親より引くものなるも、智力は父より、生理的のものは母より、と云ふ說を稱ふる者も有り。然れども主として品性智力等は母より受くる事多し。即ち女子教育によりて母の頭腦を直さゞる可からず。此の點より考ふるも、女子教育の方法を改め、又男子と同じく其の教育を高めざる可からず。勿論之は知識を詰め込むの謂には非ざるなり。

第二の原因は今日社會の風をなせる祖先傳來の學風なり。此の學風が教育家、學生の頭腦を束縛して、終に眞の教育を爲し難き有樣に陷らしめつゝあるなり。ヒューズ孃の英文學部生徒に與へられし手紙を見るに「日本の教育は支那の祖先傳來の注入的學風（日、清、佛の教育は試驗制度なり。之に及第する爲に咀嚼し難きものを注入するに至る）暗記的作用にして此の學風が今に至る迄、日本の學校の上にたゞよへり。而して世界に新しく行はれ居る教育法及び學說は、稀に日本に到着せるのみなり」と。此の意味は實際に行はれざるを云へるなり。

予は一人の外國婦人の說に依りて之を取るに非ざるも、予自らの經驗に由りても、此の觀察が不當ならざるを信ずるものなり。此の支那的教育は、漢學者流より行はれたるなり。古の教育は素讀にて字を覺え、講義說明を聞き、文章を綴るに止まれり。故に此の教育を受けて成長せし人は、唯氣象あるのみにて實に機械的頭腦となれり。明治の初年萩藩の漢學者某は、山口縣の或小學校長に任ぜられ、拜命して歸宅の途中土手にて自殺したりき。之も亦一例と見る事を得べし。故に思考觀察等の力を養ひ、愈々進んで眞理を發見し、發明する人物を養ふ事能はず。此の因習は今日猶我が國の教育界を支配せるなり。

第六、師範學校

今日我が國の師範學校には品性、精神、實力等乏しく、又學識も淺薄なる者多く、その教授方法たるや死物にして機械的なり、故に予は之を稱して死せる教育法と云ふ。斯く云へば言頗る過大の如くなれど、その眞僞は結果に徵して見る可きなり。古諺にも「母親を知らんと欲せば先づ小兒を見よ」と云ふ事あり。即ち小學生によつて教育法の如何を知るべきなり。數多の教育家の說を聞くに、小學兒童達の特徵は、盜み、虛言、落書、又學校の道具を傷むる等は平氣なりといふ。而して教育が與へざる可らかざる處の品性に至りては甚だ嘆はしき有樣なりと云ふ。

方今多くの教員の精神品性は如何。先づ俸給の爲に運動し、中傷離間を事とし、賄賂公行せらると云ふ。何故に斯かる弊害を生ずるか。予思ふに、官費なるが故に、師範學校は入學希望者頗る多く、村長、視學官、郡長等に運動し、其の結果によりて彼の校に入學する事を得るといふ。而して官費にて養はれ、その爲に非常なる束縛を受くる事は予も經驗あり。快きものに非ず。予は是によりて非常なる反動力を起し、獨立的精神を發揮したり。斯かる教育を受け、社會に出で之を傳播するを以て、社會及び教育界はその流れを汲まざるを得ず。然らば之を如何にすべきか。

師範學校は教育の源泉なり。教授法の講究は最も大切なる事なれば先づその內部より改革せざる可からず。予は國家の爲に堅く信ずるところあるも、今日茲に公言すべき限りに非ず。然れども諸子はそれよりも一層上の教育を施すべきものと自信せしめんが爲に、注意を促しおくなり。

次ぎに今の教育者は、概して知識淺薄なる事、幼稚園の保育と雖も輕視す可からず。兒童を眞に教育するには、深き心理學上の知識を要するものなり。然るに彼等は研究的——向上的精神無く、唯文部省より規定せられたる事のみを墨守して之に留まり、自ら進みて眞理を發見せんといふ考なし。總ては何事によらず、精神ありて初めて方法の必要を生ずるものなれば、單に方法のみを知るも効なきなり。

成瀨先生講演集（第一—第十）

總目次

第一（明治三十年—同三十六年）

女子高等教育の必要を論じ併せて其の反對說に答ふ
女子教育振起策
日本女子大學校設立の必要
女子教育問題に就いて
　開校第一、二年の實踐倫理講話
倫理學とは如何なるものか
吾人の理想
理想、目的、希望
開校二ヶ月を迎へて
教授法及び試驗の方法
原動力とは如何なるものか及び之を得る方法は如何にすべきか
選擇と改心
吾人今日の責任
注意力の集注
品格養成の時機
修德の方法
判斷に就きて
杖を捨てよ、自ら歩め
天職、本務
時に就きて
大器晚成
何故に諸子の着手すべき事の遲延するか
其の時の機會を其の時に得よ
予は諸子に對して二つの希望を有せり

第二（明治三十六年—同三十七年）

時弊を論じて女生諸子に告ぐ
卒業生（附屬高女）に告ぐ
進歩主義女子教育の一端
日本女子大學校の二百十日
分厘の不足
第一回卒業生に告ぐ

研究科生の爲に
訣別の辭
研究科につきて
戰時に於ける婦人の責務
研究を以て本務とせよ
經濟的品性の必要
暑中休暇に先だち別れを告ぐ
我が國の教育に於ける一大缺點
米國の教育英國を醒まさんとす
誰れか賢婦に會ひしか
女子大學生の眞價
喜ぶべき多忙
第二維新を論じて我が國教育の宿弊に及ぶ
個人性と社會性
日本女子大學校設立披露式に於いて

第三（明治三十八年）

この幼童
我等が捧ぐべき月桂冠
談片
我が校の教育方針に就いて
第二回卒業生に別れを告げ併せて本校の略歴現狀の報告を述ぶ
研究的體育の必要
運動會雜言
戰捷祝賀式上に於て……
家庭週報一周年を迎へて
歸鄉のいへづと
人類生活の三制度
自然と教育
研究に就いて
家庭の意義
家庭の成立に就いて
櫻楓館開館式の辭
平和の勇士を作れ
今年の運動會
時勢を見て各自その任務をつくせ
自ら直接社會に立つて働かんより斯かる人物を養成すべき根本につくせ
宇宙を支配せる力を認め無限の進歩をなせ
社會教育と其の適例
日本女子大學教育の方針に就いて

第四（明治三十九年）

芽出度明治三十九年
ペスタロッヂ先生を懷ふ
完全なる食物
幼稚寮設立に就いて
精神的生命
櫻楓會の現實
第三回卒業式告辭
豐明幼稚園、小學校開校式並びに本校
第五回記念式に於て
理想の實現に就いて
文華の根元「祝地久節」
女子高等教育に對する意見（其の一）
文藝に對する本校の主義
この休み
山間の夏期寮
頃日見る婦人の特性
最近の福音
天與の幸福に還れ
愛國心と博愛心
本文藝會の結論
印象と發表「其の一、人格の經程」

第五（明治四十年一月—十一月）

從順の意義
新年の希望
印象と發表「其の二、假說に就いて、其の三、印象と發表の價値、其の四、吾人の態度、其の五、自主の人、其の六婦人と發表、其の七、發表に必要なる原理、其の八天才」
日本女子大學校第二期擴張發表式に於て
祝紀元節
趣味教育の價値
第四回卒業式告辭
今年度の方針に就いて
國力の荒廢を如何にかすべき
女子高等教育に對する意見「其の二」
夏季學校
婦人と農藝
發展の原動力を何處に求むべき乎
收獲の秋

祝天長節
世界漫遊の結論
善學善遊

第六

（明治四十年十一月—同四十一年）

主行主義に就いて
時代の精神を讀め
我が國の豫言
眞相如何
第五回卒業式告辭
第七回創立記念式式辭
各部の使命「教育部、文學部、家政科の使命」
大學擴張
女子大學講義紹介の辭
捧げられたる生涯
生命の歸趨
天長の佳節に際して戊申の詔勅の御趣旨を仰ぐ
櫻楓館記念日に於ける感想

如何にして確信の基礎を築くべきか

第七（明治四十二年—同四十三年）

今後五十年の大勢如何
效果多き思考法
婦人の境遇を斯くして開拓すべし
大學擴張と女子大學講義
我が國家第二次の發展を何によつて遂げんとするか
第八回創立記念日式辭
奮鬪の興味
婦人今後の發達は此の原理を實行するにあり
「家庭週報」と「家庭」との合併の理由
大學擴張實現に就いての相談
我といふものゝ研究
故伊藤公爵を悼み其の生涯を懐ふ
婦人の進歩に最も影響する二大原因
新年に於てよき氣分を作れ
隱れたる我の研究
悲喜交々至れる感想

我が教育界を襲ひたる大反動と女子教育の前途
金婚の賀筵に聞きたる無聲の聲

第八（明治四十三年—大正二年）

櫻楓會來年度の方針に就いて
精神修養上に受けたる夏季の恩惠
夏期講習會に於て學ばれたる教訓
北越に於ける女子教育奬勵の巡回講演
國運の發展と女子教育
國民教育と實業家
會員諸子の通信に答ふ
新年を迎ふる心の用意
頃日巡回中に予が最も愉快に感じたる一事
婦人の婦人觀を俟つ
多事なる今日
我が先輩の意志ある所を聞け
新年を迎ふるの辭
信仰の建設
天賦性の發揚
社會的人格の養成
家庭週報の再刊に就きて
臣民至誠の聲
東西の握手
春悼の辭
歸一協會に就きて
漫遊みやげ
時機は來れり
一粒の種子
記念植樹、理想樹
歐米旅行報告
歐米婦人思想界の變遷

第九（大正二年七月—大正六年）

明治天皇祭に際して
青年の健康力
精神界の空氣
歸一協會の使命
今秋の運動會
至誠以て佳節を祝せよ
今後の使命
自動的學風を起せ
大正維新

目次

新年感
自治の精神を養へ
十年の木の實
學生の暑中休暇
女子と宗教
戰の動機
難澁なる國語の救濟
希望ある門出
教育と信念涵養
今後の婦人の生活
我等の覺悟
我等は神明に誓はん（第十二回卒業式告辭）
叙勳の恩命を受けて
大學教育改善案
回顧十五年
タゴール氏と語りて
タゴール詩聖を輕井澤に迎へて
新年に際して國民的自覺を促す
光榮の日
創立十六年の春秋
女子大學創立の由來
今後の教育と宗教
新學期に於ける學生の新生活
人格の底深く流るゝ恩潮の源流を養へ
人生の自由と制限
八十年國に盡しゝ動機
あゝ奥田市長
黎明の祈り
今後の女子教育
わが卒業生に告ぐ
時を超越して
團體的生活の價値
今秋の諸問題
時局問題に對する我が婦人の態度如何
阪谷評議員披露會
今年掉尾の快事
光輝ある婦人の使命
世界維新
わが繼承者に告ぐ

第十（大正五年十一月—大正八年）

404
44

昭和十五年八月三日印刷
昭和十五年八月五日發行

櫻楓文庫

成瀨先生講演集（第一）
定價金四十錢

編輯兼發行者　東京市小石川區高田豐川町三七番地　仁科節

印刷者　東京市小石川區東古川町十番地　渡邊一郎

中外印刷株式會社

發行所　東京市小石川區日本女子大學校　櫻楓會出版部
電話牛込二五二九番
振替東京一〇三四〇番